

---

# 恋姫無双転生物語

高主 雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫無双転生物語

### 【Nコード】

N9859S

### 【作者名】

高主 雷

### 【あらすじ】

彼、起山おこやま 聖は車くるまにひかれそうになっていた少女を助け、その代わりに彼が死んでしまった。しかし、死後の世界で神と出会い、転生させて貰う。そこはFFの世界であった。だが、そこでもクジャとの戦いで死んでしまった。また死後の世界で神に会い、今度はかみの方から転生をしてくれと頼まれた。彼、起山 聖は第三の人生の物語が始まる。

これは作者の勢いで書くので、足りない部分があると思います。

## プロローグ（前書き）

頑張っ て書きました。なんにせ小説の書き方が良く知らないもので。まあお楽しみください。

## プロローグ

??「ぐ、どうせ僕は死ぬんだ…だけど僕だけでは死なないよ…消えてなくなれ……………アルテマ！」

??「な、何？ジタン！あれはクジャの奴の力全てを使った技だぞ！」

ジ「マジかよ！…これだけはくらつてはいけない…だけど、身体に力が入らねえ…どうする…起山おきま 聖ひやくじ…」

聖「……………」

どうする…今から逃げるつつつても全員逃げられるとは限らねえ。いや、絶対無理だ…例え逃げたとしても、アルテマは降り注ぐ…一つ一つがあり得ないほどの威力があると思う…その前にこの世界を破壊されてパーだ…せめて来る方向を変えられれば…変えられれば？そうか！うまくいくかはわからないが、成功したら全員救われる…俺以外はな。

聖「ジタン、いい方法を思い付いたぜ…皆を下がらせる……………」

ジ「…!!…ああ、分かった。…………死ぬなよ」

ダッ！

へ、嫌なこつた…んな約束守れるかよ…俺の物語は俺が書くんだぜ…その物語の終演もな。

よし、皆下がったな…始めるか！

聖「クジャ！お前のその力、俺が止める！！！」

ク「ふん、君に何ができるんだい？」

聖「できるからいつてんだろ。じゃあ、やるか……………集まれ、マグネガ！！！」

FFにあるつけ、この技……………まだやったところ見てないけど…………

……………できちゃったよ……………この感情、どう説明すればいいの？嬉しいような、悲しいような…………

ドガガガガガン！！

うわ〜い、アルテマ全て俺に命中

死んだんだー！

??「死んだのによくハイテンションでいられるものだ……………」

え？俺の心をよんだ…死後…よみとる…白い空間…目の前にいつのまにかいる人…一度あっている…こいつは！

聖「あ〜！お前は！！！」

??「やっときずいたか…」

聖「どこぞの中年おやじ!」

??「誰が中年おやじだ!」

聖「分かってるよ、久しぶりだな、神さん」

神「さんじゃなくて様って呼べ!」

こいつは俺をFFの世界に転生させてくれた本人だぜ!俺は現実世界で車にひかれそうになっている少女を助け、その代わりに命をおとした聖フラン…フラン…やべ 忘れた たしかその二年生だったんだよ。そして俺は少女を救った後、こいつにもう一度人生をやり直さねえかって言われて、そして限界値無限の能力をてにいれて転生した。おかげでジタンや仲間のビビって奴にも黒魔法を教えるもらい、さらに我流の技や、あと俺の相棒、獄神つつう黒い大剣を出現させたり消滅させたり、つまり必要なときにすぐに取り出すことができるってハナシ。それから…

神「自己紹介が長い!だんだん自慢になってきてるぞ!そもそもそれは俺が与えたんだぞ!」

怒られちゃった

聖「わかった。それじゃあ本題に入ろうぜ。」

神「…まあいいだろう。では単刀直入にいう。」

ゴクリ…

神「もう一度、別の世界に転生して貰う。」

……………は？

聖「あの〜、天国につれていくとかじゃないの？」

神「いや、まさかお前さんがここまで強くなると天国に送るのがもつたいないではないか。」

いろいろとつつかかる

聖「なあ、転生して貰うってことは、自由がきかないの？」

神「いや、基本的に自由だ。しかしやっつて貰うことはある。これからいく世界は、死ぬ奴と生き抜く奴がいる」

ふむふむ

神「で、そこで本来死ぬ者を救うか、生き抜くものを殺すか、どちらかをして貰う。ちなみに、そこはお前さんが知っているが、人物が全く違う。あと注意をするぞ。つぎに戦う相手はモンスターではない、人間だ。」

人間…すなわち戦争…ってことは、戦国時代くらいな感じだろうな。人との殺しあい…相当な覚悟が必要か。……………よし、とりあえず救えってことにしよう。

聖「わかった、じゃあ転生させてくれ。」

神「よし、では目を閉じる」  
俺はゆっくりと目を閉じた。さて、新たな物語の始まりだ……けど、  
何処に通ってたんだろう…聖フラン…だめだ、思い出せない…まあ  
いいや。



## プロローグ（後書き）

いかがでしたか？感想を書いていただけると嬉しいです。ちなみに、これは不定期ですが、自分なりに頑張って早めに書きますので宜しくお願いします。

## 第一話 董起山（前書き）

いや、勢いで書くのはきついですね。ちょっと会話が長いかもしれません。お楽しみください。

## 第一話 董起山

……

俺はゆっくりと目を開けた……どっかで聞いたことのある言葉だね  
なんかわかんないけど、この言葉、俺のお気に入り

それはおいといて……今、俺は何故か森のなかに居ます。まあ前  
世（FFの方）もこんな感じで始まったからな。流石に二度目は驚  
かないよ……とりあえず、この場を動こう……  
……

とりあえず動こう……

動けねえ……てか、手足に力が入らないし、うわ！泥がつ……え  
？……なんか、てが小さくなっているんですけど……うえ！？足  
も……！！！！！！

聖「バブアブ、ブバ！？（なんじゃこ、てえ！？）」

待て待て、落ち着け、落ち着け、俺。まさかとは思うが……信じた  
くない……もう一回しゃべってみよう……まず基本から……

聖「バブバブア…アウアブバ…アウバーウバブア（あいうえお…  
こりゃダメだ…現実逃避してえ）」

…認めよう、あー認めようではないか！俺は、何故か赤子だ…

《当然だ…》

あ、こいつは…

聖「バ〜バブバブア（や〜どこぞの中年おやじ）」

《誰が中年おやじだ！！それに声に出すな！頭でも通じるぞ！》

分かった、こんな感じでいいよね。

《あ、ああ。》

…？なんでそんな動揺してるの？

《あいや、なんでもない。》

？とりあえず、質問があるからきくぜ。

《あ、ああ。》

なんで今俺は赤子なんだ？たしか一回目の転生はそのままだったぞ。

《…転生というのはもともとは赤子からやり直すのが基本だ。あの世界だって、本来は何処かの家で産まれてつくはずだった。だがお前はもとの世界と同じ身体でいた。それは俺がお前の身体と似せて

作った、すなわち作られた身体だったのだ。》

あゝ、だから限界無しで、更に力がつくのが早かったわけか…寒い…あのさ、これも作られた身体なの？

《ああ、そうだ。能力を引き継ぐためには新しい身体が必要だったからな。》

まあ、わかった。…さみい…それにしても何故赤子からにしたの？

《この世界の世の中は知ることが多すぎるからな。だから赤子からにしたんだ。ちなみに、あともう少して拾ってくれる人が来るぞ。》

ああ、わかった。それにしてもさ、なんか凄く寒いんだよね。肌に直接来るような感じの寒さが…

《それは…お前、顔をしたに向ける。》

顔をしたに？

………なん………だと？………

何故…何故…何故裸なんだ…！…！

おいゴラァ！くそ中年おやじ！！なぜこの姿で転生させた…！

《その理由は、俺の趣味だからだ》

趣味！？趣味で俺を裸にしたねか…！

《ちなみに、その身体は俺の好みに変えた》

どうでもいい！そもそもお前の好みかよ！

《なにいつてるんだ！百人中百五十人が可愛いというぞ！》

なにその限界突破！！振り替える率150%！？ふざけるな！

《やべ！自分で作ったのに可愛すぎて、鼻血がでた…》

マジ黙れ！

《ぐ！しくじった！鼻血でもモニターが青に染まった！！》

青に染まった！？お前エーリアンか！！てか、どこぞのエーリアンだよ！！

《あ、バレた？》

バレたじゃね〜！！本当にエーリアンだったのかよ！！

ん！？誰か来た…

??「あなた！！あそこになにかがあるわ！！」

??「ほんとだ！！あれは、人？」

??「いいえ、人でも赤子だわ！！」

??「な、何！？気晴らしに散歩してたらまさかこんなことがあったわ…！！」

??「どうしたの！あな…！！」

?「なんで俺を見た瞬間止まるんだよ！」

??・??「か……」

か？

??・??「可愛い……」

おわ！

??「あなた！しかもこの子…裸よ！ブバツ！」

??「げ！陽！！すっかりしろ！鼻血が凄いで！」

??「ええ、なんとか大丈夫だわ、それ《ハア、ハア》いいのに何故《ハア、ハア》かしら……」

??「とにかく、《ハア、ハア》だ！これも《ハア、ハア》だ！この《ハア、ハア》！！」

なんか、あの二人が相談してる…おい、中年おやし…てめえの荒い息のせいで全くといっていいほど聞こえなかつたぞ！あの糞神…俺の我流メガフレアでいつか存在を消す……

ヒヨイ

おわ！？

??「よし、誰かにとられる前にこの子に名前を着けて我が子とし

て育てるぞ！」

…拾ってくれるねはありがたいが、取られる前って、どういうこと？

??「決めたわ！これでいいでしょ！あなた！姓が董、名が雷、字が起山、真名が聖でいいわよね！はやく帰って育てたいわ！」

…名前ぐらい心を込めろよ…凄い適当に聞こえるぞ…そして、身の危険も感じるぞ……

??「よし、けっ《ハア》~~~~~ン、お持ち帰りしたい…もう一度、ここへ戻ってきて~~~~！けど、殺すのには勿体ない可愛さ……ハア、ハア》」

だから、話してるときに割り込むな！

こうして俺は新しい名前がついた…平気だよね、これから…



## 第一話 董起山（後書き）

いかがでしたか？なんか自分で思ったんですけど、これって、自己満足ってやつですかね？書いてて、自分のことを考えてました。しかし、自分、プレッシャーに非常に弱いので、投稿するとき、凄く緊張します！

## 第二話 六歳での旅立ち？（前書き）

ここで、月登場です。月、キャラ崩壊するかも…

## 第二話 六歳での旅立ち？

聖「うお~~~~りや~~~~!」

??「せいや~~~~!」

ガキンツ！      ピタリ

聖「ふ~~~~、俺の勝ちだけ！父さん！」

父「ふ~~~~、あり得ないな、まさか六歳にこの私が負けるとは……」

…はい 起山 聖です 俺はあの日、拾われてから六年経ちました

あ、ちなみにもうお分かりだろうと思うけど、新しい名前は董雷、字はもともと俺の名前の起山、真名も俺の名前の聖。

どうやら、俺は三国志の世界に来たらしい…しかも、なんとあの酒池肉林じゃ〜とか叫んでそんな董卓家に拾われてしまいました…けど、三国志と違う点があるんだよね〜

あの董卓が…いつも死刑じゃ〜っていつてそんな董卓が…虫一匹殺せそうにない可愛い可愛い女の子なんですよ どうやらここは三国志のパラレルワールドらしいです

あ、あといい忘れてたけど、この世界には真名っていうのがあって、なんでも信頼する人にしか教えちゃだめなんだって。もし勝手に相手の真名を呼んだら拷問して、気絶したら水をかけて起こして、奴隷として働かせて生き地獄をさせられても文句は言えないんだって…え？酷すぎるって？しょうがないじゃん。父さんと母さんがそう説明しろって言ってたんだから。

まあ、それはさておき、今は城にある訓練場で修行中 え！？まだ

忘れてるめがあるだと！？あゝ、とびすぎってどこか…嫌だ、僕は説明したくない！あれこそまさに生き地獄！今は平気だけど、初めてここへきたときは、誰が色々な世話をするか騒動になったんだよ！あのなかにも父さんが混じってたんだぜ！？こんなこと、説明できるか！！…あ、……………言っちゃったぜ

まあ、話は戻るけど、いま父さんと鍛練中 決着はついたけど、俺の勝利でな

おっと、いまの状況は俺が父さんの槍を弾いて、俺の相棒の大剣が父さんの首に止まっているところ

父「くそ、六歳に負けるとは…しかもその大剣、何処から出したんだ…こんなもの、我が家にはおいてなかったはずだ…しかも右手右足左手左足全てに重りをつけている状態で大剣を操るとは…」

ああ、そうさ！なんか六歳の俺にハンデとかつけやがって！しかもその前はランニングさせられて、スタミナが無くなったところを狙うとは、…………卑怯！だから、俺も言っちゃったさ

聖「父さん…明日があるさ…同情するぜ…へ(。(ノ」

見下してやったぜ！ざまー！

父「…やはり、こうするのが正しいのかもな…聖よ、もっと強くなりたいか？」

ん？なんだ？いきなり真面目モードですか？まあ正直に言いますか。

聖「ああ、俺はもっと強くなりたい…自分でも感じるんだ…俺には秘められた力があるって…(出してないだけだね)」

父「そうか…実は私の知り合いで武術がとても強い奴がいるんだ…  
その名は…」

聖「その名は…」

父「会ってからの楽しみだ！」

は？コイツ…上等だ！なら今すぐにでも会いに行つてやるか！

その前に、義妹の月（董卓のことで、今は三歳）に会いにいかなく  
ちゃ！母さんから金と地図を貰いに行かなくちゃ！ダツシュ！

ピュー！

父「。。。。」

（月side）

母「……………この場合だと…」

私の名前は董卓、今私は母様に時の書き方を教わっています。です  
が、さつきから外が騒がしいんですよ。どうしたのでしょうか…

バタン！

聖「母さん！月！今から俺は旅に出る！」

え？今…なんて…

（月end）

俺は父さんの言葉をきいて、俺の心に火がついたぜ！

うおー！廊下だということとはわかるが、注意されようが関係ない！

ドドドドドドッ！

俺の両足が摩擦で燃える！

母は何処だと唱えて叫ぶ！

このネタはやっぱ無理がある！なに！？摩擦でマジで燃えそう！  
母は何処だと唱えて叫ぶって、マザコンに聞こえてくるー！血は繋がってないけど、これはやっっちゃ駄目だ！

お、部屋が見えてきた！とりあえず…乱入！

バタン！

しゃ〜！母さんだけじゃなく、月までいた！ラッキー！

聖「母さん！月！今から俺は旅に出る！」

おい、なんだよ！しらけてるのか？

母「今、なんて…聖、正気なの？」

い、意外にひどい…だが！

聖「ああ、そうさ！俺はいつだって正気なのさ！父さんがこの道を教えてくれたのさ！」

母・月「あなた（父様）、後で覚えてなさい（てください）」

聖「（。。。）」

い、いま聞こえたぞ！いち早く旅に出なくては…危ない！

母「…聖、あなたはいつもそうだけど、なんと言おうといくの？」

聖「ああ、俺の合言葉は、有言実行だ！」

母「…わかったわ、じゃあ明日のうちに準備しておくわ。あと、月と少し話してあげて…月、勉強は中断よ。」

聖「じゃあ、宜しく、母さん」

そう言つと、母さんは頷き、無言で部屋を出ていった。さてと、

聖「…月、話、聞いてたよな。俺は明日、旅に出る。」

月「……」

うっ、気まずい…

聖「……」

月「……も……」

うん？若干震えながらいつてるな…うお！俯きながら涙流してやがる…兄さん…感激！

月「…戻つて…きますよね……」

か、か、かわい〜〜！こんな妹、この世に一人として存在しないんじゃない？

聖「ああ、月。必ず、戻ってくるよ。義理でも一応家族だしな！だから、笑顔を見せてくれよ…月…」

月「……！！はい」

立ち直るのはえく！「ギャー！！」！？

月「！聖兄様、ちょっと部屋を後にしますので、今日は休んでてください」

聖「（コクコク）」

月「それでは…」

月、キャラ崩壊するなー！戻ってこい！ゆE「ギャー！！」…寝ましょう、はい、この部屋で寝ましょう、出たら危ない感じがしますので、はい。

こうして、次の日には母さんと月とポロポロの父さんに見送られて旅？に出た。何故ともをつれないかって？それは、父さん曰く、お前は強いから大丈夫だ！だそうです。あ、ちなみにこのあと父さんは生き地獄という名の拷問が待っていたそうだ。なにもそこまでし



なくても…月、兄さんが帰ってくるまで、キャラなおっといてくれ…

オマケ

父「ギャー！！や、やめてー！！すみませんでした！！ごめんなさい！！」

母「ウフフ、今日はタップリと痛め付けてあげる」

## 第二話 六歳での旅立ち？（後書き）

いかがでしたか？はい、滅茶苦茶な設定だったかもしれませんが、許してください…これでも一生懸命に書きました。主人公設定、どこで説明しようかな…

## 主人公設定

姓：董

名：雷

字：起山きざん

真名：聖せい

性格

何故かいつでもハイテンション。戦でも日常でも何処でも全速前進。好きなことは基本的に面白いことならなんでもOK。だが、何故か虫と同性愛が極端に嫌いで、ミミズを見るとファイガを連続で放ち消滅させ、蛾をみるとグラビガで落として、ゴキブリを見ると…精神崩壊します。同性愛に関しては、拾われた時に父にあたる人によく襲われそうになったので、それがトラウマになってしまい、反同性愛グループを企てた事があったが成果は全くなく、とにかく男だろつが女だろつが同性愛だけは処罰！というのをモットーにしている。

髪型：黒の自然体

身長：123

体重：24

## 第四話 弟子と師匠（前書き）

自信無くししまった…もともとだけど

## 第四話 弟子と師匠

（月side）

聖兄様が家をでてから一日経った。この城が物凄く静かになった。出ていくときに感じた寂しさ、やっぱり兄様がいた方が賑わいだし、楽しかった。

父「いや、可愛い子には旅をさせるとは、まさにこの事だ！」

父様、色々と言いたい事があるのですが、聖兄様は確かにお強いのですけど、私でもわかります。まだ、早いと思います……

母「何を訳のわからないことを……まだ六歳の子に旅をさせるって、貴方……本気ですか!？」

父「な！だって聖は自分の目標みたいなものを持っているから私の知り合いの元に行かせたのだ！私は間違っていない！そうだろう！我が娘よ!!！」

私にふらないでください。あと、私は母様に賛成です。

父「な！月！なんかいかにも私が間違っているという目線ではないか！しかも自分の意見を正確に分析したような瞳……我が嫁よ、どんな教育をしたらこんな三歳で国を納められるように成長させた!!！」

父様、なんだか負け惜しみみたいに聞こえるからやめてください。あと、分析まではしてません。

母「あなた！一日かからずに行ける距離にはありますが、そもそも  
ともをつれずにいくのは…あまりにも危険です！！」  
…え！？

父「いや！そんなものは必要ないだろ！だって、聖は強いし、なん  
と言つても重りを着けた状態で私に圧勝するほどだから、賊などに  
あつても返り討ちするだろう！」

母「あなた！今すぐに聖を追つて！」

父「え！？だつて…」

母「あの子はまだ本当の戦場を知らないのですよ！！」

父「いや、だからこれで…」

母「お忘れですか？聖はまだ六歳です！！」

父「……………あ—————！！今から聖を大  
急ぎでおつてくる！！」  
ダダダダッ！！

し、聖兄様、大丈夫でしょうか……

（月end）

俺はあれから、地図に従つて歩いていき、目的地に着いた。そこは  
山の中で、そこに道場みたいな小屋があつた。それから一日経つた  
のだが…

??「聖！！いつまで寝込んでる！！！！」

これが、そうとうきついなだよ…そして、今俺は丁原師匠を背中にのせて、腕立て伏せをやらされてる…回数は師匠の気分だそうだ…

丁「よーし、次は手合わせだ！さあ、早くその木刀を持って！」

聖「ハア、ハア…ちょっと師匠…息を整えてからでも…」

丁「馬鹿者！休んでいる暇があるのならば修行じゃ！」

こ、この人滅茶苦茶だよ…俺は山小屋の中に入ると、そこには道場着をきたおじさんが重り付きの木刀を振っていた。まあ、それが今の師匠の丁原師匠だったんだよ…俺は突然ながらも、その人と勝負を挑んだ。結果は、スタミナ切れで俺の負け。それで師匠はなんか火がついたみたいで、俺の弟子にならんかって誘われたわけ…

丁「ハアーーーーー！！！」

パン！

聖「いつて~~~~~！！！」

丁「馬鹿者！疲れたからと言って気を抜いてはいかん！！罰として重りを着けた木刀で素振り！終わりは俺がいいと言っただじゃ！」

聖「ひえ~~~~(TOT)」

あり得ねえほど厳しい…ん？

??「うお~~~~~聖~~~~~！！！」

聖「父さん!?!」

ガバツ！！

うわ！？

父「大丈夫か！？賊とかに襲われて死んでないか！？」

いや、死んでたらここにいないし…

丁「コラー！何をサボっとる！早く素振りをせんか！！」

聖「はい！！…父さん、悪いけど、修行があるから…」

父「分かった…あと、お前は戦う道を選んだのだから、人の死というのもおそわらなくてはいかん…まあまだ早いかな…では父さんは帰るぞ！！！」

ピュウ〜！

……なんなんだ、あれ…

丁「コラー！早くせんか！叩かれないか！」

聖「ごめんなさい！」



ひとどおり修行は終わり、俺は師匠に呼ばれて森の中にいる。

聖「師匠、お呼びでしょうか？」

丁「ああ、ちょっと話したいことがあってな…」

ん？なんだろう…

丁「まだ早いかと思うが、いまの天下をみてどう思う？」

今の天下か…少しは知識としてあるが…まあ細かいところは知らないが…

聖「はい、この大陸はもはや腐りかけています。いずれ賊のかずが増え、群雄割拠の時代にも突入するでしょう。」

丁「ほ、大したものだ…して、お前は何故力を求める」

聖「はい、初めは興味本意でしたが、自分のての届く範囲を、いえ、守れるもの全てを守りたいからです。」

丁「…儂から見ると、お前は秘められた力がありそうだ…」

え！？本当にあつたんだ…

丁「これからくるのは人と人との殺し合い…それを乗り越えられるか？」

聖「はい！」

丁「そうだ、それで儂の真名の事だが、それは儂と壁を越えてから

教えよう。」

聖「はい……！」

こうして、俺は小屋に戻っていった……目標か……あっても悪くはないな………

オマケ

聖「しかし、この辺は虫が多いですね……」

丁「なんじゃ、どうしたいきなり……」

聖「いや、自分、虫苦手なんですよ……」

ブチ！

……

なんだ……いきなり何かが俺の足で潰れるおとが………ゴクリ



#### 第四話 弟子と師匠（後書き）

今回はどうでしたか？結構まともに書いたつもりですが……やっぱり駄目かな…

## 第五話 武器（前書き）

短いつす！つ、次こそはうまく書くつす！オマケの方がながいかも  
…

## 第五話 武器

ガキン！ガキン！

聖「うおー！ー！ー！ー！」

丁「せいやー！ー！ー！ー！」

ガキン！！ピタリ…

聖「師匠、また俺の勝ちですぜ！」

は〜い コンニチハ 俺はあれから6年経過しました〜 え！？飛ばしすぎ！？だって、あまり面白く無いじゃん いつも通りに修行！ってな感じだもんな！ただ変化があったのが、あの日から一年後、師匠をついに倒したんだぜ！そして一年過ぎることによって、徐々に強くなっていき、現在の俺はもう圧倒的だぜ！重りをつけても勝てるぜ

丁「ふ〜、お前、強くなりすぎじゃ…まさかこれほどまで行くとは…」

聖「へっへ〜 余裕余裕」

丁「調子にのるな！馬鹿者！言っとくが、俺より強いやつはまだまだいるのじゃぞ！」

聖「へ？そうだったの？てっきり一番強いのかと…」

丁「ハア〜〜、もういい…さて、そろそろお前も必要になるじゃ

らう…聖！ついてこい！」

聖「はい」

丁「（こやつ、本気に調子ずいておる…）」

さうで、今俺はなんと！武器庫にいます！俺はまあ相棒の獄神を持つてるけど、選んどかなきゃいけない感じだったからな！一応取るぜ！

丁「さあ、お前もそろそろ本格的な武人として鍛えるため、武器を選んでもらう！この中の自分が好きなものを選ぶがいい！」

では遠慮なく……………

こ、これは…なんか青龍え……なんだっけ……とにかく、関羽が持つてそうな武器の形でしかも色は全体的に黒！これはまさに……かつきー……よし！これに決定 あと、うお……マジで！？なんか前田慶次の持つてそうな朱槍があった！よし！この二つに決定

聖「師匠！これに決めました」

丁「…して、どちらを持つんじゃない?」

聖「へ? いや、両方だけど……」

丁「な、なにー!ー!ー!」

うわ!?!いきなりなんだよ……

丁「う、うおっほん! とりあえず、ふって見せる」

聖「は、はあ」

ブオン! ブンブンブン!

丁「(あ、あり得ぬ…この二つは斬るといふより砕くように出来ている…そのぶん、重さがある…それを二つ…さらに素早く鋭く力強い振り…儂はとんでもない化け物を育ててしまったらしい…)」

聖「ふ〜、師匠! こんな感じでいいでしょうか!」

丁「あ、ああ。ではこれからはこの武器を用いて修行を行う…」

聖「はい!」

さてと…この槍に名前をつけるか…関羽の持ってたような武器は、黒龍でいいか。そして、朱槍の方は…破神でいいか。

こうして俺は、黒龍と破神と出会った。



オマケ

ジャキ!

丁「これ、そんなに殺気飛ばさんでも…」

聖「師匠!ここら辺は虫が多いです!こっつしていると虫が近寄ってこないのです!」

丁「(む、虫でもわかるほどの殺気…正直、俺も結構この殺気に耐えるのは辛いじゃぞ)」

ガサガサ

聖「む、虫か!?!」

丁「聖!待つのじゃ!」

ダッダッダッ…ピタッ

聖「……………」

丁「はあ、はあ、なんじゃいきなり」

聖「…師匠…あれをご覧ください…」

丁「む？…熊？」

聖「これがなにを意味しているのかお分かりですか？」

丁「はて…熊が二匹…水浴びでもしとるんじやろ…」

聖「違います！あれは俺が見る限り雄二匹！これは何を意味してるのかお分かりか！」

丁「（いや、じゃからただ水浴びして遊んでいるだけではないのは…）」

聖「あれはまさしく…同性愛…！」

丁「いや、違つと思つぞ」

聖「師匠！この世にあつてはならないものが二つあります！ひとつは虫…もうひとつが…同性愛…！師匠！討伐命令をください…！」

丁「いや、じゃから」

ダッ！

聖「うお~~~~！師匠の命令のもと…貴様らを討伐しにきた！貴様らは同性愛というやつてはならないことをしてしまつた！男どうしでヤツて、そんなに楽しいか！貴様らのようなやからがいるからこ



第五話 武器（後書き）

いかがでしたか？ねえ、うまくかけたよね？よね？よね？

## 主人公設定2

年齢：15歳

身長：178

体重：70

### 性格

子供の頃より少しはましになった。冷静な判断はとれるようにはな  
ったが、やはり虫と同性愛が許せない。テンションは子供のと  
きと同じ。楽しければ何でもOK。

武器：黒龍（偃月刀） 破神（朱槍） 獄神（大剣）

獄神は本気になったとき、怒りに溢れていたとき、槍二つを所持  
してなかったときに出現させます。

趣味：歌、武器作り、武器改造

オマケのオマケ

真名：陽

字：烈繕

名：情

姓：董

聖の母親

真名：閃

字：仲銀

名：然

姓：董

聖の父親

## 第六話 戦と旅立ち（前書き）

テスト一週間前！小説書いてる時間が…親のみぬすきにやってたので、結構雑かも…こつこついうとき、親の目は戦闘力が5000倍になつて見張ってるからこえ〜〜

## 第六話 戦と旅立ち

丁「……きろ……………お……………ろ……………お  
き……」

……ん？師匠？こんなに朝早くから何だっって言っただよ……

聖「うーん、あと2日寝させて師匠……」

丁「2日も寝るのか！早く起きんか！このバカもん！」

バキ！

くく！いつて！寝ている体制&寝起き〓寝ぼけているノーガード状態を襲うとは……師匠には勝てない……しかも腹を狙うだど！？

聖「ぐほ〜〜」

丁「早く起きろ！外で待っている！」

スタスタ……

師匠、酷い……

さて、それはさておき、俺は武器を選んだあと、早速師匠と手合わせしたんだが、木刀のようにはいかず、師匠に久しぶりの敗北をくらった。やっぱり無理があったかな……通常より重くつくられてる黒龍と破神二つをもつのは……けどなんで朱槍がこの世界にあるんだろ……ま、いっか。んで、ひたすら師匠と手合わせの日々……そして、



師匠に圧勝する頃になったのは、今現在の15歳になった頃だ。さて、また手合わせだろうから、黒龍と破神を持ってくか。

.....

聖「師匠〜！」

丁「やっときたか！遅いぞ馬鹿者！」

聖「では、いつも通りの手合わせですね？」

丁「いや、今回は違う…聖よ、お前もそろそろ戦を知った方がいい…これから戦場に出るぞ。これが、最後の修行じゃ…最近、賊の数が異常に増えているそうだから…そこで、賊と戦い、こゝ殺す覚悟を試すのですね…」「…そうじゃ。」

殺す覚悟か…

聖「師匠、俺は一ヶ所にとどまるのはこれが限界です。その試練、乗り越えて見せましょう。」

丁「うむ。では行くぞ。」

聖「はい、師匠。」

さて、やるか…人同士の殺しあいにな。

師匠に案内されたのは、近くの村だった。そこは、もう黒い煙がたっていた。どうやら賊に占領されたのだろう。

聖「師匠、ここからは俺一人で行きます。」

丁「む？何故じゃ」

聖「物語に主人公は二人もいららないでしょ。これが、俺の物語の第一歩となるんですからね。」

へ、これは俺のストーリー、どう書くかは俺が決めるものぞ。

丁「…よし、では行ってこい」

聖「はい。」

俺は村に全速力で駆け出した。

村で見たのは、酷い…酷いしか言い表せない…子供は殺され、老夫婦は遊ばれたように串刺しにされ、女は服を剥ぎ取られ、犯されて殺され、それを防ごうと立ち向かったとみられる男は無残にも首をはねられ、一番最悪なのが、村長らしき人は肌を剥ぎ取られ、首と胴体は繋がってなく、頭はもう形跡がないほどにグチャグチャに潰され、胴体はケツの穴から槍が刺さってる。勿論、肌はない。こんなのは初めてだ。ありえない…銀色の髪の毛の尻尾をはやしたナルシスト(クジャ)でさえこれまではしない…吐きそうだ…  
??「…そ、その…せい…ねん…よ…」

下から声が聞こえる…背中に刺されたあとがある…男の人だ…

聖「だめだ！これ以上声を出すな！死ぬぞ！」

男「…いい…さ…もう…じき…おれも…死ぬ…」

息が荒い…やめろ、これ以上は…

男「…た…たのむ…この村を…賊の

手から……………すくって……………く……………れ……………」

聖「……おい、すっかりしろ！おい……！」

男「……………」

……………男性は死んだ……………この人も村を守ろうとした一員だろう……

??「いやだ！はなして！」

??「おとなしくしねえか！このガキ！」

！！！！後ろから声が……

少女と、賊？

ん？賊が集まってきた……

賊1「へッへッへ、もうこの村にはこいつしかいねえようです、頭。」

賊頭らしきひとが、赤く、短い髪で、まだ13歳位の少女に近づく。

頭「おい、ガキ。この村の住民は何処へ行ったか教えな。」

少女「知らない……知らないから……だから……はなして……」

少女が泣きながら言う。

頭「へ、あくまでも教えないか……なら、少しお仕置きしなくちゃい

けないな…おい」

賊どもは少女の手足をふさぎ、動けないようにする。

少女「キヤーーーーー！」

賊頭は少女の服を剥ぎ取る…

少女「！！助けて！お兄さん！助けて！！」

少女は俺の存在に気付き、助けをこう。賊どもの視線も感じる…

頭「おい、ガキ！この村人が何処に行ったか知らないか」

笑いながら訪ねてくる…汚い笑いかただな…

聖「……………」

俺は静かに右手に握る黒龍と左手に握る破神をさらに強く握った。

頭「へ、こいつも答えねえか、ちよつと待ってるよ、こいつを犯したあとだ。」

少女「キヤーーーーー！！！！」

頭が少女に手を伸ばす。

もう、限界だ…こいつら、何処まで非道な行動をすればきがすむ…俺は二つの武器を握り、賊に斬りかかる。

ザシュ！

頭「ぎゃーーーー！俺の腕が！！」

伸ばした手をおれは黒龍で切り落とした。

聖「…その子に触れるな…」

俺はヘイストをかけ、自分の全速力で、もう見えないと言っているほどのスピードで、少女を押さえていた賊どもを斬った。しかも、手足だけを確実に…

賊「ぎゃー！ー！」

少女は啞然としている。俺は少女を抱き、走り出した。

頭「ま、まて！おい！野郎ども！奴を捕まえろ！」

賊頭の掛け声で次々と賊が俺を追いかけてくる。取り敢えず、ヘイストで更にスピードをあげて賊の視界から俺を外させる。

賊「ち、皆！ここらにいるはずだ！」

賊がおれを探している。路地に身を潜めて、少女を降ろす。

少女「……」

少女はボロボロになった服で体を隠す。

聖「ここにいろ、俺は奴等を始末してくる。」

俺は賊のところに行こうとするが、

少女「……」

少女が俺の服を掴んでいた。

聖「……………」

少女「…………あの」

少女が話始めた。

少女「…先程はありがとうございます。私の名前は高順で、真名を赤花せきかと言います。」

聖「…俺は姓を董、名を雷、字を起山、真名を聖という。」

取り敢えず、助けたお礼的な感じできたから俺も真名で返す。

赤「…聖さん…」

聖「赤花、俺は奴等を退治してくるから、ここにいろよ。」

赤「…はい。」

すると掴んでいた俺の服をはなした。さて、賊どもにあの中年おやじのところへ逝かせるか。

《誰が中年おやじだ!》

久々に出てきやがった…お前、もう出てくるな。

さて、行きますか。

ダッ!

聖「賊ども！貴様らを討伐しに来た！もう逃げも隠れもしない！さあ、こい！」

賊「うおーーーー！！！！」

全員来やがった。もう我慢ならねえ、殺す

ザシユ！ザグ！ズシャ！

賊「ぎゃーーーー！」

賊「ぐわーーーー！」

俺は二つの武器を鬼神の如く振り回した。近づいたものを殺し、遠くにいるものは振ってる時にエアロをかけ、かまいたちをとばして切り刻む。次々に死体は増えていくばかり。

賊「ぎゃーーーー！こいつ、人間じゃねー！」

人間じゃねえ？なにいつてる。てめえらの非道さのほつが余程人間じゃねえよ。

賊「ぎゃーーーー！助けてくれー！」

助けてくれ？そうやって命乞いをした奴を、お前は何人殺したと思ってる。

ザシユ！ザシユ！

ここにいる賊ども、一人たりとも生きて返さねえ！



俺の一方的な虐殺は、賊頭一人意外全員死んだ。

頭「ひ！ゆ、許してくれ…頼む…」

この言葉、かなりイラツとくる…

聖「貴様、今まで…もういい」

口にするのがだるくなった。

聖「…貴様は特別だ。俺の技で貴様を消してやるっ…」

俺は、体制を低くし、武器を構える。

聖「…消えろ、『フリーエナジー』」

俺は黒龍を地面に降り下ろし、唱える。すると地面が爆発し、かしらはその爆発に巻き込まれて、影を残して消えた。

聖「……この世界は、こんな世の中が続いていたのか」

俺は、つくづく思った。俺は好奇心から武力を着けた。だが、それではだめだと今気づいた。俺は、これからは武力を自分のためには使わない……殺すのは、とても重い……だが、それを見てみぬふりをするのはもっとだめだ。その時

ゾロゾロ……

近くの居酒屋から村人が出てきた。

男「あ、あんたがここの賊を倒してくれたのか？」

俺は頷く。

男「もう、賊はいないんだよな、この村には……」

俺は、もう一度頷く。

聖「ああ、腐れた賊どもは、【魔戦士】のこと、董起山が退治した！」

やべ、なんかのりでいつちゃったよ。魔戦士って、なんかつまりく  
な……

村人「……うお~~~~~~~~~~~~!!!!」

男「これで安心して暮らせる！ありがとう！」

なんか代表らしき人にお礼を言われた。

男「よし、皆！今日は祭りだこの村を守ってくれた【魔戦士】に  
むけて祭りだ！」

きや~~~~！恥ずかしい！のりでいったただけなのに！

おっと、忘れてた。赤花を呼びにいかなくちゃ。

聖「おい、赤花？いま終わって戻ってきた」「聖さん！」「うお！？  
いきなりどうした！」

裏路地に戻ってきたら、いきなり赤花に抱きつかれた。てか、やめ  
て。服破けてるから、物凄く気になっちゃうんだよね。

赤「良かった、本当に良かった……」

聖「あの〜、その〜／＼／」

すげえ〜気になる……まじやめて……

赤「は！？ごめんなさい／＼／」

取り敢えず離れてくれた……畜生！こっちのほうがないじゃないか！

赤「あの〜、どうしたのですか？お顔を真っ赤にされて…」

聖「あの〜、それ…／／／」

赤「はい？………！！／／／」

どうやら気づいたらしい。身体を丸めて隠してる。

よかつた〜、二枚着といて…一枚わたすか

パサ

聖「取り敢えず、これを着て／／／」

赤「はい／／／」

赤花に服をきせて、裏路地から出た。なんか村人におちよくられたんだけど、とにかく祭りを少し赤花とまわってから俺は師匠の家に戻った。

聖「師匠〜！師匠？」

おかしい、何処にもいない…てことは、馬小屋にいるのかな？

聖「師匠〜！師匠？」

やっぱりいない…けど、白い馬がいる。その下に金が入ってるのかな、袋と…紙？

袋は金が入ってた。かみには大きく「豪賀<sup>こうか</sup>」と書かれていた。

聖「ふ、師匠、結構物好きだね。」

どうやら師匠は俺が旅に出ることを予測して、馬と金を用意してくれたのだろう。あと、この白馬にちゃんと武器をしまつところがある、便利だな。あと、この紙。多分師匠の真名だろう。

聖「よし、これからお前と旅をする、宜しくな。」

馬「ヒヒーン！」

聖「んじゃ、これからはきみのことは…白紀<sup>はくき</sup>でいいか？」

白「ヒヒーン！」

聖「んじゃ、行くか！」

村人「もういつてしまわれるのですか？」

聖「ああ、俺は一つの場所にはなるべくとどまりたくないからね。それに、まだまだ困っている人はたくさんいる…」

村人「そうですねか…」

聖「では……………」

俺が馬を進めようとした時、

赤「聖さん！」

赤花が呼び止めた。

赤「聖さん、私、強くなります！そして、いつか貴方の役にたてるように頑張ります！」

聖「そうか、期待して待ってるよ。」

赤「それと……………」  
「ニョニョ……………」

聖「ん？どうした？」

赤「いえ！何でもありません！//////////」

ピュッ

聖「…いつちゃったよ…まいつか。」

こうして、俺の物語の第一歩が始まった。

## 第六話 戦と旅立ち（後書き）

どうでしょう…もう気にしません！…どのようにならうと気にしません！俺は後悔はするが反省はしない！…あね？

第七話 山賊？（前書き）

訂正しました。





聖「しゃー！ついたー！村だー！」

あの魔の森から出れたぞー！よし、早速飯だー！

聖「よし、白紀！とりあえず行こう！」

ガラガラ

聖「こんち………わ？」

シュババババババ！

バタ                   ズララララ

女将「あ、いらっしゃい

??「女将、これでいいか？」

女将「あんたもう少しまともなきりかた出来ないのかい？ほら、お客さんがびっくりしちまったじゃないか。」

……なんだいまのは…女将の横にいる黒髪の綺麗な女性が大根らしきものを切っていたんだが、切り方が…大根を上に向けて空中に浮いてる時に包丁で切り裂き、大根が落ちてきた瞬間、千切りの状態になっていた…

女将「はあ、じゃあ次は芝刈りにいつてこい！」

女将…口調をいきなり変えるな…びびるぞ…

??「わかりました…」

バタン

聖「女将、さっきのは誰だ？」

女将「あんた気づかなかったんかい！？あれは最近噂になってる【黒髪の山賊狩り】だよ。」

聖「へー…」

黒髪の山賊狩り…誰だ？

女将「今あの子を雇ってるんだ。それより、注文は何にする？」

聖「じゃあ……」

聖「か〜、食った食った！一日ぶりのちゃんとした飯だったな。それにしてもうまかったな〜」

さて、このあとはどうするか…宿でも探すか……………ん？なんだあの土ぼこりは…げ！こっちに向かってくる！

??「そこのお兄ちゃん！邪魔なのだー！」

ドカーン！

どき

ドドドドドッ

…ぶつかっちまった…がきの集まりみたいだったが、先頭にいた赤髪の少女は力が強かった…

??「あの、大丈夫か？」

聖「いてて、ああ、ありがとう。」

すく

ん？こいつ…

聖「あ！さっきの店にいた黒髪の人じゃん！」

??「ん？ああ、先程の客か…」

ん？さらに…あー！

聖「そ、その武器……………まさか君、関羽！？」

??「ん？よく私の名を知ってるな…そうだ、姓は関、名は羽、字は雲長だ。」

マジかよ…

そして思い出した！このぶきの名前は偃月刀だ！

聖「おう！俺は姓を董、名を雷、字を起山だ！宜しくな！」

関「ほう？？では【舞う妖術師】とは貴殿のことか？」

ん？なんだそれ？たしか前の村では魔戦士って名乗ったはずだが…

聖「…なんだ、それ？」

とりあえず聞いてみた。

関「この近くに賊に占領されていた村があったそうだ。そこにとある二つの重そうな武器を持った青年が現れ、その村の賊を全滅させ

た。しかも、ただ武器を振り回してただけではなく、武器と妖術を使い、遠距離にいる敵すらも切り裂いたという。」

聖「あゝ、それ俺だ」

関「！！……やはりそうか」

あちゃ〜！口に出しちゃったよ！多分このあと手合わせ願う的なパターンだよ……

関「では、さっそくだが、「手合わせだろ？」「…はい」

予想通り

聖「うん、後で手合わせしてあげる。」

関「よろしく頼む。」

聖「あと、さっきの子供の集まりはなんだったんだろう」

関「あれは、確か女将が言うには鈴々とか言うやつがきいている、鈴々山賊団とか言うものらしい。」

ふ〜ん。てことは、山賊を目指してるのかな…だったら排除み考えなくちゃいけないな。

関「しかし、その子は小さいときに賊に襲われ、親が死んでしまったとか。だから、これは寂しさから出てる行動らしい。根は本当にいいやつらしい……」

……

聖「関羽、もしかして君も賊に襲われた？」

関「ッ！！何故それを！？」

聖「いや、君をみていればわかるさ。話しているときは本当に悲しそうに話していた。だから、【黒髪の山賊狩り】になったんだね？」

関「……………」

凶星みたいだな。

ナデナデ

関「…！？」

聖「君も辛かっただろう。誰かを失っただろう。だが、その人の分、長く生きるんだ。あと、笑顔もその人の分、大切にしなくちゃなほら、女の子は笑顔の方が可愛いぜ？」

関「…／／／」

ん？なんか顔が赤いな…もしや、おれはジタン型症候群になってしまったか…

《意味不明》

うっせ！くそじじい！

関「…愛紗です／／／」

聖「?…それって真名だよね…いいの?俺なんか」

関「いいえ!寧ろ真名で呼んでください!」

む?いきなり敬語になった…何故?

聖「ああ、わかった。君が愛紗なら、俺は聖だ。改めて宜しく、愛紗。」

愛「はい、よろしく願います///」

聖「あと、なんでいきなり敬語に変わったの?」

愛「いえ、これが普通です。」

いや、絶対違うだろ。さっきまでの誇らしげっぽい話し方はどうしたんだ?ま、いつか。こっちの方が可愛いし。

聖「あ、そうだ。俺はこれからあの鈴々とか言っちゃつるところに行くと思うんだが、どう?」

愛「はい。同行させていただきます。」

そんなキラキラした目で見ないで、凄く襲いたくな……ち、やっぱりジタン型症候群か…

《バーカバーカ!バーカバーカ!》

てれってれってれってててててててててて



殺すぞくそおやし…

聖「じゃあ門前でまた会おう。」

さて、いろいろ準備するか。武器って必要な？

聖「おい、愛紗〜！」

愛「遅いですよ！てっきりもう行ってしまわれたかと心配してしまつたではないですか！」

聖「まさか、可愛い女の子を残して俺がどっかいくわけないだろ。」

愛「か、可愛いだなんて／＼／＼ご冗談を／＼／」

聖「冗談なわけないだろう。じゃ、行くか。」

愛「はい。ところで、聖殿？」

聖「ん？どうした？」

愛「貴方も偃月刀使いだったんですね。」

ふ、俺は君と合わせるために偃月刀しか持ってこなかったのだよ。  
二つの龍が手をかしあう…かー！かっけー！

聖「ああ、そつだよ。本来はもう一本あるんだけど、今回はおいてきた。あと、もうひとついいもんを持ってきたんだ。これを使う時はちょっと武器が邪魔になるから、俺専用の偃月刀のサヤを作ってたんだ。これが遅れた理由さ。じゃあ、行くか。」

んなこといっても、ただ背中にかけられるようにしただけだけだな。

途中で鈴々以外の子供が襲ってきたが、愛紗が追い返した。

愛「……」

聖「愛紗、平気だよ。あの子供からみたら年のさが激しいけど、おばさんじゃないよ。というか、どっからみてもおばさんには見えな  
いよ。」

愛「聖殿／＼／」

よし、さっきおばさんって言われてショックを受けていたらしいが、  
慰めてやった。

聖「ん？ついたぞ、愛紗。この家だよな。」

愛「はい。ん？誰か出てきましたよ。」

うお、赤髪の少女じゃないか。

さて、この子の持っている武器……………まさか！

聖「きおつける！この子、見かけによらず、そうとう強いぞ！」

愛「え？どのくらいですか？」

聖「多分、そこらの兵士や将など、足元にも足らずってところだ。」

??「なにゴチャゴチャいってるのだ！早く相手するのだ！」

聖「よし、俺が行こう」

愛「…わかりました。」

聖「あ、それと頼みがあるんだよ。」

愛「はい、なんでしょう」

聖「その青龍偃月刀を貸してくれない？」

愛「?…いや、貴方のもあるのでは？」

聖「やっぱ、二つなくちゃなんかのらないんだよ。」

愛「…わかりました」

愛紗から青龍偃月刀が渡される。それを俺は左手で持ち、構えた。

聖「…俺の名は董起山！遅くなつたな！俺が相手だ！」

??「鈴々は、張飛なのだ！いくのだ！」

ダッ！                      ガキイイイン！

ほう、さすが張飛といったところだ。だが、俺の方が強いぞ。

ガンガン！ガキン！

俺は張飛との力比べで勝ち、張飛を飛ばした。

張「く、お前！本気を出していないのだ！もっと本気でくるのだ！」

聖「…本当にいいのか？」

張「馬鹿にするな！鈴々は強いのだ！」

…しょうがない

聖「…愛紗、返すぞ。」

俺は愛紗に青龍偃月刀を返す。さて、久々に出すか。

（愛紗 side）

我が名は関羽。黒髪 of 山賊狩りとか言われているものだ。今、聖殿と張飛との戦いをみているのだが、これは…一言で言うすとすごいし  
か言いようがない。

私の青龍偃月刀を片手、しかも利き手ではない方で軽々と振り回す。  
しかも、振ったあとに反動も感じないようにかかるやかに動く。これ  
は、木の枝を振り回しているようだ。

私と聖殿が会った時、初めはこやつが、本当にそうなのかという位  
しか見ていなかった。だが、彼は私でも武人ではなく、一人の少女  
として扱われているように感じた。余程、腕に自信があるのだろう  
と、自画自賛しているただの弱者としか見えなかった。体つきも普  
通、どこにでもいそうな感じの身体だった。なのに、偃月刀を二つ  
いっぺんに振り回すとは、…

あと、不思議な感じがした。彼を見ていると、私の兄のような雰囲気  
を出している。かといって、顔や性格が似ているわけではない。  
ただ、彼といると暖かい、春風を浴びたような気分になる。少女扱  
いを受けていても不快感はなく、というか、離れたくないと感じて  
しまう。

聖「…愛紗、返すぞ。」

聖殿は私に青龍偃月刀を返してくる。

聖「よし、望み通り本気を出してやろう。後悔はするなよ…」

なに！？さっきのは本気では無かっただと？

すると、聖殿は手を前にかざした。その時、凄い闘志がでてきた。殺気を受けているわけではない。しかし、何故か恐怖を感じる。すると、彼の手から漆黒の大剣が出現した。何がどうなっている…あれはどうだした…一瞬木が揺るんだ。その瞬間、私は倒れ、意識が遠のいた。

（愛紗end）

ふふふ、久々に獄神を出現させたぜ…

張「……うっ……」

足が震えてる…後悔するなって言ったのに、気絶させるか。

聖「……悪いな、『ホーリー』」

俺は本当に小石を当てる程度に弱めたホーリーを唱えた。

張「う!？」

張飛は吹き飛び、そのまま気絶した。

ふ、俺は獄神を消した。ていうか、獄神、一度も使ってなくねえ？  
なんのために出したんだ、俺は…

とにかく

聖「愛紗……！愛紗？愛紗!？」

やべー！気絶しちゃってるよ！とにかくはこばなきゃー！その前！」  
『テレポ』！

シュン！

よし、成功。白紀のいる馬小屋に到着。

よし、破神もある。では、白紀にてを当てて…『テレポ』！

シュン！

よし、戻った。

聖「白紀！愛紗っと、その女の子を頼む。俺はあっちの少女をやるから。」

ヒヒーン！

ひよい

おー、軽！ってか、やっぱり馬にやらせるのはだめ……

ヒヒーン！

…じゃないだ…とっどつやって愛紗を上にした！？ま、まあ、いまはそれどころじゃない！あの家を使おう。

よし、家にながらせてもらい、布団を借りた。愛紗を布団におき、張飛のいる場所に向かうか

張飛のいる部屋に入った。すると、張飛はすでに起きていた。

聖「やあ、気分はどうだ？」

張「……………」

無言……………

聖「なあ、お前、親がころされたのか？」

張「……………」！



聖「君は親を知らない…実は、俺も親を知らないんだ。」  
なんか、最近思いつけないんだよな。俺の一代目の親が。

聖「俺は、親のありがたみ、大切さ、それは知ってるんだけど、本当の親を知らないって、意外ときついんだよ。」

張「……………」

聖「俺は、本当の親を知らない。本来はとても寂しい事だ。」

多分だけどね

聖「けど、今を楽しくいけることができる…何故だか分かるか？」

張「……………」

聖「それは、感情の大切さを知ったからだ。笑うときには笑う、悲しいときには悲しむ、甘えたいときにはとことん甘える……………」

張「……………」

聖「ほぐら、甘えたいときにはとことん甘えていいんだ。恥ずかしかったら、これで最後だって決めればいいじゃないか。……………」

張「……………」  
う、うわあああああああああああああああああああ！

愛「ふ、感情の大切さですか……………」

聖「あ、愛紗!?!い、いつからいた!?!」

愛「この子にたずねたところからですよ。」

聖「な、なにー！ー！？てことは、俺が部屋においた時には起きていたのか！？」

愛「ふふ、はい、おもいつきり起きていましたよ。」

てことは、つけてきたのか！？怖い！！

張「うわああああああああああああああああ！！！」

聖「気がすんだか？」

張「スッキリしたのだ！なんか周りが明るく見えるのだ！ありがとうなのだ！」

聖「はは、そうか。良かったな。さて、」

張「どこにいくのだ？」

聖「いや、いつまでもここにいたら迷惑だろ？ただでさえ勝手に使

「つたんだから…」

張「じゃあ、泊まっていくな！二人とも！」

「……………はい？」

聖「あのく、愛紗はともかく、俺は駄目だろ」

張「いいから泊まってくのだ！鈴々達はもう友達なのだ！だから泊まってくのだ！」

聖「だから何でそうなるの!?!」

張「いてほしいからなのだ！感情は隠さない方がいいのだ！」

聖「誰がこんなことを言った!」

張「お兄ちゃんなのだ!」

聖「ちくしょー!」

何故だ！何故こんなことをいつてしまった！

だくく！どうにでもなれ！

聖「わかった！わかったよ！泊まります！」

張「そこのお姉ちゃんもなのだ！」

愛「え!?!私は…」

聖「愛紗…ゴメン！」

愛「……………わ、わかった」

張「やったのだー！」

くそ、どこからこんなテンションが…てか、愛紗はなぜ了解した！？

張「じゃあ、もう友達だから、真名を預けるのだ！鈴々は鈴々なのだ！」

聖「わ、わかった。ゴホン！姓は董、名は雷、字は起山、真名は聖だ。宜しく。」

愛「姓は関、名は羽、字は雲長、真名は愛紗だ。宜しくな、鈴々。」

鈴「宜しくなのだ！」

さて、あれから困ったものだった…鈴々が皆で風呂に入ろうとか言い出すし、流石にそれは駄目だって断って、俺が最初に入ったんだが、普通に聞こえる声で愛紗が鈴々を止める会話が聞こえたし、次

は一緒に寝るとか言い出すし、しかもこれは実行しちゃったし、ろくすば眠れなかったし…愛紗は耳の前です〜すと寝息をふきかけ、鈴々はお兄ちゃんとか言っつて抱きついてくるし、精神が……

ま、なんとかもったけど、たまんなくて朝早くから外に出たぜ。

よし、俺が作ったりリコーダー、愛紗との約束が遅れてしまった理由のひとつでもある。  
吹いてみるか…

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

ん？なかなかいいな。

??「綺麗な音ですね。」

聖「そうだね…てか愛紗？起きてたのか？」

愛「はい。」

聖「…あ、そうだ！鍛練の約束、してたな。」

愛「覚えてくださってたのですか？」

聖「おう！それに、俺の技も教えるぜ！さ、はやく青龍偃月刀を」

愛「はい。」

ぴゅ〜

愛「では始めましょう!」

いや、速いよ!なぜそこだけ俺をこすスピード?

聖「よし、では試合の勝ち負けの説明をするぜ!」

愛「はい!」

聖「俺はまほ:妖術しか使わない。そのなかで愛紗は俺の技の嵐から耐え抜く。五つの技から君は避けたり防いだりして耐え抜く。君が戦闘不能になったら君の負け。さて、始めるよ。」

愛「はい!」

俺はリコーダーを吹きながら空中に浮かぶ。

聖「さあ、いくぞ!曲名『独りじゃない』」

ふゝ、まさか耐え抜くとは…弱いといっても、当たれば吹き飛ばす。曲にあわせて魔法を打ち続けたんだが、耐え抜いたよ…

聖「…愛紗、お前凄いな…少し休んだら教えてあげる。」  
愛「は、はい！」

休憩終了！

聖「さあ、技を教えるぞ！」

愛「はい！お願いします！」

聖「君にはこれを持ってもらう。」

俺は愛紗の青龍偃月刀を借りて振る。

ブン！　ブーン！

聖「こんな感じ。」

愛「…凄いですね…一回で強烈な風で相手を怯ます…凄まじいです」

聖「これ、きみも習得出来るから。技名は『豪風』」

俺は愛紗に青龍偃月刀を返した。

聖「んじゃ、まずは……………」

愛「『豪風』！！」

ブン！ ブォーン！

すげー、マスターしやがった…全てデタラメの思いつきなのに…マスターしちゃったよ

愛「これでよろしいですか？」

聖「愛紗……」

ガシッ

俺は愛紗の手を掴んだ

愛「へ？」

聖「愛紗！凄いや！凄いや！俺の技を習得できたのは君が初めてだ！」

愛「／／／あの／／／」



聖「あ、ゴメン！」

バツ！

俺は愛紗の手をはなした。く、ジタン型症候群か…やっぱりこれのせいかな…

《アツハツハツハ！》

なんでこのタイミングでいつもくるんだよ！

《教えてやるう…答えは答えは…》

答えは答えは…

《オベベ》

死ね！氏ね！じゃなくて死ね！

愛「あの、どうしたんですか？」

聖「いや、なんでもない。戻るか」

愛「はい」

やけにテンション高いな…

そのあと、鈴々も何故かメンバーに加わり、今は村の門前にいる。

聖「…てことだ、悪いけど、君たちと一緒にには行けないな。」

愛「そうですか…」

おれは二人と一緒に旅に出ないかと誘われて、断っているところだ。

鈴「やだやだ！お兄ちゃんと一緒に旅をするのだ！」

愛「こら鈴々！聖殿にもやることがあるから仕方ないではないか！」

聖「ま、そういうことだ。あらちなみにもうすぐいつかまた会えるぜ！」

愛「え？」

聖「いや、また会えたらいいな。」

反董卓連合軍でな。

聖「それじゃ、またな。」

そういつて、俺は馬を走らせた。食料は…当分平気だろう。

さて、俺の物語のクライマックスはもうすぐ…かな。

第七話 山賊？（後書き）

訂正しまくってんな…俺…

第八話 はわあわ軍師（前書き）

書きました〜！あつぶねえ〜危うく見つかるどころだったぜ……  
ご覧ください

## 第八話 はわあわ軍師

聖「は~~~~~くき~~~~~どうしよ~~~~~」

はい、董 起山です あれから俺はあの村で買いだめたからもつかな〜と思って旅をしてたらかなしいことに、2ヶ月さまよっています。しかも、いつのまにか山に登ってたらしい。もうやだ〜！

馬を進めていたら幸運なことか不幸なことか、素晴らしい事が起こっていた。

??「は、はなしてください！」

??「わ、私たちをどうするきでしゅか！」

賊1「うつせー！テメーらを今から売り飛ばすんだよ！大人しくしねえとぶん殴るぞ！」

少女二人が賊に絡まれていました。こいつをぶっ飛ばしてあの二人を助ければ道案内をしてくれると思うんだが、そのためには賊との



賊2「説明になってねえよ！誰だって聞いてるんだよ！」  
なん……………だと……………

賊につっこまれた…だと…

聖「はいはい。さて、その子達をはなせ。さもないと、この【舞う妖術師】が貴様らに体罰を与えるぞ。」

賊3「は！なにが妖術師だ！やってやるうじやねえか！」

戦闘終了

賊1「ぎゃー！化け物だー！」

聖「誰が化け物だ！」

くそ！むかつく！

《やあ、化け物君》

黙れ！このからだは誰が作ったと思ってる！見た目が俺でも力を化



け物にしたのはお前だろ！

《くそー、化け物め！バーン！》

.....

《のれよ！くそ、本当ノリの悪いやつ！》

悪かったな！中年変態同性愛野糞オヤジ！

《化け物君 落ち着け》

殺す！マジで殺す！

??「あ、あの〜」

おっと、俺としたことが…冷静になれ…

聖「やあ、君達大丈夫か？」

??「は、はい！ありがとうございます！はっ…」

うわ〜！なにこの子！金色の髪をしたこの子、可愛い！

??「……ましゅ…あう」

な、なにー！？あとから言ったのにかんだ！あの水色の髪をした、  
魔女がかぶってそうな帽子をかぶってることも可愛いー！なんだこの  
生物！

聖「そうか、良かった。俺は董雷だ。」

??「わ、私は諸葛亮、字は孔明でしゅ！はう……またかんじった  
……」  
??「ほ、ホウ統でしゅ……あう……」

……がちで？マジで？あり得ねえ……と、とりあえず

聖「と、とりあえず本題にはいるぞ……ゴホン！俺、実は迷子なんだ。  
あのさ、よかったらピトオ……」

孔・統「「さ？」」

……

今、俺の鼻の上に何かとまってる……

聖「（。。。）」「（。）」

孔・統「「？」」

恐る恐る……鼻を見ると……

なん……だと……蝶……だと？

聖「き……」

孔・統「「??？」」

聖「ぎゃー……」

孔「はわ~~~~!？」

統「あわ~~~~!？」

聖「ほわ~~~~~!!!!!!」

虫は卑怯だ！卑劣だ！道をただきこうと思っただけなのにー！畜生！あの虫…コロス！  
ヒラヒラ

聖「逃がすか！白紀！あのへたれた虫を殺す！行くぞ！」  
ヒヒーン!？」

驚くのは無理はないだろう…いきなり長距離にいた俺が一回のジャンプで背中に飛び乗っているんだから…

だが！俺は止められない！あの虫を殺すまでは！

聖「行くぞ！俺を怒らせた罪…あの虫を…排除するぞ！」  
ヒヒーン!

〈孔明side〉

私達は町から帰る途中に賊に襲われました。しかし、そこに白馬に乗ったお兄さんが助けてくれました。戦ってる時にでも笛らしい物をふき、余裕の表情でした。あの曲、私結構好きかもしれないです。それはさておき、お兄さんに…確か董雷さんに助けられたのはいいのですが…董雷さんは何故か虫が自分にたかったら大声をだしてその虫を追っかけて行きました…虫、それほど好きなのでしょうか…

孔「雛里ちゃん、さっきのはなんだったんだろっ…」

雛「……（。。。）」

ひ、雛里ちゃんが…さっきの声で驚いて放心状態になっています！

孔「ひ、雛里ちゃん！しっかりして！」

雛「あわ！？し、朱里ちゃん！？さっきの董雷さんは！？」

朱「なんか虫を追いかけて行っちゃったよ。」

雛「…あの人、大丈夫かな……」

心配するのは確かに頷けます…

朱「……とりあえず、水鏡先生のところにもどろっ。」

雛「…そうだね、朱里ちゃん…」

く孔明（朱里）endく

ウツハツハツハ！ついに倒したぞ！

聖「ハハハハハハハハハハ！虫はこの世から滅ぶべき存在なのだ！」

ハツハツハ！虫は俺が始末してやった！さあ、他に俺に不満がある虫はいねえか！

ピト

.....  
.....ゴキブリ.....だと.....

聖「ウギヤー！」

バタ！

俺は白紀から落ちた.....まさか.....不意打ちとは.....卑劣.....な.....

聖「は！こ、ここは！？」

辺りを見回す。そうか、あの虫をみたせいで気絶してたのか……  
ここは……布団？そして……部屋？

聖「…誰かが助けてくれた？のかな…」

あの虫…強敵

??「入りますよ」

ん？助けてくれた人かな？

??「あら、起きていたんですね。」

聖「はい。あ、貴女が俺を救ってくれたのですか？ありがとうございます。」  
います。俺の名前は董雷、字を起山といいます。」

??「あら？では貴方が私の生徒を救ってくれたのですか？」

聖「はい？あの…なんのことでしょうか…」

??「水鏡先生、質問が…」

ん？この声、なんか聞いたことあるな…

??「あら、ちょうど良かったわ。ちょっと二人とも、こっちに来  
なさい。」

?? 「はい、失礼しま……」

?? 「どうしたの？朱里ちゃ……」

入ってきた二人の少女と目が合う。

?? 「あら？どうしたの？」

聖 「……………」

間違いない…あの二人！？

聖・孔・統 「え……………!!?」  
「」

水 「そうだったんですか……」

俺は今、あの二人と助けにくれた人で話をしている。あ、助けにくれた人は水鏡って言うんだって。

孔 「しかし、貴方は虫が嫌いだったんですね……」

聖「う!？」

孔「だからあのとき逃げ出したんですか……」

聖「ぐは!？」

統「あのときは驚きました……あんな大声を出してましたし……」

こ、これ以上言わないで! 恥ずかしいし、やめて!

しかし、これを世の中に回ったら……

く聖の妄想く

《お前、恥という言葉を知らないのか?》

愛「貴方はこんなことを……くく……あ、哀れですね……」

鈴「お兄ちゃんかつこわるいのだ〜!」

赤「聖さん……ぷぷっ……可愛いところもあるんですね……  
くく」

愛紗!？鈴々!？赤花までも!？

月「聖兄様……くく……」

月?月~~~~~!

く聖の妄想終了く



嫌だ~~~~~！

なんか精神的に耐えられない！

《どんな過激な妄想をしてるんだよ…》

黙れ！小僧<sup>おやじ</sup>！

《小僧と書いておやじと読むとは…てか、だれがおやじだ！》

黙れ！くそ~~~~~！

は！そっだ…まだこれがあった。

聖「……………（ウルウル）」

孔・統・水「……！？」

よし、第一段階は成功だ！これをやると何故かみんな言うことを聞いてくれるんだよね。恥ずかしいから滅多にやらないけど…しかし、神のてをつけたところって何処だろう…赤子の時だけ可愛さ150%だから…あとはかわりないはずだが…

膝をついて…まずは孔明ちゃんからだ…くらえ！

ガシツ！

孔「はわ！？」

さすがに抱きつくのはやり過ぎかな…いやーこれはやらなくてはな



聖「ホウ統ちゃん…（ウルウル）」

統「あわ！？あわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ！？（し、朱里ちゃん…これは鼻血だして倒れない訳がないよ…反則です！）」

か、勝った…

聖「あ、ありがとう！みんな！」

孔「い、いえ…（先程の顔は作っていたのですか…けど、お持ち帰りしたいです）」

統「あわわ…（こ、これは癖になりますね…正直者言ってあの本よりの強力です）」

水「うふふ（この子…凄いですね…私の物にしたい位です…もう少しここにいてもらいますよ、董雷さん）」

聖「まあ、恩義は返さなくちゃいけないし、少しここに滞在させていただくよ。（明日とかに帰っちゃうと、言いふらしそうだから、少し様子を見るか…）」

水「あら、有り難うね（ウフフ…ゆっくり時間をかけて私の色に染め上げてあげる…）」

孔「はわわわ…（またあの顔が見たいです…私の物にしたいです！絶対手に入れます！）」

統「あわわわ…（朱里ちゃんも水鏡先生も同じことを考えてるのかな…だけど、私だって…）」

聖「と、とにかく宜しく。俺の真名は聖だ。気軽に呼んでいいぞ。

（これをやると、凄く悪感がするんだよ…）」

孔「わ、私の真名は朱里です。宜しくお願いします。（あれ？かまなかった…もしかして、聖さんのおかげかな…）」

統「……離里です。宜しくお願いします。（かまなかった…聖さんの影響かな…）」

水「では、これからは宜しくお願いしますね。」

聖「あ、ああ。（生きていけるかな…）」

はあく、俺のストーリーが…なんか凄いことになっちゃった…大丈夫だよ…

第八話 はわあわ軍師（後書き）

…最初よりかはましかな？まあ、いいか。

## 第九話 悪夢（前書き）

は〜い！中間テストから逃げるこの俺！嘘です…ちやんとやってます。

## 第九話 悪夢

ここは…何処だ？

俺は辺りを見回す

周囲は暗く、まさに闇といえる空間が広がっていた。

俺は歩き出した。だが、それは自分の意志ではない。むしろ、それ以上歩いては危険だと、これ以上行くなと確かに脳が止めようとしている。しかし、何かに操られているように勝手に足が動く…

歩いても、いくら歩いても変わらぬ景色…だが、しばらくすると人影が見えた。

足が止まった。

なんだ、この底知れない殺気……いや、邪気……

人影が増えていく。気がつくとも俺は囲まれていた。人影が近づくと、言葉が脳裏から聞こえてくる…

…死ねと

…苦しめと

その声は次第に増えていき、そしたらもう人影は自分を囲んでいた。

なんだこいつら…

よく見るとこいつらは人じゃない…人の形をした何かだ…  
黒い何かが俺に手を伸ばし、俺をつかもうとしてくる。

…くるな…

俺は背中にある黒龍と破神をさやから外し、振り回す。

なんだこいつら…

斬っても斬っても

数が減らない…

それどころか脳裏に響く声が…

死ねと…

消えろと…

苦しめと…

来るなああああああああああああああああ！

叫んでいるのに…声が響かない…

うわあああああああああああああああ！！

恐怖のあまり、攻撃がおおざっぱになってきてしまい、黒い奴に攻



撃を許してしまった。

ドグチュ!

な、なんだ…今のおとは…

自分の胸元をみると…

グチュグチュ

胸に相手の手が…

クボ!

…相手の手にあるのはなんだ…俺の…心臓?

グチャ!

心臓が握りつぶされた…痛みは何故か感じない…だが、どこかで苦しんでいる感覚がある…普通なら…死んでいるはずなのに…

力がなくなり、倒れる…

いつそ、死にたい…だが…死ねない…

相手が俺を見下している…

相手の手が俺の顔面に振り落とされる…

ガバツ！

聖「うわあああああああああああああ！」

朱「はわわわ！？」

雛「あわわわ！？」

あれ？さっきの空間は…夢か…全身汗でびしょ濡れだ…

朱「だ、大丈夫…ですか？」

聖「ああ…大丈夫」

俺は水鏡さんに拾われて一週間がたった。最初はなんか悪感でいっぱいだったんだが、つい最近だと少し落ち着いた…あの姿をもう一度見たいって思っていたんだろう…それで諦めたんだな。どうでもいいか。

聖「で、どうしたんだ？二人とも…」

朱「いや、聖さんの部屋を通ったらちよつとうなされているような声が聞こえたので、様子を見に来たのですが…」

聖「そうか…心配してきてくれたのか…有り難う。」

俺は優しく朱里の頭を撫でる。

朱「……………」

あれ？喜ばない…いつもなら嬉しがるんだがな…どうしたんだろう…  
…まあいいか。さて、川にでも行ってくるか。

聖「朱里、雛里。俺は川にいつてくるから、水鏡さんに言っ  
といて」

俺は立ち上がり、撫でていた手を引っ込める。

聖「じゃ、宜しくね」

そういつて、俺はその場から立ち去った。

（朱里 side）

…聖さん、なんか変でした…なんかとても怖がってたような…いか  
にも作り笑顔でした。いつもなら、もっと元気がよく、「うっす！  
朱里」！今日も一日楽しく過ごそうぜ」とか言つて、本当に楽し  
くなるような笑顔で私の頭を撫でてくれるのに…

雛「…今日の聖さん、変だね…朱里ちゃん…」

朱「そうだね…まるでなにかに怯えた感じだったよね…」

雛「……………」

しばらく、無言の時間が続く…

雛「……朱里ちゃん…」

雛里ちゃんがゆっくりと話始めた。

雛「…聖さんの後をおってみない？」

…へ？

雛「確か、川に行くっていったよ。そこでどうしたのか聞こうよ。」

朱「そうだね。ここでこんなことをしてるより行動した方が早いよね。」

（朱里end）

聖「はあ~~~~~」

…このため息長！？しかしなんだったんだろあの夢…恐怖のあまりに記憶に残っちゃったよ…無理ないよ…あの世界で俺の心臓をえぐりとられてるんだもんな…

聖「…とにかく、水浴びでもするか…着替えも持ってきたしな。」

（雛里side）

雛「はあ〜」

先ほど決めたように川に行く途中なのですが…しかし、なにかいつてはならない大事なことを忘れていている気がする…

雛「ねえねえ、朱里ちゃん…」

朱「どうしたの？」

とにかく聞くことにした

雛「なにか行っちゃいけない大事なことを忘れていている気がするんだけど…」

朱「??」

雛「ほら、聖さんの片手になにか持ってたかった？」

朱「片手に？なにかもってたっけ…」

やっぱり朱里ちゃんも忘れてる…

とにかく、行ってみよう。

ガサガサ

私たちは川を目指して森を歩いているのですが…

朱「あ、ついた…聖さ……………」

雛「……………あわわわ……………」





……

水「どうしたのですか？」

聖「あ、水鏡さん……」

朱「せ、先生！？い、いつからいたんですか！？」

水「今来たばかりよ。（聖さん……見させていただきましたよ……）」  
ちそうさまです（）」

ゾクッ！？

い、今悪感が……

水「で、なにがあつたんですか？」

聖「……実は「

水「そうですね……そのような夢を「

朱「……心臓をえぐりとられては……怖がらないはずがありませんね……」



雛「あわわわわわわわわわわ」

とにかく、夢の中のことを話した。

皆の反応が…

水鏡さんはまあ普通。

朱里は…顔を青ざめながらも何とか声をだしてる。

そして雛里、お前怖いぞ！確かに夢のことは怖いけど、お前はもっと怖いぞ！

水「その夢のこと、忘れちゃいけません。」

…は？

水「たぶんこの夢は今まで貴方が殺してきた人たちでしょう。」

…なるほど

水「貴方は戦場に立つ戦人、ですから、殺された人たちの分、それを背負って生きていくのです。」

まてまて、その台詞、俺もどっかで言ったりしたことあるな。

聖「…有り難う、悩みも吹っ切れた。」

水「そうですか。」

まあ、素直に受け取っておきましょう。次あの夢をみたら、そこで決意の言葉でもいってやるか！

聖「有り難う！しゃー！今日も一日、楽しく過ごそうぜ！」

朱「はわ！？いつのまにか悩みが吹っ切れたのですね。なんか心配して損したような……」

雛「あわわわわわわわわわわわわ……」

聖「ははは！そんなことはないよ！有り難う」

俺は勢いよく二人の頭を撫でた。

朱「はわわ／＼／」

雛「わわわわわわわわわわ！？会っ愛会っ卵卵卵！？は！？私は今まで何を……」

朱里はいつも通り

雛里、一時怖い声が聞こえたぞ！

聖「さ、戻るか」

朱「はい」

雛「へう〜」

水「はい。ふふふ。」

雛里、うちの可愛い妹の台詞をとるなよ。へうボイスの楽しみがここで消えるじゃないか！

こうして、俺の物語に新たな仲間？が刻まれた？

あ、クライマックスとかどっかでほざいちゃったけど、まだまだ全然終わりじゃないから。ただテンションで言っちゃったただだからきにするなよ

おまけ

聖「……で、なぜ君たちがここにいるのかな？」

水「先程もうしませんでしたか？一緒に寝る意外何も無いじゃないですか。」

聖「いやいやいやいや！待ってくださいよ！俺は男ですよ！なのになんで当然のようにほざいてるんですか！？朱里と雛里ならまだ許せますけど、貴方はもうご立派な大人ですよ！」

雛「聖さん、私たちは子供じゃないです！」

朱「そうですね！私たちは大人な子供です！それとも、聖さんは大人かどうかは胸の大きさと決めるんですか！？」  
聖「いやいやいやいやいや！結局子供は認めてるのか！？しかも俺はそんな奴じゃない！」

朱「ふんだ！」

雛「（プイッ）」

聖「ちょい待て〜い！自分で認めてなんでそこでいじける！？」

水「ふふふ、さあ、寝ましょう。」

聖「貴女怖いぞ！ちょ！いきなり抱きついて倒れないでください！  
てか離れる！」

朱「はわわ〜／／先生ずるいです！わ、わたしも」

雛「わ、わたしもいますよ」

聖「だ〜〜！寧ろ眠れねえわ！降りろ！」

水「うふふ」

朱「はう〜／／」

雛「あう〜／／」

聖「だ〜〜〜！もついい加減にしる〜〜〜  
〜！」

《その後の夜は、聖は性欲に耐えられず、三人を襲う「誰が襲うか！」な、なんと！その状態で声に出さず的確なツッコミ……すばら〜い〜い〜》

てめえ！まじ黙れ！

《あれみたいにならないの？やめて〜くだ〜さい〜 よいで〜わな  
い〜か〜 そこは〜だめ〜です〜 やわら〜かいじゃない パット  
〜はずして〜素直になれ なまち〇ですって！みたいにならないの  
？〜》

なるか！

《ひどい！一人三役は大変だったのに！あの歌は攻め二人と受けが  
一人と高度なレベルの歌だぞ！それを一言のみしかつつこまないだ  
と？〜》

うっせー！

《てなわけで、俳句をよみま〜す》

どういう展開で？

《ホトトギスです。》

あ〜あの三人がかいたやつか

《 鳴かぬなら

私が鳴こう

ホトトギス

《

馬鹿！それだけはやっちゃいかん！寂しい！すごく寂しい！

《ポケポツポ！》

鳴き声違つよ！しかもアクセントつけて発音するな！キモいぞ！

《まだまだ夜は始まつたばかりだぜ！》

まだなんかやるのか！

水「うふふ」

朱「はう／＼／／／」

雛「あう／＼／／／」

聖「いい加減どけえええ！」

そして、この夜はなかなか寝付けず、寝たのが朝になる寸前だった  
そうだ。

おまけのおまけ

夢の中にいます！

またあの黒い空間にいます！そして、また同じ敵と遭遇！しかし、今回は武器をとらずに戦う！

殺す…ってまた脳に響く声を…なら俺だっっちゃやうもんね。

奥義…コマンド入力！

コマンド入力することで、チート俺ルールが使用可能と見せ掛け…

ムッコロスマイル

( ^ ^ ) ニコッ

……ぎゃあああああ！ってなに！？叫び声が脳裏に響いたんだけど、てなに？俺を見るとみんな消滅した！？

これ以来、この夢は二度と見なくなっただという……

ちょっと待て、この複雑な気持ちどうしてくれるの？ちょっと！悪

霊さん！頼むから出てきてよ！でないとは別の意味で苦しむから！  
ねえ！！

夢の中でも聖は叫び続けたとき。めでたし、めでたし。

聖「めでたくな〜(TOT)」



第九話 悪夢（後書き）

いかがでしたか？シリアスにしてやっばやくめたの味は…

第十話 噂（前書き）

訂正しました！



朱「はわ／＼（い、いつもと違います…甘えてる聖さんもいいですが、こっちの聖さんも反則です／＼）」

ん？やっぱ違和感を感じたのかな？

《なあ、それは流石に似合わないんじゃないかねえ？》  
ん？どうした？誰と会話してんだ？

《大丈夫だ、問題ない。》

質問の答えになってない。

《かゆ うま》

…死ね！

《（。、。）》

おい！半分見下してるだろ！

《ハイドレンジア！》

…もついい。

《ひで〜！》

なっ、

聖「ん？どした？ちょっと雰囲気変えて見たが…似合わない？」

朱「そ、そんなことは無いですよ！」

聖「まあいいや！それより本題は？」

朱「（いつものに戻ってしまいました…）…はい、水鏡先生に買い物きたのまれたのですが…」

よし！情報収集でもするかな！

聖「よし！じゃあ準備できてるよね。」

朱「え！は、はい…」

ガシ！

朱「はわ！？」

聖「早速行こうぜ！」

手をつなぎ、駆け出そうとしたが…

雛「……………」

雛里と目が合った。…うわ……なんか羨ましそうにこっちを見てるよ…んじゃ、

ガシ！

雛「あわ！？」

聖「雛里も行くだろう？」

雛「は、は「強制決定！いざ行かん！」あわ／＼／＼／／／」  
朱「はわ／＼／／／」

手をつなぎ、引つ張る感じで町へダッシュ！

朱「（し、聖さん…強引です／＼／／）」

雛「（聖さん…攻める側ですね…／＼／／）」

ん？雛里がなにか悟って…ないか。じゃ、ダッシュ！

聖「よし ついた で、朱里／＼なにかうの／？」

朱「え、え／＼と……………」

朱里、ちよつと動揺してる？まあいいか。

朱「……………このくらいです。」

やべ、聞いてなかった…

聖「じゃあ自由行動でいいべ」

朱「は、はい…いいですけど…」

聖「じゃあ昼になったらここに集合　OK?」

朱「はい?おおけい?」

おっと、英語使っちゃった。

聖「おっと…とりあえず、昼にここに集合、了解?俺も調べたいものがあるから。」

朱「わかりました。」

雛「御意です。」

ここで御意を使うとは…ただ者ではないな…

聖「そんじゃ、いつてくるわ。」

ど一回ろつか…んじゃ、武器屋でもいってみるか。

カランカラン

店主「へい、らっしやい！」

へ〜…初めて行くけどすげえな…ん？

聖「おっちゃん、それなに？」

俺が目についたのは…なんかリコーダーらしきやつが…しかも黒い。

店主「あ〜これね…なんか道を歩いてたらこんなのが落ちててよ…これは戦えないけど、いくら重いものをぶつけても傷一つつきやしねえから一応置いてるんだけどよ…」

……………おい、神さん…

《ん？なんだ？》

リコーダー…これお前の仕業だろ…

《あー、なんかあのいま話してるおっちゃんがムカついてあるもんできとーなやつを一つ投げて当てようとしたらすんごく外した。》

外しすぎだろ…

聖「おっちゃん、これくれねえか？」

店主「お？もらってくれるのかい？そりゃ助かる。あ、お代はいらねえよ。」

聖「おう、ありがとなー！」



店主「いいってことよ！」

カランカラン

やったぜ…ついに手に入れた！黒龍はもう少し切れ味を伸ばそう。  
よし、帰ったら手をつけるか…にしても、最近武器いじりが飽きてきたな。なんか音楽の方がはまっちゃったし…ん？あれは…朱里と  
雛里？

へ…本屋か…行ってみるか。

朱「はわ~~~~~//」

雛「あわ~~~~~//」

ん？きずいてない……こんだけ近くににいるのに…なに読んでんだろ…

朱「はわ~~~~~//」

雛「あわ~~~~~//」

聖「なに読んでんだ？」

朱「はわ！？//」

雛「あわ！？//」

聖「ほわ？」

俺も流れにのったぜ！

二人は読んでいた本を勢いよく閉じた。

聖「な〜に読んでいたのかな？ん？」

朱「なんでもないでしゅ！／＼／」

雛「あわわわ／＼／」

聖「人に見せられないものを読んでいた…それはつまり…（キラーン）」

朱「はわ〜〜〜！！」

雛「あわ〜〜〜！！」

聖「言わないであげるから。」

ふふ…本当は分からないが…これで旅に出れる…あとは噂次第かな。

聖「んじゃ、またあとで。」

結局なにもなかった…

聖「お待たせ〜。んじゃ飯にするか。」

朱・雛「はい」「

さっきのこと…忘れてる？

カランカラン

店員「いらっしやいます〜」

聖「とりあえず座ろう。」

雛・朱「はい」「

なんかやけにテンションたかいな…

店員「ご注文はなににしましょう。」

聖「んじゃ俺は……………」

カランカラン

ふゝ恥ずかしかった…まさか二人にあゝんを迫られるとは…

聖「と、とりあえず戻ろう／＼／」

朱・雛「はい／＼／」

あゝいま思い出しただけで恥ずかしい！すげえ恥ずかしい！

切り替えて、なんか話すか。

聖「なあ二人とも、なんか情報ない？」

朱「情報…ですか？」

聖「ああ、例えばなんかが降ってくるとかさ」

雛「…あ、一つあります。」

聖「ん？なに？」

雛「本屋の店員さんに聞いたのですが…なんでも天の御遣い様がこの地に降ってくるとか…たしか光る衣装をみにまどっているとか…」

ん？……光る衣装？光る……衣装……！！

朱「？…どうしたのですか？」

聖「いや、なんでもない…戻るぞ。」

雛・朱「はい。」

そつだ、俺は聖フランチェスカ学園の二年生だ！いや〜思い出したん？待てよ…たしか降ってくるとかいってなかったっけ…行ってみるか。

神さん。

《ん〜？いま飯中だ。》

この世界で言う天の御遣いってやつが、来る場所を教えてくださいの  
だが…

《ああ、かまわねーぞ。》

助かる

さて、戻って旅の支度でもしますか。

はい、飛ばしますが、あれから俺は風呂入って飯食って寝ようとしてるんですが、まずしなくてはならないことがあります。

知らせなくては…なので、皆を俺の部屋に呼び寄せました。何で俺

のへやかって？なんかここがいいんだとのことだそつだ。

お？皆集まったか。

朱「どうしたんですか？お話って…」

雛「なにかあるのですか？」

水「閨の誘いかしら？」

聖「違います！しかも貴方がここがいいっていったはずですが！ま、それはさておき…俺は明日旅に出ようと思います。」

朱・雛・水「」「」「」

沈黙……

朱「いって……しまうの……ですか？」

う！？潤目かよ…ダメージが…

聖「ああ、俺はここに居すぎた…一ヶ所にずっと滞在しない主義なんだ。」

まあ、例外はあるけどな。

聖「だから、今日で最後だし、なにかやってほしいことはあるか？俺にできる範囲はなんでもするから。」

水「では私と閨を「閨以外なら。」ではきゆうあ「同じ意味です。」ではせつ「どこでその言葉を知ったんですか？」…」

おい、お前の仕業だろ…

《バレた？夢の中で語ってやっただけさ。》

しばくぞ！

《黙れ！小僧！》

ネタっぱしるな！てめえこそ黙れ！

《ちくそ〜！お前、ノレよ！気だるさが〜ほらぐるぐる回っての  
状態になっちまっただろ！》

知らねえ〜よ！しかも歌を歌うな！

《かゆ うま》

こ〜の〜や〜ろ〜！！！！

《ばばさま〜風がやんだよ〜）。。、。》

じゃあ扇風機買え！

《酷い！君はいつもそうだ！そんな君にはかめはめ〇！》  
黙れ！

《てかもういいじゃねえかよ。襲っちゃえよ。俺の知る限りでは全  
然三人とも大丈夫だしさ。たまったもん出しな。》

…こ・ろ・す

《ああいぜ！じゃあなにかける？》

じゃあ金かける？

《金！？…あ、うん。いいよ飯。ああいよ飯。ラーメン山盛りチヤーシュー増し増し？増し増しだー！増し増しだー！うふwww俺自重、俺自重しろwww…待て！ここは人が多すぎるし、俺も店長に起こられる…ここはパチエ○ゲームでけりをつけよう。》  
上等だ！いくぜ！

ムツキユ

《ムキユ》

負けただと…てか、お前東○好きだろ…

《お前もだろっ》

…チ！腐ってやがる…

水「では今日は皆で一緒に寝ましょ」

聖「…キャラ変わりすぎ…もう分かった…朱里、雛里。今日は一緒にいてあげるからなくな。」

朱「……………//」

雛「……………//」



優しく頭を撫でた。

聖「んじゃ、寝るか。」

眠い…ろくに眠れなかった…まいい、そして旅立ちの時、いま門の前にいます。

水「ではおきおつけて。(結局無理でした…)」

聖「はい。それと、朱里、雛里。こっち来て。」

俺は二人を呼び寄せ、二人の耳元でささやく。

聖「当分会えないと思うけど、君たちが勇気を出せば必ず会える。約束する、また必ず会うよ。じゃあな。」

そして俺は白紀にまたがり、駆け出した。

《ああ、あとお前重要なこと忘れてるだろう。》

重要なこと…

《反董卓連合軍だよ。だから、いまからいまから偽名でも決めれば？》

確かに：月の兄だから、偽名ぐらいは決めとかなくちや。まあ、起  
山をまた名に持つてくるか。字はないってことにして、真名は今ま  
で通りの聖てまいいか。

《絶対意味がない…》

気にするな。

こうして、また新たな旅が聖の物語に刻まれる。

第十話 噂（後書き）

クフ！かゆ うまWWWWW

意味わかりませんね。すみません。訂正しました。漢字間違えました。すみませんでした。

第十一話 天の御遣い（前書き）

訂正しました。

## 第十一話 天の御遣い

聖「は…暇すぎる…」

俺は今、天の御遣いが来るであろう場所に移動中…だが…  
聖「だ〜！なんで黄色い布の賊しか会わないんだよ！」

移動するたんびにうざったいほどに賊が…

あのリコーダーを吹きながら魔法で戦闘しまくってたら…あ、勿論  
武器も使うがな。そんで着いた名前が…

【奏でる鬼神】

【最強神】

《化け物》

《変態》

《幼女趣味》

《種馬》

おいちょっと待て！なにどさくさに紛れて俺の悪口いってんだよ！  
しかも俺は変態じゃない！

《じゃあ…変人？》

マジでうぜえな…

《ハツハツハ もっと誉めてやるよ》

誉められてねえし…

ん？なんだ？あの光は…もしや…天の御遣い？

《いや、私だ！》

………

聖「白紀、あの光に向けて全速前進！」

《スルーですか〜！》

無視無視

く?????side

うん？ここは何処だ？

俺の名前は北郷 一刀、聖フランチェスカ学園の二年生だ。

学校でたしか白い服をきた奴が銅鏡を盗んでたから追っかけて、そして…あゝそつだ。あの銅鏡が割れたんだ。そしてそこから白い光が俺を包み、気がついたらここにいた…謎だらけだ…

??「おい兄ちゃん！」

ん？

??「へ〜お前高そうなの持ってんな…よし！身ぐるみを全て置いていったら命だけは助けてやる。」

デカイのと小さいのを率いていそつなやつがいつてきた。身ぐるみつて…

??「待たれい！」

ん？女の人の声だ。

〜一刀end〜

く〜！マジかよ！なんだよ！また黄色いやつかよ！けど、目の前で襲われてるやつ、確かに聖フランチェスカ学園の奴だ！これは助けないと…

ん？なんだあの赤い槍を持った女…まさか！新種の賊か！？あいつ…強い方だな。

お！黄色いやつかが逃げて行く。成る程…私の獲物に勝手なことをするなってやつか。助けるか。

聖「そいつに触れるな！新種の賊がー！」

ドカ！

??「がつ！」

俺は聖フランチェス力学園の生徒と見られる奴を救おうと、水色の髪を蹴飛ばした。

??「何をする！」

ありゃ〜…白紀がびっくりしちゃってるよ…いきなり降りて怒鳴ったからな。とにかく、女が戦闘体制に入った。いま現在手に持っているのは黒龍だけ…別にいいか。

聖「黙れ賊！てめえみてえなやつがいるから同性愛が出没…いや、ゴキブリが出没！違うっちゆうねん！だからお前がいるから平和にならないんだ！賊野郎！！！」

??「いや、私は賊では「黙れ！！襲っておいで今更賊ではない？ふざけんな！」く！もはややるしかないようだな。」

聖「貴様は生きる価値がない！死ね！」

俺は武器を構え、女にむかって武器を振るう。だが、それを涼しげそうな顔でかわされた。

聖「ほう…本気ではないとはいえ、今のをかわすとは…やるな…賊。」

??「だから勘違いだといっているではないか…だが、この勝負は面白い…受けてたちますぞ！」

今度は女の方から攻撃してきた。



ガガガガガン！

早い…なんと早い突きだ…まあ、全部受け止めてるがな。  
ガガガガガン！

??「どうした？防戦一方ではありませんか。」

ガガガガガン！

聖「なに勘違いしてるんだ？相手の強さも見きれない雑魚が…」

??「なに？」

パシッ！

俺は女の突きを素手で受け止めた。

そして俺は獲物を女に降ろうとする

聖「じゃあな…」

だが…

??「お兄さん、そこの子は賊ではありませんよー」

なんか不思議なオーラを出す少女？と眼鏡の女の子が出てきた。

いましゃべった方は不思議な少女（？）

聖「ありゃ？そうなの？わりいーわりいー。」

そうして俺は構えをとき、青髪の女の武器を返した。

??「さつきから勘違いだといってましたよ。」

眼鏡の女の子が話してくる。

聖「いや、すまんすまん。」

俺は頭をかき、笑いながら話す。

??「あの、俺凄く空気なんです…」

聖「あ、ごめんごめ…」

俺の言葉が止まった。だんだん過去の思い出が…

あ~~~~~!!

こいつ…おっと、こいつはここでは天の御遣いだから、知り合いだ  
つてことがばれたら結構、いや、大層困る。ここは抑えて…

聖「あ、すまんすまん。」

俺はいまここにいる天の御遣いのこと北郷一刀に近づき、小言で話  
す。

聖「なあ、とりあえず話に合わせる。お前は这个世界では天の御遣  
いって呼ばれてるから。」

北「え!？」

そして普通の声量に戻して話す。

聖「やあ、君って見かけない服を着てるな…もしかして、君が噂の天の御遣い？」

うむ、我ながら演技が上手い。

北「え！？いや「合わせる…でないと生きていけないぞ…」え？あ、うん。」

抗議しようとした北郷に小言でいった。

??「ほゝ貴方が天の御遣いでしたか…我が名は趙雲、字は子龍と申します。」

俺は北郷の後ろにまわり、小言でサポートする。

聖「驚くな…変な目で見られるぞ。」

北「え？あ…へゝ趙雲って言うんだ。そこの二人は？」

??「風は程立ですよー。」

聖「あの子、最初に風っていつてたろ…呼ぶなよ…殺される…あとで全てを説明するから我慢しろ…」

俺は小言で言う。チキショー、俺だって驚いてるよ…今戦ったのが趙雲って、びっくりにもほどがある…

??「私は戯志才と申します。」

北「え！「驚くな。」…あ、そうなんだ。俺は北郷一刀。字はないんだ。」

察したのか、字のことをいつてきた。

おっと、官軍らしき奴がきた。

聖「すまん。話中悪いんだが、ここを離れた方がいいぜ？後ろを見  
てみるよ。厄介事の匂いがぶんぶんするぜ。」

趙「ふむ、確かにそうですね。では我らはここを離れるとしまし  
う。では、北郷殿。それと…「起山だ。」起山殿、ではまた。」

そう言っつて皆離れていった。  
さて、そろそろいいかな。

パシッ！

北「うお！？」

聖「よう 久しぶりだな 北郷」

俺は北郷の背中を叩き、声をかける。

北「え〜つと…誰？」

か〜〜〜！

聖「マジかよ！忘れたのかよ友達を！」

うん、思い出した。聖フランチェスカ学園にいたときはこいつと友達だった。全て思い出したぞ！」

聖「しょうがない…ヒントだ！お前の友達で事故死した奴がいるだろ！」

北「え！？何で知ってるの!?!」

こいつ…

聖「は…そいつは起山 聖っていう変わった名前だったろ。」

北「え！？何故!?!なんでそこまで知ってるの!?!」

く〜ひで〜〜〜〜〜!

聖「は…思い出せ…ここにいる奴はそいつと同じ顔だろ…」

北「ん？言われてみれば…」

聖「そしてここにいる俺の名前は…もう言っぞ！俺が起山 聖だ！」

北「……………」

ん？やけにだまりこんでんな…

北「……………うわ〜〜〜〜!」

ガバ!

聖「のわ!?!」

北郷、いきなり抱きつくな。

北「なんで…なんで生きてるなら連絡くれなかったんだよ！…俺は…俺は…！」

連絡って、どうしろと言っただよ…無理だろ…

聖「…悪かった…そして、久しぶり、一刀。」

北「うわあああああああああ！！」

くそ、大声でなきやがって…

まあいい。久々の再会だ。このままにさせとこ…

このままにさせとかなきゃよかった…

聖「…どうしよう…」

北「…お前のせいだぞ…」

はい、ただいま俺らは官軍に包囲されました

聖「…どうする?」

聖・北「ア〜イ〜フル〜」

うん、なんとなくやってみた。やっぱのりにのれるやつはいいね

??「…あんたたち…随分と余裕ね…」

あ、リーダーっぽい奴が出てきた。よく見れば、曹の旗…ああ、こいつ…

聖「おい、こいつは多分曹操だぞ……ヒソヒソ…」

北「マジで!?!…ヒソヒソ…」

曹?「ほらそこ!ヒソヒソしない!」

曹操らしき奴がいつてきた。

聖「貴女はもしかして、曹操様であらせられますか?」

曹「あら?よくわかったわね。そうよ、私は曹操、字は孟徳よ。」

的中 さて、このばから抜け出すためには…

聖「曹操様!実は、この隣にいる方が天の御遣い様です!」

??「ほ〜う、それは興味深い…」

??「姉者、暴れないでくれよ…」

お？黒髪の長いのと青髪の女がでてきた。中華！って感じのふくですな。大剣を持つてる黒髪の方がまじまじと北郷を見ている。

聖「しかし、強さは一般兵より強い方がいいほうです。なので、曹孟徳様、貴女の霸道のために、こやつを天の御遣いということにして貴女の名をあげる絶好の機会だと思います！」

曹「なるほど…たしかに貴方の言う通りね。」

北「ちよつと！聖！」

聖「ま、どっちにしろ、お前は拾われておいた方がいい。生きていけないしな。」

北「確かに…」

曹「で、我が軍にくるの？」

北「わかった、こよう。「聖」そして、そこのお二方は…多分だと思いますが、黒い髪の方が夏侯惇様で、そちらの方が夏侯淵様ですか？」

惇「む？何故している？」

聖「いや、有名ですよ。貴女のような素晴らしい武勇、もう有名ですよ！会えて良かったと思っくらいですよ。」

惇「む／＼／＼そうか／＼／」

淵「照れてる姉者も可愛いな…」

にひひ！無駄にほめて主戦力を一時期動けなくする。あとは…



聖「では！曹操様！自分は旅の途中でございますので、「これで！」

びゅ〜 ガシ！

に、逃げる邪魔をするな！一刀！肩から手を離せ！

北・曹「ちよつと待て（待ちなさい）」

ひいひいひい！

聖「な、なによつとございましょうか！」

曹「貴方、もしかして【最強神】なの？」

聖「いいいいいえ！全く違います！ではこれにて！」

北「ちよつと、俺をおいていって自分は逃走か？」

こわひ〜〜！こわし！こわひ！こわし！こわひ！

北「こいつは、正真正銘の【最強神】だぜ！」

北郷〜〜〜！

曹「そう。ねえ、貴方も私のもの「逃走！」逃がさないわよ…春蘭  
！」

くっそ〜！復活しちゃった！

聖「わかりました！わかりましたから！その代わりに、条件をつける。  
いいか？」



こええええええ！北郷こええええ！

聖「いや、だめだ！無理だほんご「殺殺殺殺殺殺殺」分かった！分かった！残ればいいんでしょ！」

北「殺殺殺殺殺…へ？お前も残るの？やった！友達はやっぱり見捨てるとかしないよね」

聖「やっぱ旅に「よね」う！？分かったから、その黒ずんだオラは止める！」

曹「おおら？なにそれ…」

やべ！俺まであつちの世界にいた事がばれちまう！

北「ああ、聖も「話すな」……」う！？いや、なんでもないなんでもない…」

ふゝ、セーフだぜ…

聖「とにかく、改めて条件を出すぞ。この条件がのめないのならまた旅にでる。」

曹「分かったわ。（考えてみればまだ私のものになりなさいなんていってないわよね…まあいいわ。あの【最強神】が我が陣営に加わってくれるのなら。」

聖「言うぞ。まずは客将としてだ。正式な将にはならない。あとは一ヶ月だぞ。俺も実は用事があるんだ。」

曹「あら？その用事ってなに？」

聖「それは言えないな。」

惇「きつさまー！華琳様に隠し事を「春蘭！やめなさい！」し、し  
かし華琳様……」

聖「嫌なら俺は行くぜ。」

惇「きつさまー！華琳様の誘いを断る気「春蘭！貴女、お仕置きが  
必要みたいね……私の閨に来なさい。」は、はい！華琳様！」

な、なんだと……同性愛……だと！？

頼む……淵の方は違うよ……な……

淵「華琳様……」

曹「秋蘭、貴女も来る？」

淵「はい！華琳様！」

……排除……… 廃除……… 波委徐………

曹「！？どうしたの貴方？もしかして、貴方羨ましいの？」

こやつ……同性愛の頂点に君臨する存在……同性愛の邪気……感じる……邪  
気を払わねば……まずは……惇からだ……

惇「！？きつさまm「きつさまー！同性愛だと！？貴様のような奴が  
いるからこの世は乱れるのだ！」な、なんだいきなり！？」



北「(。。(;) 聖、お前キャラ崩壊してる気がするぞ…」

惇「反同性愛連合万歳！反同性愛連合万歳！」

淵「姉者〜！戻ってこい！」

聖「さあ、どうする？(キュピーン！)」

曹「わ、分かったわ。(肯定しないと危ない…流石にあんな風にはなりたくないもの…でも、あの【最強神】が仲間になってくれるのなら安いものよね…多分…多分…)」

聖「分かった んじゃ行くかうか」

淵「姉者〜！姉者〜！」

惇「反同性愛連合…は！？私はいったいなにをしていたのだ!？」

ち！戻りやがったか…

久々に友達と再会した聖。はたして、この物語はどのように刻まれて行くのか…

おまけ

俺はあのあと北郷を乗せて、白紀で目的地まで向かっていた。そのついでに、北郷にこの世界での説明をしていた。

北「へ〜!?!この世界は三國志のパラレルワールドなんだな。」

聖「ああ、そうさ。あと確認。この世界では現実世界にないものがある。それはなんだ?」

北「真名だろ?」

聖「正解。んじゃ、その真名はなんだ?」

北「大切な名前で、許された人でしか呼んではいけない。もし呼んでしまったら斬られても文句は言えないんだろ?」

聖「大正解!」

北「ああ、それと俺は一刀って呼んでくれよ。」

聖「わかった。なら俺はしよ…今まで通りだな。」

—「ん?あと聖、お前さ、リコーダーもってんの?」

聖「ん？なんで分かったの？」

—「いやだってさ、腰につけてるじゃん。」

聖「はは。たしかにそうだな。俺はこの世界では【奏でる鬼神】なんて呼ばれてる。」

曹「それじゃ、その小さな黒いやつで奏でながら戦うわけ？」

いつの間に…

聖「ああ、そうだよ。曹s「華琳よ。」∴いいのか？客将の俺に。」

華「いいのよ。それと、そこの御遣いにも預けておくわ。」

聖「んじゃ俺は聖だ。」

—「改めて、俺は北郷一刀。字と真名はないから一刀って呼んでくれよ。」

華「ふふ、宜しくね、一刀、聖。」

聖「あ、そうだ。ついでだからなんか奏でようか？」

俺はリコーダーを取り出した。

華「あら？【奏でる鬼神】が名前通り何か奏でてくれるのかしら？」

—「聖、頼むよ。」



聖「任せる！」

そして俺はリコーダーを吹いた。

~~~~~  
それは本当に透き通るような綺麗な音色だったらしい。

一「（ああ…久々に聞いたな。聖がやる音楽は芸術そのものだったからな…学園では結構人気だったな。）」

華「（この音色…なんて綺麗なの…まるでなにもない春の野原のよ  
うな表現をしている…どこか孤独感なところも表現されてるわね…  
なんでかしら…）」

華琳は音色の元の聖をみた。

華「／／／（な、なによあれ！あんな活発的な奴だったのに、この  
ときの涼しそうな顔…あの顔…反則だわ／／／）」

聖「～ ～～…よし！どんなもんよ！俺の奏でた曲は？」

一「ああ、最高だよ！」

華「ええ、良かったわ。今度は城の中でみんなの前で奏でてもらう  
わよ。」

聖「有り難う（ニカッ）」

華「！！／／／（な、なに？今の…あの無邪気な笑顔…あのあとに

これを見せられるって、結構効果があるじゃない！／＼／」

ん？だけど可笑しいな…なんで俺が神になっちゃうんだ？最強神つて、別に最強じゃないし…この世界では最強だと思うけど…神の中で最強つて…もしかすると…

《あたり》

やっぱりお前か！また夢でも語りかけたんだろ！いろんな人に！

《そこまでわかるとは…》

いや今までの行動見るとそつと判断しざるを得ないだろ！そもそもキヤラ崩壊おきてるぞ！

《違う！実はふざけるのが凄く好きなのだ！》

誇らしげに言うなー！

《そつか…そんなに機嫌を損ねてしまったか…悪かった》

あれ？なんかやけに素直だな…

《なら、この言葉を聞いて元気になって下さい…》

………

《俺なんて今日財布まるごと落としたんだぞー！》

知るかー！自業自得だろ！つーか探すぐらいしろよ！

《手錠が邪魔でできませんんへ）。、。（ノ）》

ブチッ！

殺すよ###

《へ）。、。（ノ）》

なんか苛つく…試すか…あの神のいる場所に向かって……『メテオ』！

《うおおおおいおい！なんか隕石降ってきたぞい！うわ！ひがついてる！やべ！熱！》

…ニヤリ

聖「……『アルテマ』『コメット』『ツイスター』『グラビガ』『フレア』『フラッド』『サンダガ』…ぶつぶつ…」

一「？なにぶつぶついつてんだ？」

聖「いや、これも修行のひとつなんだ。集中力を高めるね。（嘘）

華「変わった修行ね…けど、なるべく控えめにしなさい。周りに変な目で見られるわよ。」

聖「分かった。あともう少し…『ファイガ』『メガフレア』『ダイアモンドダスト』…ぶつぶつ」

《うへー!? いやちょっといっぺんに来すぎだろ! うは! こおって燃えて砕けてっつぎゃー……い、い、い、痛いですよ( ;`、)` )》

「……」

《うはわわー! はやならばあやらはwwjjtjmwuupjtaja  
bwtmwbmj…キザラッシュ…もう疲れぎゃあああああ!》

第十一話 天の御遣い（後書き）

直せてましたよね…

第十二話 怪力少女（前書き）

訂正しました

## 第十二話 怪力少女

俺はあのあと曹…じゃなくて、華琳が占拠している城に到着！して、さして休むかと思いきや、華琳にみんなの前でリコーダーを吹いてくれたと…畜生、たかがリコーダーだぜ！？その程度で皆の前で奏でろ？ふざけるな！つてならずにいまちゃんと吹いています。

聖「…よし、終わりだぜ どうだった？俺の奏でた曲は？」

秋「戦闘以外にこれほどな事が出来るとは…（しかし音色も良かったが、あの奏でているときの顔…あれほど感情こめて奏でているのは始めてみる…／／あの顔が…頭から離れん…／／）」

春「なかなかいい音色だったぞ！」

聖「そうか…有り難う、春蘭、秋蘭。（ニカッ）」

春・秋・華「…！！／／」「」

あ、ちなみに城についてからあの夏侯姉妹の真名を許して貰った。春蘭が惇で、秋蘭が淵だ。

「「やっぱいつ聞いても聖の演奏した曲は最高だよ！」

聖「おう！サンキューー！」

ふむ、秋蘭の方はなかなか好評：春蘭はあまり音楽には興味ないのか、まあいいんじゃない程度だな。

聖「なあ、華琳。」

華「なに？」

聖「俺休みたい。」

華「駄目よ。」

聖「なんで？」

華「なにがでk」「武官しかできませんよ。」「そう、じゃあ試験ね。春蘭！」

春「はい！華琳様！」

華「聖を試験なさい。」

春「はい！よし、行くぞ聖！」

ガシッ！

うえ！かた掴まれた！

聖「うえ！？うえ！！？」

ズルズル…

聖「ぎゃあああああ！いででで！てか何故肩なの！？せめて服



でしょ！？凄い変な体勢なんだけど！」

春「そうか。では……」

パツ                      ガシッ！

春「聖！行くぞ！」

聖「ぎゃあああああ！何故！？服って言ったけど、何故ズボン！  
？凄くイタイッス！止めてください！」

ズルズル

《こうして起山 聖の生涯は尽きた……恋姫無双転生物語完！》

聖「勝手に殺すな！いでででで！」

春「む？今だれとはなしていた？まあよいか。」

聖「良くない！ぎゃあああああ！」

《哀れなり、起山 聖！》

鍛練場

春「さあ立て！勝負だ！」

聖「無理言つな！いてて…」

俺は悲しいことに、階段のときも引きずられてきたもんだから身体中がいたいのよ〜ん

マジでいてえ…

ん？華琳たちも来た。

華「さあ、始めてちょうだい。」

聖「…無理言つな」

華「ほら、貴方の武器を持ってきてあげたから、戦いなさい。」

秋「ほれ、受けとれ。」

そついつて秋蘭が俺の武器、破神を投げてきた。

秋「結構重いなその武器…これを片手で振り回すのか…」

華「ほら、早く立ちなさい。そのまましていると春蘭に殺されるわよ。」

え???

春「うお~~~~!!」

マジかよ!? 大剣掲げてきた!

—「聖、頑張れ…」

—刀君…哀れんでもその言葉が偉大に聞こえるよ…

いつちよ頑張るか…

すく…

聖「行くぞ! 春蘭! 俺は奏でるだけじゃなく、武器も扱えるってことを見してやる! これが鬼神の力だ!」

そういつて、破神を春蘭に向けて振った。

ガキiiiiiiiiん!

春「な!? なに!?!」

ま、驚くだろうな。なんつったって、片手で受け止めたんだからな… 大剣を… けど

聖「重!! この一撃重!!」

ちよつと腕にきたな。

春蘭が一回離れて様子を見てくる。



……すみません、これをお読みの皆さん……気色悪い声を聞かせてすみません。

《…激しい…》

おい！勘違いする台詞ばっか言っちなよ！このマン！

あ、皆が俺を見ている…

一・秋・華「」（。）。（。）（。）（。）

聖「？？」

一・秋・華「」（。）。（。）（。）（。）

聖「（？）（？）（？）（？）

一・秋・華「」（。）。（。）（。）（。）

聖「（）（）（）（）（）（）（）

一・秋・華「」（。）。（。）（。）（。）

聖「（。）（。）（。）（。）（。）（。）（。）

一「なにやってんだよ…」

おお！？？ちゃんと反応してくれた！

聖「なんで皆驚いてんの？」

俺がわざとらしく聞く。

—「当然だろ！！パラレルワールドだかといってもあの夏侯惇を普通に倒すんだぞ！？どうしちまった聖！」

秋「姉者をあんなに楽に倒すとは…」

華「…合格よ…貴方は客将だけど、武官の役を任すわ。（春蘭の攻撃を片手で防ぐ程の力…そして目に見えないほどの速さ…欲しい…欲しいわ…）」

ゾクッ！！

悪感が…やばい…なんだこれは

兵「伝令！三里ほどの村付近にて、賊を発見！」

たぶんあれか。あの黄色の奴等だな。

よし、行くか！

聖「華琳！これは俺に任せてもらおう！」

ダッ！！

俺は白紀のいる馬小屋に駆け出した。

華「ちよっと！……！！！」

何て言ったのか聞こえませんか

そこで俺は破神を持ち、白紀にまたがり賊のいるところに駆け出した。

到着

《速っ！！》

いいんだよ！白紀なら当然なんだよ！

《意味不明》

さて、駄神はほつとして…

ん？一人の少女らしき人が戦ってる…一人…一人！？危なくね！？  
うおい！！なんだありゃ！なんか鉄球飛ばしてるよ！しかも軽々と  
！あ、疲れてきたみたい。だよね。さて、助けにいきますか。

いや、ここは脅した方がいいな。なら、破神を背中のおさめて…リコーダーで行くか！

聖「白紀！ここで待ってる！」

ヒヒーン！

すげえ〜！馬が応答した！

つと〜じゃあ行くか！

く？？？sideく

ボクの名前は許緒。今、ボクの村を襲ってきた賊と戦っている。

賊「かかれ！奴は一人だ！いくら強いからっていつても限界は必ず来る！殺れ！」

く、確かに少し疲れてきたみたい…だけど、あの村で戦えるのはボクと流琉だけ…流琉は戦うのは嫌いだし、あと忙しいからこの村で戦えるのはボクだけ…けど、もう限界みたい…

賊「ハッハッハ〜！死ねえ！」

賊がボクに斬りかかってくる…その時

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

どこからか綺麗な音が聞こえた。…綺麗…死ぬかもしれない場所なのに何故か暖かい…

賊「誰だ！」



賊の一人が声をあげると、一斉に音が聞こえてくるところに振り向く。

??「やれやれ…まだ経験も浅い少女一人に対してあんたらは何人で戦ってるんだよ…情けない…そして…酷いな」

男の人だ…笛みたいなのを持った男の人がこっちにいた。

??「君、よく頑張った。だけどこっからは俺がやるから」

そういつて、ボクの頭を撫でてくれた。

落ち着く…

賊「お前!どうやって移動した!」

確かに…結構距離が離れていたのに気がいたら男の人がいたみたいだった。

ボクを撫でていた手を離し、笛を持つ。

??「お前ら…良かったな…最後に大物に会えてな…喜べ!お前らの相手はこの【奏でる鬼神】が相手だ!!」

そういつて、ボクを抱えた。

賊「なにが鬼神だ!殺れ!一人増えたところで状況は変わらねえ!」

一斉に襲いかかってきた。もうだめだと思い、目を閉じた。

……おかしい…いつまでたっても死なない…というか、賊の声が遠くから聞こえてくる。

めをあげたら別の場所にいた。

??「君はここにいてくれ。俺はあのいかれたチンピラに教育しに行ってくる」

言葉の意味はわからないけど、多分倒してくるって意味なんだと思う。

??「じゃあ、行ってくる。」

許「ちょっと待って!」

ボクは男の人を呼び止めた。

許「ボクの名前は許緒!真名は季衣!助けてくれて有り難う!」

??「俺は起山!聖って呼んでくれ!」

許「わかったよ!兄ちゃん!…あ!」

つい、兄みたいな感じだったからいつちやった…

聖「兄ちゃんか…うん!いいよ!兄ちゃん!」

許「うん 有り難う」

聖「そんじゃ、そろそろ行くわ！」

そういつて、賊のいる方へ駆け出した。

〈季衣end〉

か〜〜〜！兄ちゃんか！

初めてパターンは結構いいな！今までは月に聖兄様って堅苦しい呼び方しかされなかつたっけ…

はあ〜〜〜…早く会いたい…

まあ今は目の前のゴミ処理をしようか。

聖「おい賊ども！いまから相手になってやる！覚悟しろ！」

リコーダーセット…いくぜ…

聖「きけ！これが【奏でる鬼神】が奏でる、絶望の曲を聞くがいい！」

！…！…！…！

俺は力強い曲を演奏した。さて、俺の魔法に何処まで耐えられるかな？

〈賊side〉

俺はなんか鉄球をもったガキと戦ってたらよくわからねえ男がきた。

うざってえ…

俺らにあんな小さいやつで、しかも武器じゃないもので俺達を殺す  
そつだ。

だが…

奴は奏でながら…

浮きやがった…

力強い、いかに恐怖が刻まれる曲を奏でながら…

そこまでならまだいい。だが、今度は奴がひかりだした…

次の瞬間、奴のからだから火の玉が出てきやがった。仲間が燃やさ  
れていく…今度は氷の玉だ…当たった奴は…なんか固まっちゃまった  
…俺はそれに触れてみる。冷たい…

俺は感じた…やばいと…

逃げないと殺されると…

今度は奴の周りに光の柱が出てきた。それが俺らのところに向かっ  
てくる…当たった奴は、影も残さず…

…消えた

…奴は化け物…まさに鬼神…

曲が止まった。助かったと思ったが、さらに恐ろしい事が起こった…

奴が…いつの間にか

俺らのところに前で仁王立ちしていた…

聖「貴様らは生きる価値がない…悪いな…死ね！」

奴は槍をひとふりしただけなのに…

前にいたやつ全員首が飛んでいた…

あり得ない…

次は奴は高く飛び上がり…

そして槍を叩きつけた…

聖「終わりだ…『クエイク』！」

すると俺のしたから岩がでてきた…

（賊end）

俺はあの力強い曲を奏でながら唱えている。

『ファイア』『ブリザド』

弱めの魔法をうって混乱させようかと思いきや、この二つだけで混乱しやがった…てか、逃げてる

だが、俺から逃げきれれると思っなよ…

聖「(『ホーリー』!)」

よし、いまので半数が消滅したな。んじゃ、そろそろ俺の手で殺すか。

俺はリコーダーをふくのをやめて、ゆっくりと地に着地した。

聖「悪いけど、あんたらを生かす訳にはいかないんだよな…」テレポ

あの距離ならぎりぎり可能だろう。

シュン!

おゝ出来た出来た!

すら…

俺は破神をさやから外し、構える。

ブン!

大きくひとふり。

獲物にエアロをおくり、かまいたちのようにさせた。

おゝ首がいつきにとんだ。

さて、とどめといきますか。

俺は高く飛び、獲物をふりかざす

聖「終わりだ…『クエイク』！」

高さを利用して、威力をあげる。そして

ドゴーンー！！

いっきに岩が下からでてきた。うえ、一番最低な死にかたしてやがる…岩の勢いで体が粉碎してやがる…グロ！

《いやお前がやったんだろ》

うるさいよ

《焼き払え！》

了解 『ファイガ』

《え！？こつちにつってきた…あっちいいいいい！》

なんで死なない…

《そりゃ神だもん！》

さいですか…

《A上A A A A右!》

A B A A右A A右!

《A A A右左上!》

うるさい!

《お前ものってたくせに…!》

うるさいよ もう一度言っよ うるさいよ

《平和主義者め!》

帝国主義です。

《なに!?!平和を目指しているのではないのか!?!》

俺とお前の関係は俺が強者ツッコミでお前が弱者ボケだ。

《いや、お前もぼけるだろう!》

…ち、腐ってやがる…

《( )。、( )》

もういいや。それより戻るか。



季「兄ちゃん！」

ガバツ！

聖「うお！？どうした！いきなり抱きついてきて」

季「……」

聖「あのな、俺が負けるわけないだろ？なんつったって、【奏でる鬼神】のこの俺が負けてたまるかっての。心配させて悪かったな。」

ナデナデ

季「兄ちゃんの手、暖かい／＼／」

お！喜んでる喜んでる！

聖「ところで、なんで君は一人で戦ってたんだ？」

季「それは、ボクの村の県令がお金だけ持って逃げちゃって…村に戦える人はボクともう一人の流琉っていう子だけで、けど流琉は忙しくて、戦いを好まないからボク一人で戦ってたんだ。」

なるほど…

聖「そうか…なあ、ここの村を、俺の紹介する官軍に治めて貰えば？」

季「官軍とかはもう信用出来ないよ…そうだ！兄ちゃんが県令をやれば？」

…は？

聖「俺が？」

季「うん」

いや無理言つな…

聖「いやそれは無理だ」

季「どうして？」

聖「まず県令つて、そんな簡単になれるものじゃないし、俺はそれよりも導きたい大切な人がいるんだ。」

月…

聖「あ、そうそう。俺が教える官軍は馬鹿じゃないよ。民の事を考え、平和な世界を目指そうとしている立派な人さ。」

季「…本当に？」

聖「ああ、俺が保証する。そのついでに、その人につかえてみれば

「？」

季「……………」

「そう簡単に納得してくれないよな…」

季「わかったよ！兄ちゃんを信じるよ！ただし…」

聖「ただし？」

季「ボクはその人じゃなくて兄ちゃんにつかえるよ。」

……………

聖「……………本気？」

季「勿論」

聖「…えええー！ー！？」

「バツ！」

「勢いで離れた…」

季「ビックリしたな…どうしたの？」

聖「いや、俺に！？俺に！？いやいやいやいや！駄目だろ！俺は軍を率いた事がないんだぞ！というか、統率したことすらないよ！」

季「だめ？（上目遣い+潤目）」

ぐは！？せけえぞ！俺も出来るけど、ここまで効果があるとは…畜生！銅にでもなれ！違っ！銅になってどうする！どうにでもなれだよ！

《一人ツッコミWWW》

黙れ！あ~~~~~！

聖「わかった！俺につかえて後悔するなよ？人の扱い苦手なんだから…」

季「本当？やったー！！」

ガバツ！

聖「うお！？」

再び抱きついてきた…

季「じゃあ早速流琉のところ行こう！」

聖「わかった！わかったから離れろ！」

季「やだ！」

聖「（　　一一一）」

とにかく行こう…

パツカパツカ

俺は白紀にのり、その後ろに季衣がのっている。

そして、季衣の知り合いがいると言つ町についた。

聖「えっと、ここをどっち?」

季「こっち!」

聖「いや、わからんわからん…せめて左右ぐらいは覚えてくれよ…」

すぐく分かりにくい道案内を受けています。

聖「え〜と、どこ?」

季「行きすぎだよ兄ちゃん」

聖「うえ!?!」

聖「こつちでいいか？」

季「兄ちゃん、そつちは戻りすぎ…」

聖「ヴェエ!？」

聖「やっとついた…」

季「本当、兄ちゃんは迷子になりやすいんだから」

いや、あの説明じゃ…ねえ…

俺は知り合いのいる店に入った。おっと、馬はちゃんと馬小屋にいられたぞ。

カランカラン

??「いらつしゃい…季衣!？」

季「流琉〜!」

??「どうやって?あの数をもしかして倒したの!？」

季「違うよ!兄ちゃんが助けてくれたんだ!」

??「兄ちゃん?」

聖「ど、ども。」

??「そうだったんですか…有り難うございます。」

俺は場所をかえて話していた。外でだけだね。

聖「いやいや、べつに平気だよ。あ、それと俺は起山。」

??「私は典章で、真名を流琉ともうします。」

聖「いいのか?真名まで」

流「はい。季衣を助けてくれた恩人ですから。」

聖「そうか。んじゃ、俺は聖っていうんだ。宜しく。」

季「あ、流琉！大事な話があるんだ。」

流「??？」

季「ボクは兄ちゃんにつかえることにしたよ。」

流「……………え……………!？」

季「だから、それで流琉も誘いにきたんだけど……」

聖・流「え……………!？」

初耳ですよ！これは初耳ですよ！

聖「季衣、これは初めて聞いたぞ。」

季「へ？いつてなかったっけ？」

いつてねえし……

季「で、どうするの?」

流「……………」

そりゃ悩むよな……だいい「決めました!」……へ?もしか……



流「私、聖さんにつかえます！」

うえ〜〜どんだけ単純なの…パラレルワールドになるとこれほどまで単純になるのか？

聖「有り難う。こんな俺でも支えてくれる？」

季・流「うん！（はい！）」

聖「そうか、有り難う！これから改めて宜しくな！（ニカッ！）」

季・流「！！！！／／／／」

ん？二人の顔が赤いな…

《お！？二人また犠牲者が恋の犠牲者が増えたな。鈍感君！》

なあなあ、恋ってなに？

《…へ？》

いやだから、恋ってなに？

《…皆さん！わかりました！聖は鈍感ではありません！恋って言うのが知らないらしいです！》

だれに話してるんだ？

流「あの…」

聖「ん？」

流「に、兄様って呼んでいいですか？」

…兄様攻撃はきかねえぞ！なんつったって、兄様はもうすでに慣れている。

聖「ああ、いいぞ！」

流「…！！はい、兄様」

聖「さて、行くか。」

流「へ？何処にですか？」

おっと、いってなかったな。

聖「ここをおさめてくれる官軍、曹操のところだ。」

そして、俺は華琳のいる城へ向かった。あらたな、二人の部下…いや、妹達と共に…

ついた…

聖「俺はここで客将をしてるんだ。すこしの間はここで過ごすから。けど、問題が一つあるんだよ…」

流「それはなんですか兄様？」

聖「ああ、部屋のことだ。あくまで俺の配下になったんだから、部屋って用意されるのかな…」

季「そんなことで悩んだの？簡単じゃん！駄目なら兄ちゃんと一緒にの部屋で過ごせばいいんじゃない？」

聖「な、なにいつてるんだ季衣は！」

流「そうだよ／＼」

季「え？もしかして、兄ちゃんと一緒にはやだ？流琉？」

聖「なにいつてるんだよ！そういう問題じゃ」「平気…です…／＼／＼」  
「てヴェエ!?!」

流「一緒でも…平気です…／＼／」

聖「いやなんか色々やばいつて！」

季「とにかく行こう！」

もういいや。

そのあと、ちゃんと部屋は皆の分用意させられました。

さて、二人の部下をてにいれた「妹」…妹をてにいれた聖はこれからどのような物語をきざむのか。

本当におまけ

〈月side〉

月「へう~~~~~!？」

??「どうしたの月!？」

月「いや、詠ちゃん、大丈夫だよ…けどなんか聖兄様になにか不吉なものがとりついてるような…」

詠「月の兄って、どこにいったんのかしらね…いちど顔は見ときたいわ。月が毎日のように語ってるのですもの。」

聖兄様…なにをしてるんですか…実をいうと、物凄く腹立たしいんですよ…聖兄様のことです…

く月endく

聖「うひゃひゃくく!!」

流「うわ!？」

季「へあ!？」

華「???…どうしたの?三人とも…」

聖「いや、今物凄い悪感が…」

流「私も感じました…」

季「ボクも…」

聖「これは…偶然じゃないな…きおつける…なにかがおこるかもしれないからな…」

流・季「はい、兄様。(わかったよ、兄ちゃん。)」

く鈴々sideく

鈴「うわわわくく!？」

朱「はわ!？どうかしたのですか!？鈴々ちゃん。」

愛「どうしたのだ?鈴々…これから戦なのだぞ?」

なんなのだ…いまのは…

鈴「いや、お兄ちゃんのことを考えてたらいきなり背中がゾワッて…」

愛「ああ、聖殿か…かまるで兄様みたいな…あひゃ!？」

??「どおしたの?」

愛「いや、桃香様…聖殿のことを考えてたら…聖殿は兄様みたいな雰囲気を出してたと思いついたら…悪感が…」

桃「へ…愛紗ちゃんが気になる人か…あつてみたいな」

何故か愛紗まで感じているのだ…

第十二話 怪力少女（後書き）

何回訂正したらきかすむんだ…俺…

第十三話 魔の手からの脱出(前書き)

できたー！なんか遅いな…俺…



## 第十三話 魔の手からの脱出

うひゃ〜…俺は一ヶ月経過して自分の部屋で準備をしていた。

俺の部屋にはその準備を手伝ってくれてる妹二人がいる。

聖「  
」

流「???どうしたのですか兄様？」

まあそりゃそうだ。えらく上機嫌だもんな、俺。

聖「あ、ごめんごめん。まだいつてなかったね。次の目的地は董卓のところだよ。」

流「董卓…ですか…？」

あれ？何故か不思議な反応してる…なんか可笑しなこと言ってる？

季「ねえ兄ちゃん、その董卓って子とどんな関係なの？」

あるえ？あ、そうか。偽名で通し続けてたな。

聖「ああ…董卓は、俺の妹だ。」

季・流「へ？」

…え???なんかいけないこと言った？

まだこれから説明するところなのに…

季「その子も、ボクたちの関係に似てるの？」

聖「…これに答えるには…本当に俺についてきてくれるよね…でないと教えられないよ…」

季「兄ちゃん、ボクたちは決めただから。ボクたちは兄ちゃんについてくつて。」

いい子や…

聖「…わかった。んじゃ重要なことを話す。」

季・流「ゴクツ…」

そこまでくいつかなくとも…話しにくい！

聖「俺は…今まで半分偽名を使ってた。俺の本当の名前は…姓が董、名が雷、字が起山、真名が聖…」

季・流「…へ？え〜〜〜〜〜！？」

バタン！！

??「うるっさいわよ！！少しは静かにしてくれない!？」

扉から猫耳フードを着用した少女、荀イクこと桂花がきた。おっと、真名は交換したぞ。いやいやそうだったがな。

聖「あんたの声も頭に響くっての…」

桂「なんかいった!?」

聖「あまり扉をあけつつけるな…あれが入ってくる…あ!?桂花! 後ろ!後ろ!」

桂「なによ!!!いきなピト…」

…蛾…が…

ジャキ!

聖「桂花!動くな!その害虫を切り裂く!!!この部屋にこいつが入ったら俺の荷物や妹が汚染されてしまう!!!」

桂「ちよつと!!!どこからだしたのよ!その二つの武器!ていうか!早くとりなさいよ!!!」

聖「動くなつて言ってるだろうが!!!」

華「うるさいわよ!どうしたの!今夜中よ!!!静かにしてちょうだい!!!」

桂「華琳様!ここからお離れ下さい!人類の敵に汚されますよ!!!」

聖「華琳!!!離れる!!!この世に存在してはならないグズと今戦闘中だ!!!」

ブン！ブン！

桂「ちょっと！どこ振ってるのよ！はやく退治してよー！」

聖「無理言つなー！くそー！一回切り裂いたことがあるんだが…切つたらなんかの液体が…ドバアって…くっそおおおー！俺は恐怖に打ち勝つー！」

ブン！ブン！クラッ

やべー！勢いに負けて体が…

ドカツ！

あつちやく桂花を押し倒す状態になっちまったよ…いや、そんなことを気にしてる場合じゃない！

桂「ち、ちょっと！／＼／＼になやってんのよ／＼／＼はやく退きなさいよー！／＼／＼」

聖「悪い…おい！桂花！華琳のところをってみろ！」

桂「へ??？」

華「うわ!?ちょっと！二人とも！この虫を何とかしなさいよ！」

聖「うわうわうわ馬鹿！この虫を暴れさせんな！粉らしきものが俺にかかってく…くは！ちきしょー！」

バツ！　　すく…

ゴゴゴゴッ

季「ねえ、兄ちゃんってあんなに虫が嫌いだったんだね……」

流「兄様へ戻ってきてくださーい……」

華「（け、桂花もこんな威圧を出せるなんて……）」

消す……ケス……ケス……

桂「華琳様に……よくも……よくも……あの虫……消すわ……」

聖「ケス……ケス……」

聖「うーん……は!？」

俺は布団の上にあった。

チュンチュン

聖「朝か……」

まあ、桂花とは一応何だかんだで仲良くはしてる。主に虫のことで  
…さて、起きるか…

再度挑戦…

季「うん…兄ちゃん…」

流「ス…ス…」

うわ…なにこれ…妹二人が俺の上で寝てるよ…

聖「おい二人とも…起きろ」

流「うん…は！？兄様！？／＼／」

季「うん…おはよう、兄ちゃん」

聖「と、とにかく降りてくれない？」

流「は、はい／＼すみません／＼」

すく

よし、服は…着替えなくていいかな。よくわからんが、寝巻きじゃないので寝てた。

聖「よし、朝食を食べたら行くか！」

季・流「うん（はい）」

）華琳side）

約束の日がきてしまったわ…けど、彼を逃がすのはとても惜しい…  
もう少し時間があれば私の配下にできたはず…

私は今、聖のことで緊急会議を行っている。

華「…全員揃ったわね…」

秋「…？あの、華琳様…桂花はどうしたのでしょうか。」

華「桂花は夜におこった虫騒動により気絶してまだ起きてないわ。」

「…: どんだけ虫が嫌いなんだよ…:」

…: 本当よ…: はあ…:

華「それで、今回の会議の内容は、単刀直入で言つと聖の事よ。」

「あゝ聖のことが…: あいつ、俺でもなに考えてるかわからないと  
きがあるもんな…: けど、ああいう楽しい奴はいてほしいよね。」

春「あやつとの決着はまだついていない！奴を他のところにいかせ  
るわけにはいかん！まだ奴に一本もとれていないのだからな！」

華「春蘭…: それだと明らか聖の方が強いといっているようなものだ  
と思つけど…: あと、それじゃあ負け惜しみみたいに聞こえるわよ。」

春「うっ！？華琳様…:」

秋「あゝ、姉者は可愛いな…: うぐ!？」

華「どおしたの？秋蘭」

秋「いえ、華琳様…: 一回私はあの聖の教育を受けてるので…: それ  
を思い出してしまい…:」

…: 確かにあれは怖いわね…: この私でさえも恐怖を感じるもの…:

華「…: 欲しいけど、それは相等な覚悟が必要ね…:」

「一刀以外「(コクリ…:)」



—「…?」

華「とりあえず、誰か聖を残すことができる策を用意してる人はいるかしら?」

春「華琳様!それならば力づくで残せば良いのでは?」

—「(。 - - )」

華「(。 - - )」

秋「…姉者、戦って勝てない相手に力づくでって…そもそも見ただろう…何回戦っても負ける…」

春「ぬう…」

—「しかも一合目で…」

春「北郷…お前まで…」

華「しかも聖は武器を持ってない状態で…あと最近では目を閉じて戦ってたわよ…」

—「…本当?」

華「本当よ。どうやら何回か戦ってるうちに春蘭の攻撃が完全に予測できるようになったらしいわ。」

—「…化け物…」

秋「本当に化け物だな、奴は…」

華「…ええ…他になにか思い付く？」

—「……………」

春「…ぐぬぬ…もう少し私が強ければ…」

秋「姉者…残念だが、少しでは足りないと思うが…」

—「…あのさ、聖は虫と同性愛が嫌いなんだよな。それを利用するのは？」

…確かにいい案だわ…だけど…

華「一刀にしてはいい案ね。けれど、同性愛を使うと誰が彼の教育をつけるのかしら…貴方なら話が別だけど…」

—「う！？俺もあれは勘弁だな…それじゃあ虫は？」

華「どうやっていまから集めるといの？それに、もしできたとしても、聖が暴走したらこの城は粉碎するわよ。」

—「……………く！」

秋「…では好きなものでどうでしょうか。」

華「…好きなものねえ…流琉は聖のことをいったうえで料理のやり方をすすめるとか…私は流琉担当ならいいわ。」

「俺は聖担当。あいつは好きなものはだいたいわかるから。」

秋「では季衣は私が担当します。食糧をすすめればついてくるでしょう。」

華「では秋蘭の案を採用するわ。いいわね?」

秋・春・一「」「はい!」(了解!)「」「」

ふふふ…貴方は簡単に逃がさないわよ…

〈華琳end〉

さて、朝食もすんだし、行くかな。

聖「よし、行くか!」

季・流「うん!」(はい!)「」

さて…

ゾロゾロ…

うわ、あの桂花以外の皆様が来ましたよ…

「聖!ちよつとこっちにきて!」

ガシ!

うわ!いきなり手を掴むなよ!

グイ!

聖「わかったわかったから…ちょっと待ってて!」

—「刀の部屋に無理やり入れられた…」

聖「で、話ってなに?」

—「いやさ、お前音楽好きだろ?」

それがどうした?

聖「そうだけど…」

—「それでき、実は俺さ、あっちの世界でいるんな歌詞の本を持ってきたんだよ。」

聖「マジで!? やべ! 欲しい!」

—「そうか、じゃああげるよ。(ふ)…スクールバックの中にたまにたま歌詞の本が入ってたんだよな…まさかここでフル活用されると

は……その代わりにさ、吹いて欲しい曲があるんだよね。」

聖「借りた恩は返さなくてわ！」

—「じゃあこれと……………」

き、今日ぐらい大丈夫だよね……

〈季衣side〉

行っちゃった…兄ちゃん、いつ戻ってくるかな…

秋「季衣、ちよつときて欲しいのだが…」

季「うん、わかったよ。流琉！ちよつといつてくるね！」

春「季衣！突然だが、なにか食べるか？」

季「へ？いいの？」

秋「ああ…今日は好きなもの食べていいぞ。」

季「わ〜い あ、けど、兄ちゃんと今日旅に出るから…」

秋「その心配はいらないぞ。聖も今日は行くのを止めたらしいからな。」

季「そうなの？じゃあ……………」

〈季衣end〉

〈流琉side〉

は…みんな行っちゃいました…

華「流琉。ちょっと話があるんだけど。」

流「はい、なんでしょうか？」

華「貴女にちょっともらって欲しいものがあるのよ。ちょっと来てちょうだい。」

流「はい…」

なんだろう…

私がついた所は倉庫でした。

華「これ全部あげるわ。」

あつたのは料理のほんでした。しかも沢山の…

流「あの、いいんですか？」

華「ええ、いいわよ。聖に美味しいものを作ってあげたいわよね。」

兄様…この料理の本を全て作れるようになると誉めてくれるかな…

華「今日は料理場つかっていいわよ。今日一日貸してあげる。」

流「あ、有り難うございます!」

〈流琉end〉

ぐ、はかられた…

あのと俺ら三人（季衣と流琉と俺）はいま俺の部屋にいる。

聖「……く、不覚だ…今日出るつもりが…明日になってしまった…」

もう夜だ。今から旅なんて出来るわけがない…

聖「季衣はなんか幸せそうだが…」

流「はい。季衣は今日春蘭様と秋蘭様にご飯を奢ってもらったらしいです。」

季「ふ〜」

聖「……俺は不覚ながらも一刀からもらった本にむちゆうになってしまった…」

そついつて本を出す。

流「…私は華琳様に料理をすすめられて…」

聖「……あいつ、俺らをここに引き込む気だな…しょうがない…明日朝は早いから早めに寝よう…そしてばれないように出るか…」

季「なら今日も兄ちゃんと一緒に寝よう」

聖「え！？…もういいや、よし寝るか。」

季「わ〜い」



流「え！？／／ちよつと！／／」

聖「…諦めて寝よう…」

流「…はい／／」

…よし、早く起きられたか…

聖「起きろ」

ユサユサ

季「うん…兄ちゃん？」

流「ふあゝ…はい…」

聖「早くしないと華琳たちが起きちまつたる。早く行こう」

流・季「はい…（うん…）」

うっし！白紀にいま三人でのって、門を目指しています！

季「兄ちゃん！皆になんか言わなくてよかったの？」

聖「ああ、こうでもしなくちゃ帰らせてくれないからね。」

??「誰が帰らせてくれないですって？」

??「聖！まだ貴様との勝負はついてないぞ！！」

??「姉者…勝負はついてると思うのだが…」

…聞いたことのある声が…

ゆっくり振り向くと…

華「逃がさないわよ！」

春「貴様！逃がすか！」

秋「悪いな…聖…」

でた〜！曹操軍の基本的三人組！

しかも全員馬にまたがっているだと…

《うお？さてさて逃げ切れるかね…》

うるさい！

聖「クソツ！二人とも！しっかり掴まってるよ！」

季・流「わかったよ！（はい！）」「」

聖「白紀！そのままあの門に向かって全速前進！」

ヒーン！

うお！？はや！

華「くそ…追い付かないわね…門を閉めよ！」

まずい！ヤバイ！あともう少しだったのに…いや、まだなにかある…

そうだ！あれだ！

華「（ふふふ…今日この日…ついに私の物に…ついに…）諦めなさい。私の物になりなさい。」

なつてたまるかよ！

聖「忘れてないか！俺は妖術も使えるんだぜ！（本当は魔法だけど…）」

華「妖術？どんなものを見せてくれるのかしら？」

聖「いくぜ…『ヘイスト』！」

馬にヘイストをかけた。いききに速くなった。これなら門がしまる前に行ける。

華「な！？（なに…今の…いきなり馬の速さが異常になった…ますます欲しくなるじゃない…いつか…必ず…）」

ふゝあぶね…なんとかついた…

聖「よし、みんな…改めて行くか！」

季・流「うん！（はい！）」

《なあなあ…最後の台詞、短くね？てか、俺登場場面が今回異常に少ないんだけど…》

なにいつてるんだよ…

《ぶるるるるあああああああ！…！》

うわ！？いきなりなんだよ…びっくりしたじゃないか…

《四捨五入》

意味不明

《かゆ うま》

なあ、そのネタ結構使ってくるよね…本当は怖い系なのに…

《ええやないか ええやないか》

………可哀想………

《なんだと？貴様！》

おい、怒るのはいいが、そろそろプリ〇ユアー の時間だぜ。

《な、なんだと！プ〇キュアー の時間だと！？馬鹿な！俺は…俺は…懐かしのセーラー〇ーンの方が好きだぞ！》

ん？あゝあれね…月にかわってお仕置きよか…

《くは~~~~~ 俺が代わりにお仕置きされたいよ〜》

悪趣味め…

《なんだと！？君はあのアニメの素晴らしさがわからないのか！！》

言うこと一つ一つキモい…

《我々に新たな仲間が加わることとなった……14番目だ…アニメ界チャンピオンに選ばれし者だ…》

は！？てめえ、調子のんなよおい！

《ひきこゝもり〜お〜もてでろ〜》

今日こゝそ白黒つけなきゃね〜 …メガ…いや、やめておこじ…

《眼鏡〜ガネメ！》

うるさい…

流「どうしたのですか？さっきから難しい顔されてますが…」

聖「いや、何でもないよ。」

《こつして聖は曹操の魔の手から逃れ、妹の月の元に急ぐのだった…》

くそ〜…しめ役とられた…

## 第十三話 魔の手からの脱出（後書き）

神様とのトーキングタイムが後ろに来ちゃった…だが、後悔はする  
が反省はしねえ！いや、やっちゃいかんか、この台詞…

第十四話 武神と鬼神（前書き）

訂正したんだぜ！

《また訂正かよ！ふふ、間違えたところ、知ってるぜ！ぜんバキ  
ッ！グバア！？》

世の中には、知らなくていいことだってあるんだよ…

《ゴメンナサイ》



## 第十四話 武神と鬼神

ふゝ…あの地獄の魔の手から逃れて数日たった。

…旅には困ってないんだよ…いや、寧ろ結構いい旅かもしれない。  
食料の量以外は…

けど、その分原因の季衣は食料捕獲率が半端ねえし、それを流琉が料理してくれて…凄じらしいっす。いやゝ仲間に引き入れて大正解だったよ、本当。はあゝ…

けど、困ってることがあるんだよ…それが…

《それは俺のネタを聞くのが飽きたということかい？おじさん、悲しいよ…》

あ…今おじさん認めてた。

まあ駄神のせいも一理あるが…

流「兄様、目の前にまた賊がいますよ。」

季「はあゝこれで何回目だろう…流石のボクも疲れてきちゃったよ…」

行く先々で必ず賊に会うんだよ…

聖「……あゝゝゝゝ！もう何回目だよ！畜生！二人とも！討伐

するぞ！」

二人は馬からおりて、武器を構える。流琉は…一応戦えてる。季衣の話だと戦うのは嫌い。確かに嫌そうだけど、戦うときは戦ってくれている。なんちゅうか、あれは季衣の気遣いだったらしい。

おい、ちょっとまで。俺は獄神を出現させたり消滅させたりできるけど、今お前ら、どこからその鉄球と巨大なヨーヨーらしき物が…

聖「…なあ、それどこから出したんだ？」

季「それを気にしちゃこの物語は終わりだよ。兄ちゃん。」

流「そうですよ兄様。気にしたら負けです。」

《恋姫夢想転生物語―完結―》

いや、まだ終わってないからね。ていうか、夢想じゃなくて無双だぞ。

聖「よし！逝くぞ！」

季「兄ちゃん！それじゃ本当に終わっちゃっよ！」

流「字が違います！危ないですよ兄様！」

《ふ、君も間違えたな。》

うげえ…

聖「…よし、改めて…行くぞ！季衣！流琉！」

季・流「うん！（はい！）」

只今戦闘中

賊「ぐわああああ！」

賊「ば、化け物だ！」

賊「へ、変態だ！」

賊「よ、幼女趣味だ！」

??「ぶるううううあああああああああ！」

おい！ちよつとまって！化け物も傷つくけど、変態とか幼女趣味ってなんだよ！てか、最後のやつ誰だよ！

流「や~~~~~！！」

季「うりゃ~~~~~！！」

ポコーン!!

二人が武器を振るう。

なあ、どこからそんな怪力出てくるんだよ…俺は前世（FFの世界）で頑張ったから魔法で強化することはできるけど、君達なに？君達こそ化け物じゃね？

てか、俺いま馬からおりて戦ってるんだよね。だって…

ヒヒーン!!

賊「ぐわあああ!？」

賊「なんだあの馬は!？」

白紀がね…戦闘っちゃってるんですよ。

まあ俺だって負けてはないがね。

聖「いくぜ!【奏でる鬼神】は奏でるだけじゃなく、武器を振るうだけでもなく、妖術も使えるんだぜ!いくぜ!『魔法剣 ファイガ』!」

俺は武器に炎をまとわせて、敵を切り裂いてく。

敵は次々と燃えていく。

賊「ぐわあああ!体が燃えるうう!!」

賊「ぐわああああ！体が萌えるうう！」

《俺も萌える〜！》

うほい！こいつら本当に賊か！？二人の台詞、似てるけどさ、萌えるは駄目だろ！それと変態中年おやじ！お前も紛れ込んでのるな！

季「兄ちゃん！あそこで誰か戦ってるよ！」

季衣の指差す方を見る。

誰がいる…一人で殲滅させに来たのかな…いや、ありえない…とにかくいってみるか。

聖「季衣！流琉！俺はあつちの方へ行くから！白紀を頼んだぞ！」

季・流「わかったよ！（わかりました！）」「」

俺は黒龍と破神を構えて戦っている人のところに行く。

「?????side」

名前は呂布、真名は恋。いま、賊を討伐してる。

賊「うおらあああ！」

賊が斧を振り上げてくる。

恋はそれをかわし、恋の武器を振るう。

ズシャー!!

賊「ギャー!!」

いつきに五人くらい斬った。流石にちよつと疲れてきた。

賊「はっは!死ねや!」

賊が後ろから斧を降り下ろしてきた。死を覚悟したその時

ザシユ!

賊「ぎゃあああああ!」

??「大丈夫かい?」

男の人が助けてくれた。彼には二つの重そうな武器が持たれていた。

〈呂布end〉

ふゝ、危なかった。少しでも遅れてたら彼女は死んでたな。けど、なんだこの子。髪は赤く、アホ毛が二つピョコンとはえている。おとなしそうだが、彼女の武器が…なんか凄いなだね。もしかしてだけど…呂布?

俺は彼女に背中を預けて武器を構える。

聖「いけるかい?君。」

??」「…(コケン)「

やべー！仕草が可愛い！

聖「んじゃ、一応自己紹介。俺は起山。君は？」

??」「……恋。」

…へ？いきなり？

聖「ちよつと待て！それって真名だよな。いいのか？会ったばっかりなのに…」

恋「…助けて貰ったお礼」

聖「そうか、俺は聖だ。宜しく。」

恋「！？」

ん？なんで驚いてるんだ？

恋「……の兄さん？」

え？なんて言ったの？聞き取れないんだが…

聖「話は後だ。まずはこれをかたずけてからだ。」

恋「……恋、行く」

聖「賊ども！貴様らの相手はこの【奏でる鬼神】が相手だ！」

俺と恋は武器を構え、いつきに駆け出した。

ザシユ!

賊「ぎゃあああああ!」

ドサツ!

聖「ふゝ……こっちは片付いたぞ!」

恋「……こっちも終わった……」

季「兄ちゃん!こっちは終わったよ……!」

季衣と流琉が駆け寄ってくる。

季「あれ?君は誰?」

恋「……恋」

流「あれ?それって真名ですよね。いいんですか?初対面の私たち



に。」

恋「……聖の仲間……いい人……」

季「兄ちゃん真名許したんだ。わかった！兄ちゃんが許したんなら許すよ！ボクは許緒！真名は季衣って言うんだよ！宜しくね！」

流「私は典章で、真名を流琉と申します。」

… あんたら、真名の大切さがわかって無いだろ…

グイッ！

うほ！いきなり引つ張られた！

聖「どうした！恋！」

恋「……来て……」

うえー！？なにいきなり！

聖「なんで！？どうしたの！？」

恋「………会わせたい人………いる……」

グイッ！

聖「わかったから！いくから！二人とも！白紀！行くぞ！」

それからしばらく歩いたら官軍らしき人達のところについた。

??「恋！無事だったか！それと、こいつは誰だ？」

??「恋、まさか誘拐してきたんとちゃうよな。」

なんだ…斧をもった銀色の髪をした女と、肌の露出が半端ねえ、さ  
らしを胸にまいている、偃月刀の使い手で、なぜか関西弁しゃべる  
女が俺らを見た。

恋「恋、探してる人、連れてきた。」

ちょっと！いきなりなに!?

聖「あ、ども。俺は起山つす。」

恋「偽名、駄目。本名、言う。」

なに？偽名ではないが、偽名だとばれているだど!?!仕方ない…

聖「はあ…俺は姓は董、名は雷、字は起山だ。」

??・??「!?!?」

あの二人の女性がびっくりしてる。

??「お前、もしかして!!」

聖「まずは君達の名前を名乗ってくれない？」

??「…これは失礼しました。我が名は華雄と申します。」

ふえ?いきなり敬語になった。愛紗のときとは違うな。なんか完全に敬っている感じだな。

??「ひゃ〜こりゃ驚いたわ…うちの名前は張遼な。よろしゅうな。」

と、とりあえず二人とも自己紹介させよう。

聖「と、とりあえず二人とも、自己紹介を。」

季「う、うん。ボクの名前は許緒だよ。」

流「私は典章と申します。」

雄「ふむ。許緒、典章、それから董雷様。これから会わせたいお方がいるので同行願いたいのですが。」

遼「すまん、兄ちゃんたち、ちょっと一緒にきてもらえんかな。いや、きてもらおうぞ。」

聖「え?え!？」

雄「ささ、行きましよう。」

聖「うえ!?!」

謎の官軍に会った聖。彼はこのあと、何が待ち受けるのか。

《へい 次回も楽しみにな》

なあ、あんたつてさ、なんで会話にちよくちよく出てくるの?サポ  
ーターのつもり?

《違うな。俺は迷惑ダーだ!》

もういい…

第十四話 武神と鬼神（後書き）

ふう…どうでした？

《間違えすぎだ まぬけ》

てめえに聞いてねえよ、駄神…

《ぶるううううあああああああああ！》

うるさいよ…

スイマセン…駄神が暴走状態で…これからも宜しくお願いします。

《アツハツハツハ！》

第十五話 再会、試験、誓い（前書き）

訂正しました。

## 第十五話 再会、試験、誓い

聖「うっは〜…こりゃ…」

只今俺は張遼と華雄に連行？されながら門に入った。

季「うわ〜…」

流「…凄い…」

ま、驚くのは無理ないか。俺だって驚いてるんだ…なんちゅう活気だよ…この町は…

聖「…スゲエ…なあ、ここは誰がおさめてるんだ？なんか色々スゲエぞ…」

遼「はは…そういえばまだ行き先教えとらんかったな。驚くなや。ここは董雷の妹、董卓がおさめてる町や！」

聖「ふ〜ん…董卓ね〜…」

……………てえ〜〜〜

〜！！！！！！！？」

遼「なんやねん！驚くならもつとはよ驚けや！ちゅうか、なんや！今の間は！」

聖「だって、驚くなって言われてたし…」

さすがにリアクションはオーバーだったかな。

雄「董卓様、もう少しで到着します。」

いやっほ〜 久々に月との再会だ

《まあ落ち着けよ！幼女趣味！》

誰が幼女趣味だ！ただ妹との再会をするのが待ち遠しかっただけだぞ！

《ロ・リ・コ・ン》

うが〜！殺す！！

つと！城が見えてきたな。

そして俺は、三人の將軍に連れられて玉座の間の扉の前にいる。

雄「董卓様！客人をお連れしました！」

あ、勿論あの季衣と流琉も同行してるぜ。



季「兄ちゃんの妹か…早くあつてみたいな」

流「兄様の妹なので、結構季衣と同じだったりして…」

聖「ちょい待て！それどどういう意味だよ！」

《今までの行動を見ればすぐにわかる！》

うつせえよ！

??「どうぞ。」

おお！誰かの声がきこえた！これは…月？

扉をあける。そこには…

月「！？…聖兄様！？」

??「ちよつと！月！？」

月と…隣にいる緑髪のカネメのカネメの眼鏡女は誰だ？

聖「…ただいま、月。」

ガタン！

月が立ち上がった。そして…

ガバツ！

抱きつかれた！やべ！あの皇帝っぽい服、すげえ似合ってるんだけど！

月「聖兄様です…本物の聖兄様です…」

抱きつかれながら泣きついてる。やべ！感動！

聖「ああ、ごめんな…月。」

月「…聖兄様…」

月は声をこらしながら泣いている。

??「グスツ…」

うほ！眼鏡がつられ泣きしてる！

遼「グスツ！ええなあ…姉妹つてのわなあ…」

雄「……………」

やべ！かっけー！華雄かっけー！涙だけ静かにクールに流してる！そして張遼！ちよつと待てや！姉妹つてなんだよ！俺は女じゃねえぞ！

ザバ〜〜〜！！

季「うわ〜〜〜ん！！感動するよ〜〜〜！！」

流「ククツ…季衣…やめて。ちょっと笑い泣きになりそうだから…」

…流琉、その気持ち凄くわかるよ…季衣、お前感動して泣くのはいいんだが…涙を滝のように流すのは…そして、これならまだ笑わないんだけど、あんた…鼻水まで滝のように流すのはどうかと思うよ！

月「……うつ…兄様…」

おっと…しばらくこのままにさせとくか…

《あ~~~~！？やっべ〜！今日のプリ〇ユア録画するの忘れた！畜生！！》

感動ぶち壊すなああああ！

俺だけ苦笑いになるだろうが！

《アツハツハツハ！俺にはマニアという二文字しかねえ！》

いや！誰がどう見てもオタクだぞ！しかも二文字じゃねえし！

《ほれほれ！感動して見せよ！我のつくった最高傑作のドラマ！“おじいさんのおねしょ”で感動して見せよ！》

無理だああああ！見れねえし題名から見ても感動できなさそうだし！

《なんだよ！そんなの見てみないとわからないだろ！あのおじいさんの名言なんて泣けたぞ！“おばラツシュ、俺はもう疲れたぞい”って台詞最高だかな！映画監督俺だぞ！ノーベル賞とれるからな！》

無理だああああ！絶対無理だああああ！ノーベル賞！？ふざけるな！お蔵入りより追放されるぞ！絶対！ゴミ箱行きだぞ！しかも何！？おばラツシユって、どうきいたってあの名言元にして作ってるよね！しかもどうという状況で死にかけてるんだよ！

《お漏らししたさいのショックです。》

いやいやいやいやいやいや！駄目だろ！おじいさん弱っ！ってか、死因がおねしよのショック死！？

《あともうひとつあるぞ！感動台詞その2！おじいさんが天国行く前にいった台詞、“わ、俺の夢は世界をおねしよで埋め尽くすことじゃった…じゃが、俺は天国からでも雨に紛らせておねしよをするからな…”だ！どうだ！ちよつとかっこいいだろ！》

いやいやいやいや！やっちゃいかん！なんだそれ！？どんだけ迷惑な野望なんだよ！てか、おねしよの野望は天国行っても潰えないのかよ！お前の作品、感動どころじゃねえぞ！

月「…スウスウ…」

ありゃ、立っただまま眠っちゃったよ…

聖「…なあ、俺が月を運ぶからさ、月の部屋に案内してくれない？」

??「…わかったわ…」

まだ眼鏡の子は目が充血してる。あ、そうだ。

聖「そういえば、まだ自己紹介してなかったな。俺は董雷。月の兄で、真名は聖だ。知ってると思うけど、受け取ってくれ。月を支えてくれたお礼だ。」

??「…賈馱よ。あとで改まって自己紹介するから。」

そして、玉座の間から離れ、賈馱の後についてくる。

ボタン

扉をあけた。

抱いていた月をベッド？におろした。

てか、ベッド？あるんだ…

さすがに現代までフワフワじゃないけどな。

月「……………」聖「よし、そろそろ行こう。」

賈「あら？もう少ししないの？せつかくの再会だっていつのこ…」

聖「あとで話すからいいじゃん。さ、行こう。」

意外と妹扱い酷いかな…いや、これは今寝てるし、起こさないようにする気遣いのつもりだが…

賈「さあ、改めて自己紹介をしましょう。ちょうど陳宮も来たようだしね。」

聖「じゃあ改めて。ここで知らないやつは一人しかいないと思うが、俺は董雷、字は起山、真名は聖だ。一応士官という形にしようと。」

遼「じゃ、つぎはうちや。うちは張遼、真名を霞っちゅうねん。よろしゅうな。」

華「…私は華雄と申します。字と真名は……………」

ズンと落ち込む華雄…わかったよ、ないんだね。

賈「ボクは賈馱よ。そして、真名は詠よ。」

恋「……呂布、真名は恋。」

季「ボクは許緒！真名は季衣だよ！」

流「私は典韋と申し、真名は流琉と申します。」

そして最後に恋に引っ付いてる奴。小さく、髪がエメラルドグリーンの少女。

??「ねねは陳宮で、真名を音々音というのです。ねねと呼ぶので

す。」

さて、ひととおり自己紹介終了したみたいだな。

詠「早速だけど、貴方達、試験をするわよ。」

…やっぱ？

聖「…俺らは一応武官かな。おっと、この二人は俺が親衛隊みたいな感じでやつとくから試験は必要ないよ。」

詠「わかったわ。じゃあ貴方は武官希望なのね？」

聖「おう！」

詠「じゃあ誰かと模擬戦して決めましょう。」

はい！そこでて上がったのが…

雄「董雷様！私とお手合わせ願います！」

やっぱ？

霞「ちよい待ち華雄！うちが先や！」

雄「いや！私が先だ！」

うわ〜面倒な事になっちゃったよ…

季「兄ちゃんは強いんだよ！きつと二人まとめて相手しても勝っちゃつかもよー！」

季衣！余計なことを！

雄「その話、本当か？」

季「本当だよ！兄ちゃんは【奏でる鬼神】って呼ばれてるもん！」

雄「な！？それではあの【奏でる鬼神】というのは董雷様の事だったのか！？」

あつちやく

恋「……恋がやる。」

聖「……ふえ？」

いやいやまずい！

詠「じゃあ決まりね。」

ふえ！？あつけなく決めるなよ！

霞「あつちやく恋にとられてもった……けど見ものやな。」

はあく……決まっちゃった……



はい 今僕は鍛練場にいます

なんか皆集まつちやっただよ…月もいるし…

月「聖兄様！頑張ってください！」

うほ！なんか応援されちゃってるよ…

聖「任せる！俺はだてに修行してきちゃいないからな！（ニカッ）」

月「へう〜〜〜〜！／／／」

詠「な！？／／／（なに！？あの無邪気な笑顔は…）」

季「頑張れ〜」

流「っ！／／／」

霞「！！／／／（なんやねん！あの無邪気な笑顔！／／／ある意味  
反則や！／／／）」

雄「な！な！？／／／（さ、流石董卓様の兄上だ…董卓様の、いや、  
それ以上の魅力を感じる／／／）」

恋「！！！！／／／」

音「な！？／＼／＼（なんなのですかあれは！あの無邪気な笑顔：／＼！／＼！なんて思い出しただけで顔が熱くなるのですか！？）」

《は〜い 全員陥落》

なにいつてるんだお前は…

《お前は本当に恋に関しては鈍感だな》

だから恋ってなに？

《いづれかわかるんじゃない？》

なんだよその対応…

つとーちなみに俺は今黒龍のみを装備！だつて一騎討ちってさ、なんか一本って感覚があるじゃん。

それはさておき、俺は黒龍を構える。

聖「…行くぞ！」

先に飛び出したのは俺の方だ。

恋「！？」

ふ、あまりの速さに驚いてるのかな？俺は獲物を降り下ろす。

ガキイイイン！

防がれた。そのあと勢いを利用して素早く、力強く獲物を振るう。しかし

ガキイイイン！ガキイイイン！

全ていいあたりしながら全て防がれる。

いったん距離をおいた。

聖「まさか俺の攻撃を防ぐとは…」

恋「次、恋の番。」

今度は恋からきた。

ガキイイイン！

重い…そして早い…

ガン！ガン！ガン！

突き、払い、突き……多彩な攻撃を仕掛けてくる。だが、防げないことでもない。

恋がいったん下がる。

詠「…驚いたわ…まさかあの恋と打ち合えるなんて…」

月「流石聖兄様です！」

月が興奮してる…初めて見るな。

恋「……聖、本気を出してない……」

あ、ばれた？だって…いいのかな…卑怯になるかな…ならないよね

霞「あれだけ打ち合えてまだ本気じゃないのかい!？」

雄「流石聖様です!!」

霞「あんた話し方変わってない？」

ちよつといじめていいかな？

聖「なあ、いいんだな？」

恋「…?」

聖「…ま、いいか。来い…上には上がいることを教えてやる」

やべ！っかけ！この台詞いつてみたかったんだよ！

恋「…（コクリ）」

恋がまた獲物を構えてきた。さて、ちよつといじめるか。

獲物を恋が振るう。

聖「（『テレポ』）」

だが、当たる寸前でテレポで移動する。

聖「どこを見ている？」

俺は恋の後ろに立ち、そう言った。

〈恋side〉

今、聖と戦っている。

けど、戦ってなにかを感じる。本気は出したくない…自分でその力を封じ込めてるような感じ。

私は聖は本気を出していないと言った。彼は…聖は…聖はいなかった。一瞬、くる。

今の自分の全開の力で振るう。けど、彼は…聖はいなかった。一瞬、彼の気も消えた気がした。次の瞬間、

聖「何処を見ている？」

恋「!？」

ビックリして、武器を後ろに振るう。しかし、また消えた。

聖「ほらほら、こっちだぞ！」

恋「!？」

何回も繰り返した。けど、振っては消え、その連続だった。疲れてきた。

聖「あれ？もうおしまいか？んじゃ、終わりだ。」

また消えた…そして首に冷たいものが当たる。聖の武器だった。

聖「これで俺の勝ちかな？」

なんか色々不思議な戦いだった。

～恋end～

ふ～…終わった…

けど、罪悪感はあるかな？全てテレポでかわして疲れさせ、最後に決着をつける。

詠「…驚いたわ…まさか恋を倒すなんて…」

聖「んじゃ、武官でお願いね～」

詠「わ、分かったわ。」

月「お疲れ様です。聖兄様。」

季「兄ちゃんやっぱり強いね！」

流「兄様、流石です！」

月「……聖兄様？そのお二人とはどのようなご関係ですか？」

こ、こえええええ！キャラなおつてなかったの！？黒！すげえ黒！

聖「そう呼びたいからそう呼ばせてるだけだよ。」

月「へ？そうなんですか？」

聖「ああ。」

季「え〜〜！？！いつそのこと義理でもいいから兄と妹関係にしようよ。」

月「……………」

うは！？くる！

聖「なあ、月…父さんと母さんはどうしたの？」

月「父様と母様ですか？」

よし！話をすりかえた！

月「……………父様と母様は…病にて…亡くなりました…」

…え？

聖「……………それ本当？」

月「……………（コクリ）」

うわ、泣きそうだよ…俺もだけど…

ギョッ！

月「…へ？」

俺は月を抱きしめた。

聖「…ということとは、今まで一人で頑張ってきたということだよ  
ね…ごめんね…けど、もう一人じゃないよ…俺も月を支えてあげる  
から…一緒に頑張ろう。」

月「……………はい。」

聖「……………それと改まって……………ただいま、月。」

月「……………お帰りなさいませ、聖兄様。」

季「……………」

流「……………」

再び感動中

霞「おう！感動のところ悪いな！それより詠、今日は聖の歓迎会と  
して飲まへんか？」

詠「はあ…仕方ないわね…」



霞「ホンマか！？よっしゃ〜！今日は飲むで〜！」

聖「なあ、あれはいつもあれなのか？」

詠「ええ…ほんと困ったものよね。」

月「けど、詠ちゃんいつもより優しいね。もしかして、私達の気遣い？」

詠「な！？／／／そんなことあるわけないじゃない！」

聖「はは。詠は優しいな。有り難う（ニカッ）」

詠「！！／／／」

月「へう／／／」

季「う！／／／」

流「！！／／／」

ん？なんだ？ま、いいか。

聖「とにかく、準備しないか？」

詠「え、ええ。」

流「あの。私は、料理を手伝います。」

聖「そうか。お〜い！恋！華雄！」

恋「……?」

雄「は、ここに。」

聖「よし、俺らは宴の舞台の準備をしよう。」

季「わかったよ。」

恋「……（コクン）」

雄「承知しました。」

月「私は、料理の方を手伝います。」

聖「そうか。んじゃ、二人とも！頼んだぞ！」

月・流「わかりました。」

よし、準備にとりかかるか。

《よし、俺もあの例の映画の第二でもつくるか。こんどは、魚屋の  
リトマス紙でいこう!》

いや、いくな…

はい、宴の真っ最中

季「はぐはぐはぐ…ゴクン！」

恋「はむはむはむ…」

季衣と恋は食い比べをしてる。

霞「おい〜！まだ酒が足りないで〜！」

雄「そつだぞ〜！もっと持ってこい！」

詠「（ 一一一 ）」

二人は暴走して、それを詠が可哀想な目で見てる…

音「料理追加なのです〜！」

月「分かりました。流琉ちゃん、こっちをお願い。」

流「はい、月ちゃん。」

あの二人は料理しながら仲良くなってる。良かった…お互いちゃん付けで呼んでるし、心配いらないな。

さて、俺は…どうしよう…そつだな、一刀からもらった楽譜でも見



《うっは~~~~ 俺っえ！やべ！また完成させちまったよ！》

……また変な映画か？

《違う！映画ではない！俺は本を書いたんだ！》

……どんな本？

《お前に北郷一刀とかいたでしょ？そいつの取り扱い説明書。》

………神様、Niceだぜ！

ちなみに内容は？

《ああ、まず最初は、北郷一刀は変態な主にしかつかえません。》

…… やべｗｗｗｗそれを華琳のところに持ってっいたらｗｗ

《最高だぜ！》

次は？

《え〜と…実は一刀は受け身だったりする。けどやりすぎには注意を。種馬になります。》

やべｗｗｗｗ最高ｗｗ

《この続きは送るからお前が読め。》

マジで！？ヘッヘッへ…俺を追いかけたり脅したりしたひそかなる

恨みを返す時がきた。

ふゝ…俺は宴の席を外してリコーダーの手入れをしている。

月「どうしたのですか？ 聖兄様がいないと宴になりませんよ？」

聖「ああ、月か…」

…一応きいてみるか。

聖「なあ、俺たちの本当の関係って知ってるか？」

月「……はい。」

聖「てことは、俺が義兄ってことも？」

月「はい、知ってます。」

なんだ、知ってたのか。

月「けれど、私は例え義理でも聖兄様は聖兄様ですから。」

聖「……………／＼／」

やべ、あの笑顔に見惚れちゃった。なんて綺麗な笑顔をするんだろ  
う。

聖「有り難う、月。（ニカッ）」

月「へう／＼／」

お返しに笑顔を返してやった。月も俺とおんなじ感覚なのかな…

聖「よし、なんか一曲歌ってやるよ。」

俺は立ち上がり、歌う体制をとる。ま、合唱曲でもいいか。ここじ  
や知らないけど、あっちじゃスゲー歌うから歌ってみるか。

聖「……………」

白い光のなかに

山なみは萌えて

張るかな空の果てまでも

君は飛び立つ

限りなく青い

……………

《みんな知ってるっしょ？この曲。てかさ、聖なにやってんの？す  
げえあってないんだけど…ま、とりあえず割愛！》

……………

大空に

「

聖「ふう、どうだった？」

月「…いい歌でした。夢を信じて旅立つ人が見えました。」

詠「まったく、いないと思ったたらこんなところにいたのね。」

え！？

後ろを振り向いたら皆いた。

恋「……………いい歌。」

音「なかなかいい歌だったのですぞ。」

雄「流石です…聖様。」

霞「いや、いい歌やな。酒と結構あつやもな。」

季「兄ちゃん凄い！こんな歌も歌えるなんて！ついてきて良かったよ！また歌ってね。」

流「すごく綺麗でしたよ、兄様。」

あれ？悪感がない…月の真っ黒オーラがない…どうやら許したのかな…

聖「…俺は、ここに誓うぞ。俺は、妹、月の剣となり盾となり支えていくことを…ここに誓う。」



月「…はい。これからも、宜しく願いします、聖兄様。」

こうして董卓の元に来た聖。これからおこる戦争に、聖は妹月をどう支えるのか。

おまけ

俺は自室に入り、神と会話していた。

《てな感じだ。》

ウハハハハハハハ！そうか！最高だ！

《フフフ…それじゃあ北郷取り扱い説明書を送るから。》

ポトツ！

ふふふ…これが、

ばさ…ペラペラ…ニヤリ

ふふふ、これでやつらもおしまいだ！ハツハツハ！

一刀！華琳！待ってる！貴様らを激怒のうずに巻き込んでやる！



第十五話 再会、試験、誓い（後書き）

(TOT) (TOT) (TOT) (TOT) (TOT) (TOT)  
(TOT) (TOT) (TOT) (TOT) (TOT) (TOT)  
(TOT) (TOT) (TOT)

なんで訂正の回数がこんなに多いんだろう…

第十六話 黄巾の乱（前書き）

訂正しました。

## 第十六話 黄巾の乱

ガキンツッ！ガキンツッ！

聖「大振りしすぎだ！少しは冷静に戦え！」

雄「はい！聖様！」

俺は宴の次の日、何故か華雄に訓練を頼まれた。あんな飲んだのによく二日酔いしないよな…

ガキンツッ！！

雄「！！？」

あ、ちなみに俺は破神で戦ってるぜ！

そして、力任せで振った武器を俺が簡単に弾き、華雄の武器をとばす。

カランカラン

華雄の武器がおちる。

聖「……なあ華雄、君って戦のときに大切なものってなんだか知ってる？」

雄「はい？はて…それは武功ではないのですか？」

聖「そうか…」

俺は破神をさやにおさめた。

聖「なあ、もしもの話だが、俺がいくつか質問をする。それに君は正直に答えてね。」

雄「はい。」

《お前こんなしぶい場面できんの？》

うっせ！

聖「じゃあいくよ。とある戦で君は挑発させられた。うっん…内容はこんな感じだ。貴様の武はなんのためにある、貴様は飾りとして武器を持っているのか。臆病者つてな感じで自分の武を汚されたよ。うなことを言われたら君はどうする？」

雄「それは、流石に武を汚されては黙っていられないでしょう。」

…猪だ…

聖「…じゃあそれで突っ込んで、それは敵の策で味方全員全滅の状態になり、敵に囲まれて絶体絶命の状態になった。君はどうする？」

雄「私は死を選びます。死んだとしても名が残るのなら悔いはありません。」

……猪だ…素晴らしい……

聖「それで君は死んだ。だけど、残された月や俺、霞や詠はどうなるの？」

雄「それは貴方様みたいな武人がいるので心配いらなんでしょう。」

…悲しくなってくる

聖「…月はそんなに酷い人間か？まず死んだらみんな悲しむぞ。それで本当に悔いはないの？」

雄「あ…」

気付いたのかな…

聖「いいか、戦場で大切なことは冷静さと、死なないことだ。」

雄「……ですが、それでは武功は…」

聖「死んだら武功もなにも無くなるだろ。」

雄「……………」

黙りこんじゃったよ…

聖「いいか？君には死んで悲しんでくれる人がいるんだぞ。俺だつてな。」

ナデナデ

雄「あ／／／」

華雄の頭を撫でる。

聖「いいか？一番やつちやいけないことは死ぬことだ。武とは、守るためと、死なないためにある。突っ込んでみてもそれは勇敢とは言えない。わかった？」

雄「……はい。／＼／」

よし、これで大丈夫かな？

俺は撫でてる手を離す。

雄「あ……」

聖「んじゃ、今日の訓練はおしまいだ。」

そうして俺はこの場を去った。

自室にいるこの俺 べし思ひつゝ。

《迷惑ッス》



いやのるなよ…

いや〜しかし暇暇暇暇暇暇…

暇暇暇暇暇暇！！

《そんな君には僕の作った平和のための本を送ろう！》

いや、あとでいい。

《そんなことだから同性愛がふえるのだよ！》

ピクンッ！

なん…だと？

《嘘》

そうか…

《いや酷！せつかく○リキュアのキーホルダーあげようと思ったのに…》

オタクめ…

《んだと！？誰がオタクだと！？今日という今日は許さんからな！》

上等…

《じゃあ何かける？》

じゃあ金かける…っと、奴のテンションにのるところだった…

《…ツチ！んじゃあれでいくか…今回の俺が作ったすんばらしい映画作品を…》

もうお馴染みになっちゃうんじゃね？

《“近所のおじいさんの食べ残し”だ！》

…なんでおじいさんをこだわるんだよ…

《いいじゃん！泣けるぜ！あの名言！“く、今日も食べ残してしまっただぜ…”》

あ、普通だ。よかった…

《馬糞を！！》だぜ！やべ！かけ〜 映画監督俺だぜ 》

ちよい待て〜い！おじいさん何食べてんの！？馬糞！？馬糞食べ残したって、食べたの！？

《ふ、死ぬ前の名言なんて最高だぜ…“馬糞はグ〇コに限る…”とな！》

うええ！？ちよつと待て待て待て待て待て！なんだよ！馬糞は〇コに限る！？ちよつとまでや！なんだよそれ！グリ〇なに売っちゃってんの！？あり得ねえ！混沌だ！神だ！

バタン

いきなり扉があいた。誰かと思うと…

流「兄様、臨時会議を行うそうなので来てください。」

流琉か…

聖「わかった、行くよ。」

詠「……皆揃ったみたいね。」

聖「それで、どうしたの？」

単刀直入に問いかけた。

詠「いきなりね…何進が私たちに賊討伐を依頼してきたのよ。というより、強制参加だけどね。今回は大きな戦よ。」

賊討伐か…もしかして黄色いやつかな…あ、これは黄巾の乱か…てことは！？各諸侯もいるんだよな…

ニヤリ

聖「詠、この戦、俺は参加するぜ。」

詠「な！？あんた身分的に「俺は一応武官だぜ。」…けど、月の側にいてやらないの!？」

月「平気だよ、詠ちゃん。聖兄様は約束したもん。私を支えてくれるって…だから、この戦で戦死なんてないよね？聖兄様？」

うわ…意外とこええ…

聖「ああ、平気さ。俺がいった方が早く終わるし、それと【奏でる鬼神】は妖術だって使えちゃう。」

詠「はあ……わかったわよ……じゃあ決まりね。」

聖「詠、なんだかんだで心配してくれてるんだ。」

詠「そうよ、心配でし……てなに言わせんのよ!／＼／」

霞「んなことより、早く決めんでええのか？」

詠「そ、そうね…／＼／（落ち着け私…落ち着け私…）それじゃあ、軍師にねね、それから武将を恋、聖、それから霞に決まりね。それと、この隊の隊長は恋、貴女ね。」

恋「……（コクリ）」

季「え〜〜!？ボクも兄ちゃんと一緒に戦いたかったな〜…」

聖「季衣、今回は我慢してくれよ。」

季「……………はい。」

おい、すつごく間があいてなかったか？今のは何？物凄く判断に困った感じ？

月「聖兄様、気お付けて。」

流「兄様、頑張ってきてください。」

やべ、いい子や…

聖「任せる 戦場で奏でてくるよ (ニカッ) 」

聖以外「!!!」

《お前も罪作りだな。》

ん？俺はまだ犯罪してないぞ。殺人以外…

《あんたねえ、殺人は認めるんだ…てか、そういう意味じゃないんだけど…》

いや、だからなに？

《そのうち気付くさ》

いや、質問に答えるよ…

聖「あ、それと華雄、しつこいようだけど、さっき言ったことよく考えとけよ。」

雄「……………はい。」

聖「よし んじゃ、兵力は五千でよくな？」

詠「は？あなた…相手の兵力聞いてるの？」

俺の答えは当然…

聖「聞いてないよ。けどいけんじゃね？兵力が少なければ小回りがきくし、それと恋と俺にそれから霞。それと策ならねねがいるからいけるじゃん。」

霞「へ〜？聖はまだ戦ったことないうちの力がわかるっちゆうんか？」

聖「まあそれなりに？」

霞「なぜ疑問やねん…」

聖「それより、いつ出発するの？」

詠「今からよ。」

聖「…本当？」

詠「本当よ。」

はあ〜…なんてことしてくれちゃってんだよ何進…

聖「んじゃ準備は？」

詠「できてるわよ。」

はえ〜…

聖「んじゃ、行くか！」

俺は白紀にまたがり、目的地へ…って、到着してるんだけどね

使者「それでは、所属先と兵力をお願いします。」

聖「俺が対応するよ。」

恋「…（コクン）」

聖「俺らは董卓軍所属で、呂布が率いている。兵力は五千だ。」

使者「五千ですか！？いや、失礼…他の諸公も来てるのですが…五千では劉備軍の次に少ないではないですか。」

聖「だって、こっちは頼りになる恋…もとい呂布や奇才？の軍師、陳宮と、あとツツコミの神…神速の張遼がいるんだぜ？それと兵士たちだって強く頼れるし…ん？」

聖と使者以外「（ジーン…）」

ん？なんだこの感動っぽい雰囲気は…

恋「……………聖、恋がんばる。」

音「あ、有り難うなのです…（グスッ！）ここまで評価してくださいるのは恋殿と聖殿だけなのです…」

霞「……………こんなに評価されてはがんばるいがないやないか…」

董卓軍兵「……………流石月様の兄様だ…これほどまで魅力を感じるとは…」

聖「え？あの、その…」

霞「うっしゃ！こりゃがんばるしかないな！この戦、勝つで！」

恋「……………（コクン…）」

音と董卓軍兵士達「応！（なのです…）」

聖「……………あのさ、今日戦ない？」

使者「はい、今日は戦はなく、休めとのことですよ…」



聖「これ、戦より処理が大変かも…で、後のことは？」

使者「はい、命令を待てとのことですよ…」

聖「わかった…下がっていいぞ。」

使者「は、では…」

使者が一礼して下がる…やべ、礼儀正しい…そして…

霞「うちの底力、見せてやるうや！」

聖以外「オオオー！」

聖「あのな…まだ戦は始まらないんだぞ…」

霞「いや、すまんすまん。」

聖「まったく、士気が上がることは別に構わない。けど、それは戦場でたのむぞ…」

はあく結構かかったよ…だってさ、今夕方だぜ？あれがずっと続いてたんだぜ？

聖「あ、そうだ。俺はここでは起山って名乗ってるから、皆それに合わせてくれよ。それが真名で呼べ。」

音「わかったのです。」

恋「…（コクリ）」

霞「了解や。」

兵士「すいません、面会を求めている人がいるのですが…」

聖「わかった。通していいよ。」

面会か…

するとなんか武力オーラを放っている二人の女性が入ってきた。一人はピンクの髪で、一人は白髪？

??「む？いま失礼なこと考えておったか？」

聖「いえ、違います。」

??「ふむ、ならよい。」

ふ〜…あぶねえ…あいつ心をよみやがった…

??「まずは自己紹介ね。私は孫策。こっちにいるのが…」

??「自分で自己紹介ぐらいできますぞ、策殿。儂は黄蓋じゃ。」

聖「ところで、どうしたんだ？ここになんか用か？」

策「なんか用かって…あんな大声出してて気にならないわけがないでしょ？」

聖「あゝあれね…」

ジロツ！

俺は霞を睨んだ。

霞「う！？あれは悪かったっていつとるやないか！」

聖「ふふ、冗談だ。ま、こんな感じだ。察してくれ。」

策「え、ええ…わかったわ。」

聖「んじゃ！これから宜しく(ニカッ)」

策「！！／／／(な、なに今の無邪気な笑顔…／／／)そ、それじゃあね。いくわよ、祭。」

黄「あ、ああ。／／／(なんじゃあの笑顔…)」

??「なんで顔が赤かったんだ？」

《皆さん！この人は鈍感ではありません！！重要なのでもう一度言

います！鈍感ではありません！本当です！前にもいった通り、恋を知らないだけです！彼は今まで恋という感情をけいけんしたことがないだけです！》

…誰に話してんだよ…

夜、夕飯を済ませた俺は外でリコーダーを吹いていた。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

うん、なかなか綺麗に吹けている。

??「綺麗な音色ですね。」

俺は誰かに話しかけられた。そこにはピンクの髪をした、いかにも学生？な雰囲気を出している女の子だった。

）???)side)

私の名前は劉備、字は玄德、真名は桃香。いま陣の中で、明日の戦のことを話してる。

朱「……………という手はずで、桃香様、聞いてますか？」

桃「へ？あ、いや、ごめんごめん。」

愛「まったく、桃香様、ちゃんと話は聞いてないと駄目ですよ。」

鈴「にやははは 姉者が怒られたのだ」

愛「こら鈴々、お前はさっきまで寝ていたではないか。」

雛「あわわ……」

陣でやっていることはいつも通り、こつこつ秀囲気で行ってる。はあ、こつこつというのが普通に町でできるように頑張らなくちゃ。するど、

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

どこかから音が聞こえた。

…綺麗…その一言しか出てこない、不思議な音色だった。

すると、

ガタン！

私以外全員凄い反応した。

鈴「愛紗、この音は……」

愛「…間違いない…この音色は…」

朱「はわわ…雛里ちゃん、これって…」

雛「あわわ…朱里ちゃん…これは…」

桃香以外「聖（殿！）（さん！）（お兄ちゃんなのだ！）」

桃「うわ！？どうしたの？」

なんか私だけ仲間はずれみたい…

愛「桃香様、この音色の元は今噂の【奏でる鬼神】という者の物でしょう。」

桃「え！？あの【奏でる鬼神】さん！？」

噂だけなら聞いたことがあるけど…確か武も強く、背中には重そうな武器を背負い、けど実際戦っている武器は笛で、妖術を操って戦う人。

鈴「実際は優しいお兄ちゃんなのだ！」

朱「鈴々ちゃん達もあっているようですね。」

雛「あわわ…」

は…一度あってみたいな…会いにいつちやおう。

桃「ちよっとその【奏でる鬼神】さんに会いに行ってくるね。」

私は外に出て、音色の元へ向かった。

愛「ちよっ！桃香様！私たちも行きます！」

鈴「羨ましいのだ〜！鈴々も会いに行くのだ！」

朱「はわわ！？行こう！雛里ちゃん！」

雛「あわわ…」

そこにいたのは月明かりに照らされながら笛を吹いている男の人だった。なんか…笛を吹いている顔…なんていうか…かっこいい／＼いやいやいや！落ち着いて…話してみよう。

桃「綺麗な音色ですね。」

男の人はこっちに振り向いた。

〜桃香end〜

俺は女の子に話しかけられた。なんだ、いきなり…

聖「あの、誰？」

一応聞いてみた。

??「あ！ごめんなさい。私の名前は劉備、字は玄德っていうんだよ。」

劉備…あくなるほど、劉備ね。流石に驚かねえぞ。呂布が女だった女だったんだから。

聖「俺は起山っていうんだ！宜しく（ニカッ）」

劉「！！／／よ、宜しくね。」

《ふ、罪作りめ、何人おとしたと思ってるんだよ…》

だからなんのことだよ。

《そのうちわかるさ》

いつもその対応だな。

あ、後ろから四人ほどの人影が…げ！？ひとり突進してきたよ！？

鈴「お兄ちゃん…ん」

げ！？鈴々！？



ドコッ！

聖「グボツ！？」

腹部に直撃

聖「…我が生涯にいつぺんの悔いなし！」

愛「聖殿！？大丈夫ですか！？」

朱「はわわ〜！？逝っちゃ駄目ですよ！」

雛「あわわ〜！？」

聖「…つたく…危なかったぞ…あのオタクのところに逝くところだ…  
たじゃねえか…」

鈴「うう…意味はわからないけどごめんなのだ…」

まったく、本当に逝っちゃったら地獄よりも辛いことがありそうだからな…

《ヘイカモン！boy！一緒にプリキュ○で楽しもうぜ》

…危ない…あれは地獄のなかの地獄だ…

《なにいつてんでい！今回だって新しい映画を作ったんだぞ！ノーベル賞獲得目指してんだぞ！》

絶対無理だああ！てかどんだけ作品を作れば気がすむんだよ！

劉「ねえ、皆この人と知り合い？」

俺が代わりに答える。

聖「そうだけ 真名を交換した程だけ」

劉「へえ…お兄さんって、本当にあの【奏でる鬼神】なの？」

聖「証拠見せて欲しいか？よし、ひとつ芸を見せようか。」

俺はリコーダーを構える。魔力を集中させて、エアログライド（上昇可能なグライド）で浮く。

劉「ほえ…」

愛「相変わらず凄いですね…」

鈴「お兄ちゃんは凄いのだ」

朱「あわわわ…」

雛「はわわわ…」

うむ！劉備、いいおどろきっぷりだ！朱里、雛里、君達…台詞が逆だぞ…

さて、吹くか。

聖「いくぜ、曲名、亡き王女の為のセプテット…」

俺はリコーダーでかなでながら魔法を放つ。

ファイアでサビの部分表現させたり、《割愛！》畜生！

聖「ふ〜…どうだった？」

劉「（ポ〜）……//」

愛「（ポケ〜）……//」

朱「はわわ…//」

雛「あわわ…//」

鈴「お兄ちゃん、凄いのだー…／／／」

ううー!?なにこの反応!?

《ふ、完璧におとしやがった…ま、一応良かったってことだ。》

なんだ、それ…

聖「…駄目だった?」

劉「な!?!?!/!/!/違つよ違つよ!むしろかつこ良かったよ!／／／」

愛「そ／／/そうですよ!／／／」

鈴「お兄ちゃんかつこ良かったのだ!」

朱「はわ!?!?!/!/!/う!?!?鼻血が出そうです…(」

雛「あわ!?!?!/!/!/う!?!?は、鼻血が…(」

聖「そうか…有り難う (ニカツ (」

いつもよりいい笑顔で対応しました。

劉「ぼぶあ!?!?!/!/!/は、鼻血…が…(」

愛「ぶはあ!?!?!/!/!/ぐ!?!これは反則です…鼻血が…(」

鈴「ぼびいぶあん!?!?!/!/!/お兄ちゃん…色々と凄いのだ…(」

朱「はぶあー!!」

ドサツ!

雛「あぶあー!!」

ドサツ!

…とりあえず、笑顔で反応してるのがわかった…みんな鼻血でした…

聖「んじゃ、俺は行くぜ!」

劉「ま、待ってください!」

聖「ん?」

劉「私の真名は桃香と言います。受け取ってください。」

聖「俺は聖だ。んじゃ、またな。」

桃「はい」

俺はこの場を去り、自分の陣へ戻った。

《あ〜りやりや…フラグたっちゃったね…これからどんなストーリーになるんだろうね。次回をお楽しみに。》

またとられた〜(TOT)

第十六話 黄巾の乱（後書き）

はい、訂正しすぎですね。

第十七話 張三姉妹（前書き）

遅くなりました！疲れのせいとちょっとネタのせいでだんだん雑になっちゃった…

第十七話 張三姉妹

チュンチュン

朝日がさしこんだ…さしこんでないけど…俺は目が覚めた。

俺は布団から起き上がり、腕を伸ばす。

チュンチュン

うん、鳥の鳴き声が聞こえる…

《チュンチュン！ポケポツポ！バゲボツポ！》

うん、鳥の鳴き声が…

《サラダバー！》

うん…鳥の鳴き声が…

《iiiiiiiiやっほおおおおううううう！》

……

《ヒ~~~~ハ~~~~！》

おいちょっと待てゴラァ！爽やか俺モードを表現してたのに…台無しにするなや！



《よせや 似合わねえよ》

畜生！テメエ！

《かゆ うま》

……………（^ー^＃）

くそ、冷静になれ、俺…気分転換に外で鍛練するか。

《化け物君 今日も頑張れ》

……………＃＃＃

ブン！      ブン！

俺は久々に獄神で素振りをしている。

やっぱりこっちの方が扱いやすいな。

恋「……………聖？」

聖「あ、恋？どした？」

ブン！　ブン！

いつまでも素振りをしている俺…

恋「…なに？それ…使ったところ、見たことない。」

まあ確かに滅多に使わないな。これは本気で許せないときや武器がその場に無いとき、あとは…気分？

《それじゃあ主人公設定の意味が無いだろう…》

何言ってるんだ…

聖「あ、これは獄神っていう名前なんだ。これは本当に許せない相手のときにしか使わないようにしてるんだ。今は気分的にこいつを出して鍛練してるんだけどな。」

恋「……………」。

うわ…まじまじ見られてるよ…武器をだけど…

恋「……………不思議…強い力、感じる。」

お！恋にはこの力がわかるんだな！

聖「だからこの力を出さないためにあまり使わないんだよ。」

今使ってるけどね

恋「……………?」

聖「つまりはあまり使わないってこと。」

最初にきかれた質問からかなり離れてるけど、これで大丈夫だろう。

恋「……………（コクン）」

…納得しちゃったよ…

使者「あの〜…」

あ、いたんだ…気付かなかったよ。

使者「何進將軍から討伐命令がきました。」

へ〜…

聖「で、何処へいけばいいんだ?」

使者「張三姉妹の本拠地がわかったそうなので、そこを攻めてもらいたいのですが…」

あ〜…なるほど、他の諸公は困的な感じでやるからいつちよ叩いてこいつてか?

使者「曹操軍、劉備軍、孫策軍と共に行動し、本拠地を叩けだそうです。」

……は？

ちよつと待て！なんで強い軍を的本拠地に全員送るの？馬鹿なの？  
馬鹿なの？どんだけ叩きたいの？

使者「ちなみに拒否権は認めないとのことですよ。」

聖「………はいはい。んじゃ、戻っていいよ……」

使者「では……」

まったく、なんなんだよあいつ……何進やりたい放題だな、おい……

聖「さうで、いつちよ準備でもすつかない恋！戻るか！」

恋「……（コクリ）」

恋が後ろを向いたときに俺は獄神を消滅させた。さて、ひと暴れするか……それと、あの本をあいつに届けるためにもな……

俺は皆に知らせてから目的地へ移動中。

聖「なあ霞、何進っていつもああなのか？」

俺は聞いてみた。

霞「いつもあんなや…それとあいつの言った情報は全てあてにならんしな。」

聖「……………」

言葉もでねえ…

《は〜い みんな〜 神様のパーフェクトオタク教室 始まるよ〜  
俺みたいなおタクキー目指して頑張っついてね〜》

でたああああ！

《んだよ！その驚き方は！》

いやだつて…てか、なんであんな毎回毎回出てくるわけ！？

《いや、神だから。》

意味わからん…

《化け物君 今日ほどんな化け物っぷりを見せてくれるのかな？楽しんでだな〜》

うぜー！

《いやはや！最近映画作りにはまってね…なんかいつそのこと18禁の映画もとろつと思う！》

いや、18禁で映画は無いからね…てか、それを映画で公開するのはどうかと思うよ…

《内容は……》

いや説明するなよ…一応これ読んでも人にちよつとした被害が加わるだろ…

《まずはシヨンベンしているところ》

いつちゃったよ…

《おじいさんがね》

待てええええい！待て！それはない！確かにそれはやっちゃいかん！ある意味18禁だ！

《そして、おじいさんは宝物のリトマス紙を川に落としたり、息子に八つ当たりしたらボコボコにされた。》

いやいやいや！宝物がリトマス紙って…

《それで修行のためこの年にもなりながらも炎のように熱くなり、トレーニングを開始した。》

あ、いいことじゃん。おじいさん、偉い！

《自室で十分間だけ。》

まてええええい！自室で！？しかも十分間だけ！？

《それで息子に、“おい！ダメ息子！今日の儂は一味違つぞい！決闘じゃ！本気でこい！1割くらいで！”って言った。》

うわああああ！勝ち気だと思つたらびびりまくりじゃねえか！しかも1割って…

《それでおじいさんはついに…》

勝つだろう…1割だから。

《負けた。》

うえー？負けた！？じゃあ誰に勝てるの！？

《そのあと色々と試した。飼っていた猫に負けて、飼っていた金魚に負けて、最後はアリ一匹と戦つて善戦を繰り広げたが負けた。》

うつそおおお！？いや弱すぎだろ！猫に負けるのはまだぎりぎり分かるが、金魚に負けるのかよ！水槽からとりだしたら終わりな相手に！？しかもアリとの勝負で善戦！？しかも一匹だぞ！？踏み潰せば終わりだろ！それと善戦！？ついには負けたのかよ！！なんだよこのおじいさん！弱すぎだろ！てか、もう十八禁とか関係なくね！？

《（ー＋）》

いや、なんかウザイ…

おっと…目的地についたみたいだな。

みんないるよ…

華琳は春蘭と秋蘭、それから軍師に桂花。

孫策は黄蓋と、それからいかにもツンツン系ですよみたいに目をひきつけている子と、あと黒髪的眼鏡で、孫策の世話をしているような人がいる。

んで劉備軍は軍師に朱里と雛里、あと愛紗に鈴々。あ、そういえば俺の教えた出鱈目技の『豪風』だけ…うまく扱えるようになってるかね…

華「久し振りね、聖。」

華琳が近付いて俺にいつてくる。

ジャキ！

あれ？恋たちが武器を構えてる。

華「…なんのつもりかしら？」

確かに…

霞「おい自分、なに勝手に聖の真名を言ってんねん！」

恋「……。」



音「そうなのですぞ！聖殿の真名を勝手にいうところの恋殿が許さないのですぞ！」

ねね…人任せにしか聞こえないぞ…

華「私はもう真名を許されてるわ。それに…」

聖「ああ、それにもしも勝手に言われていたらまず俺が怒る筈だぞ。」

霞「た、確かにそやな…すまんかったな。」

皆が武器を下ろす。

そして孫策達と桃香達が来た。

策「やっときたわね、起山。」

桃「聖さん、遅かったよ。」

聖「おっと！桃香…じゃなくて劉備のところも真名を許したから。旅のときに世話になってるんだ、劉備以外。」

よし、さっきみたいにはならなかったな。

聖「んじゃ、軍義を始めるか。」

朱「……………という策で行きましようか。」

雛「あわわ……」

今朱里と雛里のなが〜い策戦発表が終わった。

あ、孫策側も自己紹介済ませたぞ。真名以外はな。眼鏡が周瑜で、つり目が甘寧って言うらしい。

聖「んで、とりあえず俺らはとにかく兵が引き上げてきたら突っ込め的な感じ?」

朱「はい。簡単にまとめればそうですね。」

策はこんな感じだ。まず劉備軍の愛紗がちよっかいをかけて挑発して、んでその後が……………やっべ〜!策全然聞いてなかった!とにかくその後孫策軍が火計をなんちゃらかんちゃらだった。んで皆でボカーンみたいな感じだ。

聖「んじゃ、配置につくとしますか。それでは後は宜しくね。さて、恋。配置につこうか。」

恋「……………(コクリ)」

さて、いっちょ暴れるか。

今戦場にいます！おっと！関羽こと愛紗が敵にちよつかいをかけている！おっと、こつちに引いてきた！孫策軍と曹操軍が…火計をしかけたー！賊が混乱している！さて、そこで我が軍の追い討ちじゃー！

恋「……ちんきゅー、お願い。」

音「了解なのです！ぜん「全軍突撃や！」…霞殿！ねねの台詞をとるなのです！」

ガオオー！つと吠え

音「ガオオー！！！」

…本当に吠えやがった…

ま、いいや。とにかく俺は破神と黒龍を構えて…白紀で全速前進！

聖「うおおおおりやあああ！」

破神と黒龍を振り回し、白紀で何故か単騎駆けになってしまった。てか、確実に敵の攻撃を許さずそして的確に敵を斬り裂いた。

ズザザザザザザ！

敵の首が次々とはねられていく。ま、俺が殺ってるんだけどね。

賊「グギヤアアア！」

賊「ば、化け物だー！」

賊「ロリコンが来たぞグバツ！」

賊「う、うわ！気持ち悪いグバツ！」

??「ぶるあ！き、気持ちいい…もつとしてねん」

……… d m w g w . , a d m j g w t . j j g . w p w m g , . . a j  
t p m w o p g m w o t p j w , g g m p d . w g . j m t o w p , .  
g w . j a m w , t o p g . d m w , m p t o m j a g ! ! なんだ  
今のわー！

やべ、自分でも訳のわからんことを…てか、お前ら本当に賊か！？

なんでロリコンという言葉を知っちゃってるの！？てか、なんで毎回戦闘に限ってひでえ言葉ばっか使うの！？

《変態》

…この怒りを賊に！

ザシユ！ ザク！

賊「グギャアアア！」

自分でもわかる…今の自分…怖い！

（孫策side）

な、なんて恐ろしいの…

彼、起山の戦いをみて思ったことだ。

起「うおおお！」

火計が成功して敵が混乱しているところを叩く…けど、彼を見ていと援護する必要がないと思えてしまう…

起「この【奏でる鬼神】は武器を持つと武神となる！さあ、この俺に対峙できるやつはいるかー！」

白馬にまたがりながら武器を振り回す姿…私が小霸王なら彼は絶対勝者よ…

けれども、その武器を振り回す姿が勇ましいだけでなく、なんか美しく見える…戦い方が美しく見える訳じゃない、ただ戦場に立つ姿が美しく見える…不思議な人ね。けど、彼は私たちの天下統一の道の壁となるわね…仲間にできたら話は別だけど…

〈孫策end〉

〈桃香side〉

昨夜、起山という人とあった。真名は聖とかいつていた。

自分の陣にいるときに聞こえた音色…そのもとは【奏でる鬼神】とかいうひとだった。けど、鬼神なんて呼ばれてるけど本人を見るとどこが鬼神なのって言っちゃうくらいだった。

愛「はあ〜〜！『豪風』！」

ブン！      ブォーン！

賊「うわ〜〜！？」

愛紗ちゃんが武器をふりおろすと凄い風ができて賊を吹き飛ばしてる。愛紗ちゃんは聖さんから学んだっていつてる。聖さんを見ると…

ザシユ！ザシユ！

聖「オラオラオラ！まだまだこんなもんじゃないぜ！」

…賊の沢山いるところに一人で突っ込んで戦ってる。なんか凄い…

今の聖さんを見てみると本当に鬼神みたいに武器を振るう。けど、なんか不思議。別に戦い方がきれいじゃないんだけど、なんか美しい…なんでかそう感じちゃう。

（桃香end）

聖「はっはっは！見ろ、人がゴミのようだ！ハッハッハ！」

今の俺は狂ってるぜ！近づくと火傷するよ

聖「怯め！『閃光』！」

はい、オリワザです。

閃光とは、ホーリーを打撃ではなくしたもの。はい、前方にいる相手を怯ますことができますんで、はい。

ピカッ！

賊「ぐわ〜〜！？なんだ！？」

賊「く！？なんだあの光は！？」

賊「孔明の罠か！？」

賊「あ〜〜！？目が、目がああああ！あああああああ！」

怯んだな、全速前進！けど、俺はツッコまんぞ！誰が孔明の罠か！？とかあのム○力大佐のネタを何故知っていると断じてツッコまんぞ！

聖「うおー！ー！」

ザシユ！ ザク！ 愚者！

まてえええい！ちょっと待て！なぜ音のリアクションが違つなの？も  
う一度…

愚者！

何故だあああああ！

んあ？やべWWW迷つたWWW

今森にいるんだな…

ガサガサ…

ん？誰かいる？

??「あ……………」



??」「……………」

??」「……………」

あ、どこぞのアイドルだよってやつ三人衆が出てきた…黄色い布…

聖「なあ、もしかして張三姉妹？あ、勝手にきりすてはしないから大丈夫だ。」

俺は武器をさやにおさめた。

??」「そ、そうよ！でちいーたちになんの用なの！！」

うはく気が強いね…水色の髪のこと…だが、俺はあることに興味をもつてしまった！それは…

聖「なあなあ！君達って、歌手？」

??」「そ、そうだけど…貴方は討伐軍のかた「んなの関係ねえ！」  
うわ！？」

桃香にそっくりなやつが驚く。

俺は今、燃えている！心が燃えている！

聖「うっしや！俺と戦ってもらおう！」

??」「……………私たちは武器も持っていないのですが…というより私たちは戦う術を身に付けていません。」

ガネメが答えた。

聖「んなもん、必要ないだろ…なにせ勝負の仕方は…歌だ！」

??・??「（ポカーン…）」

水色とガネメがポカーンとしてる。だが…

聖「よし、この勝負で君たちが勝つたらなんでもしてあげる。」

??「よし！やろう！」

やっぱり偽桃香はくいついた。

??「ねえ「問答無用！いざ勝負じゃ！」…わかったわよ…わかったわよ！ちいー達に勝負を挑んだのを後悔しても知らないよ！」

聖「上等！いざ勝負！」

んで始まってから結構だった。いや、この子たちの術は便利だよ！なんつったって札をそこら辺に張り付けると望んだ曲が流れるんだぜ！ま、そのためには妖術を使わなきゃいけないんだけど、俺は魔

力でなんとかなってる。

聖「……やるな、これ程までできるとは…流石だな、天和、地和、人和…」

なんか歌ってたら段々仲良くなっちまって真名まで交換しちまった。えっと、偽桃香が天和で、水色が地和、ガネメが人和だ。

人「私達相手にほんとによくここまで頑張ってるね、聖さん。」

いつも冷静っぽそうな人和も今は興奮ぎみか、よくしゃべる。

聖「さて、次は俺の番だ…行くぜ、「風の会話」！」

聖「どんなもんだい！」

華「…いつまでやってるのよ貴方達…」

桃「けど、なんか楽しそう」

策「起山って、うたも天才だったのね。」

恋「……」

なんか歌い続けたらみんな集まってきちまった…てか、一刀！いつのまにいたのか！

こうなったら…

聖「一刀！お前、俺と一緒に歌え！」

—「いいぜ！久々にお前と歌うな！聖！」

聖「だな！今俺は燃えている…この勝負に勝つまではこの炎は燃え尽きない！」

桃「ねえねえ聖さん、勝負ってどんな勝負してるの？」

聖「歌の勝負だ。もし負けたら一番歌が上手かったやつのこと  
はなんでも聞くといい条件で！」

桃・華・策「」（ピクツ！）「」

華「その勝負、私も参加するわ。春蘭！秋蘭！貴女達も参加しなさい！そして聖！歌でも我が軍の方が強いということをお教えなさい！そして、聖を我が軍に引き入れましょう！」

春・秋「御意！」

桃「私達も参加しようよ！皆でやれば勝てるよ！」

愛「桃香様、なぜそこまで興奮しているのですか…」

桃「だって！ かつたらなんでも言うこと聞かなくてことだから、これに勝って聖さんを私の軍に引き入れられるんだよ！」

愛・鈴・朱・雛「……」（ピクリッ！）「……」

愛「桃香様… 私も参加させていただきましょう！」

鈴「お兄ちゃんをこっちに引き入れるのだ！」

朱「はわわ！ 雛里ちゃん！ 頑張ろう！」

雛「あわわ… うん、朱里ちゃん。」

策「…わかるわね、皆。」

周「ああ、あいつがいれば戦力になる…」

蓋「歌か… 久々じゃの〜」

甘「……………」

天「どう？これでもまだやるの？聖さん。」

聖「こんなもんでへこたれるかよ！しかし凄いな……」

天「聖さんもね」

一「（；、）（）」

華「…化け物ね…」

桃「……もう無理…だよ…」

霞「おっしゃ〜 頑張り〜 聖 なんや飽きないわ！これ！」

音「聖殿〜！頑張るのですぞ〜！恋殿も応援を！」

恋「…聖 頑張っつて」

策「……流石にもう無理ね…」

聖「どうだ！そろそろ降参した方がいいんじゃない？」

地「なにいつてるの！まだまだこれから！」

聖「望むところだ！」

天「うゝ…もう無理…」

聖「ハツハツハ 俺の勝ちだ けど、俺もギリギリだった……」

へなぐってへなりこむ俺と張三姉妹。

聖「……けど、約束は約束だ。俺の言うことを聞いてもらおう。…

…華琳、君たちが張三姉妹を保護してあげて。」

華「は！？なにいつて「勝負に参加したんだよな。」…分かったわ

よ……」

人「……どうして私達を助けてくれるの？」

人和が聞いてきた。

聖「……だって、楽しかったじゃんか。それに、いい勝負相手ができた。それを失いたくないだけ。」

人「……それだけ？」

聖「おう。」

三人はため息をつく。

聖「ん？どした？」

俺、そんなにあきれることしたか？



天「それじゃあね〜聖さ〜ん」

地「次は負けないんだからね！」

人「…有り難うございます。」

華琳達が自分の領地に帰っていく。そして、桃香たち、孫策たちと帰っていく。そして俺らも帰ろうとしたんだが…

聖「あゝ〜水〜」

音「少しは我慢するのです！あんなに歌った聖殿が悪いのです！」

霞「自業自得やな」

水分不足で声が悲しいことになってしまいがら自分の領地へ帰るのだった。

聖「（……………ひひひ…一応成功したぜ…北郷一刀取扱い説明書…兵士に渡したし、ひひひ…）」

黄巾の乱が過ぎて聖の物語は着々と刻まれていく。このあとはどのような展開が待っているというのだろうか。それは神にしかわからない。

《あ、俺もわかんないぜ》

.....  
(. )  
(. )

第十七話 張三姉妹（後書き）

いかがでしたか？最後が悲しいことになってましたがご勘弁ください。誰か、Net please！

番外編 北郷一刀取扱い説明書事件（前書き）

ヒヤッホイ こんな俺でもけっこう人気あったな

《小説がな》

……ま、いいか。今回は番外編です。短いですが、楽しんでいただけるとありがたいです。あと、今回は主人公を華琳としておいてるので、華琳視線になります。

番外編 北郷一刀取扱い説明書事件

華「ふゝ…まったく疲れるわね…」

黄巾の乱が終結して、確かに私達の名は上がった。けれども、その終結の仕方が気に入らないのよ…

そのおかげで張三姉妹を配下に加えてから人が集まるようになり、兵力は増えていった。それはいいことなの。けど…

天「ほらその人！頑張つて！」

地「ちいー達がこれ程教えてあげてるのに…何でできないのよ！」

人「…いまいちパツとこないわね…」

一「ぼくはなぐんのたぐめにうぐたうぱくラジクくロロベンゼン」

地「ほら！種馬！変なわけのわからない歌は歌わないで！」

一「(TOT)」

…これが大変なのよ…歌での勝負で初めて負けた張三姉妹は何かが燃えて天和曰く「絶対次は勝つんだから！そして私達に加わって一緒に歌うんだから！」だそうよ。そして、私がどんなてを使っても聖を手にいれるといったら地和が「そんな酷いやりかたが許されると思ってるの！？ちいー達は決めたの！聖には正々堂々と歌で決着

つけるって！」だそうよ。貴女達…どちらが上手く歌えるのかを競っていたんじゃないの？そして人和が「皆でやれば勝てる確立がある」とかいつて仕事が終わったらいつもこれよ。はあ…なんとかならないかしらねえ…

や、やっと終わったわ…

私はふらふらした足どりで自室に戻ろうとした。

兵「あ、曹操様、起山殿がこれを渡すようにと言われたので…どうぞ。」

渡されてきたのは…綺麗な本？

兵「お疲れの様なので下がらせていただきますね。」

華「……有り難う。」

兵士は立ち去った。けれども、なんなのかしら…この本…

自室に入り、本の表紙をみる。すると本には大きく“北郷一刀取扱  
い説明書”って書かれていた。へえ〜？面白そうね。

しかし随分と綺麗な本ね…

本をよみ始めた。

華「…なになに…

まず始めに北郷設定…

姓：北郷

名：一刀

身長：172

体重：74

ここまででは普通ね…」

なんだ、あまりたいした事書いてないのね…

さて、本文に入りましょうか。

華「ん？なにになに？…」

・北郷一刀はまず変態で同性愛のところにはか上官しません。それと、その主人には気をつけてください、いかれませう。

…###[

へえ〜…聖、私にこんなものを渡してくるのね…上等よ…

華「

・あの子には常におなごの新しい下着をおいてあげてください。

・もし出来ないのなら彼は種馬になります。

……なんだ、冷静になって読めば普通に書いてあるのね。」

けれども下着を常に新しいのって…何処の変態よ…

華「

・彼と閨を過ごさないでください。絶対に逝きます。

「

字が危ないわよ…



ん？これにて一刀の紹介は修了させていただきます。って、早いわよ！なに！？これ！なんなのよ！取扱い説明書なんて書かれても全くだいみ成して無いじゃない！

あ、まだ続きがあるようね…これより人物紹介に入ります。一刀の愉快な仲間達…愉快なっていうのが気に入らないわね…読んでみましょう…

・夏候惇

主のことになるとどこでもすぐに駆けつけてくれる頼もしい人。武力に長けていて、力を重視する。最低一人はこういう人は欲しがるだろう。

・夏候淵

夏候惇の妹。冷静な判断をくだせるし、さらに弓の使い手。てかさ、もう夏候淵の方が姉じゃね？

…いきなりため口になったわね…

よみ進んでいき、最後に私の評価ね…勿論最高の評価よね？

・曹操

貧乳！変態！同性愛！この野糞が！あと髪の毛の紐って、骨じゃね？  
やべｗｗｗｗ似合わねｗｗｗｗ

…ブチッ！

華「うがああああ！」

バタン！

—「華琳！どうした！」

華「ちよつとこれを見てよ！聖が書いたのよ！」

—「ん？なにになに？（一応文字の書き方や読み方は教わってるからわかるけど…）」

…え！？」

—刀が変な反応したわね…

華「ちよつと見せなさい。」

スッ！

—「あ—！」

最後の方をよくみると…

…って一刀が言ってたぞ。華琳、とりあえず処刑しとけ。

—「（；、）」

ジャキン！

華「へえ〜？一刀、いい度胸ね…」

ゴゴゴゴッ！

—「違う！誤解だ！てか、その武器しまえ！」

華「……………（ニゴッ）」

—「ギャ—————！」

華「まったく…誤解なら誤解だと早くいってちょうだい。」

—「いってました。それと、本から紙が出てきたぞ。」

華「ん？なにになに？」

紙には大きくこう書かれていた。

馬鹿

…ブチブチ

もうこの本はこの場に必要ないわね。

—「うわ！？また！？聖のやるゝ覚えてろ…」

ザン！                      ザン！

私は絶で今までにない速度で切り裂いた、が…

—「うわ！？華琳！このほん切れてないぞ！なんか文字が浮かび上がってきたぞ！」

“へ！その本は俺の妖術で切れないようにしてあるのさ！ざまあ見ろ！これが俺を追っかけ回してくれた仕返しさ！あ、あと本気の話

で一刀が華琳のことを貧乳だよな〜あいつ…ちっこいし、餓鬼か？  
って言ってたぞ。”

華「……………( ^ | ^ )」

—「ギャ—————！絶対に覚えてる聖—————！」

〈聖side〉

聖「ん？」

季「どうしたの？兄ちゃん？」

聖「いや、今誰かにうらまれたような…」

流「兄様！？それは大変じゃないんですか!？」

聖「いや、けど何故かあまり気にしなくてもいい感じな気も…」

月「…不思議ですね、聖兄様。」

番外編 北郷一刀取扱い説明書事件（後書き）

いかがでしたか？やっぱ華琳の扱いひどすぎました？ごめんなさい。  
これからは気を付けます。

第十八話 武將強化計画（前書き）

…なんか自信が…あまり期待しないでね……

第十八話 武將強化計画

聖「う〜〜ん…」

季「兄ちゃん、どうしたの?」

聖「う〜〜〜〜ん…」

流「兄様、朝ご飯の準備が…兄様?」

聖「う〜〜〜〜ん…」

月「聖兄様、どうしたのですか?」

聖「う〜〜〜〜ん…」

詠「ほら!いつまで悩んでるのよ!」飯の最中に悩むのはやめなさい!」

聖「う〜〜〜〜ん…」

霞「聖!どっしたんや?いつもの」う〜〜〜〜ん  
~~~~~ん「ちょい待ちや!最後までうちのせりり」う〜〜〜〜ん  
~~~~~ん「あんだ絶対に嫌がらせやな…」

はい、黄巾の乱が終結してから一週間経ちました。今現在は食堂にて月と流琉の料理がでてるところです。





ガタンッ！

聖「いつてえ〜〜〜！…あれ？みんなどした？」

うえー！？いつのまにか食事始めてた！ってか、皆いつ集まった！？

音「恋殿を悩ませたからなのです！」

とりあえず椅子を直して再び座る。

月「聖兄様、大丈夫ですか？」

流「兄様、怪我してませんか？」

季「兄ちゃん大丈夫？」

やべ…いい子や……

あ、そして悩んでた事だが…

雄「いったい何をそこまでして悩んでいたのですか？」

貴女の事ですよ…

いやさ、あのあと華雄は考え直してんでなんか気付き、冷静な判断が出来るようになったとか…！っそのこと更に強くしちゃおうかなって…よし、そうするか。

聖「なあ華雄、君はさ、もっと強くなりたくない？」

雄「はい？」

ま、そうなるだろうな。

聖「君のことですっと考えていたんだ…冷静さを得たならいっそのこともっと強くしちやおうかって考えていたんだ。」

雄「し、聖様が私のことをここまで……／＼はい、やらせていただきます。」

やべー！冷静！

ガタンッ！

すると武将の皆さまが椅子から立ち上がった。

霞「ちょい待ちや！華雄！あんただけずるいや！聖！うちにも稽古つけてや！」

恋「…恋も、お願い。」

聖「うえ！？」

季「兄ちゃん！ボクにも稽古つけてよ！」

流「兄様！私にもお願いします！」

待て待て待て〜い！流琉ってそんなキャラだった！？

《やっべー！最高！毎回お馴染みの神様が作った映画コーナー新しいのができたぜ！》

変なコーナー作るな！てか、ついにお馴染みになっちまった〜！

《それで今回はこちら！題名は“残酷な戦争物語”だ！》

この状況で説明にうつるな！てか、意外とまともだな。

《はい！これは戦争の残酷さを知ってもらったために作った映画だ！》

ふ〜ん…

《んで感動台詞はこちらだ！主人公がヒロインに死ぬ前にいった台詞“わ、私の分まで…いきるんだ…そして…”》

やべ！意外と感動ものじゃね！？しかし、これをぶち壊してくるぜ…絶対…

《ケチャップを愛せ”とな！》

やっぱり感動ぶち壊した！なに！？なんでケチャップを愛せなの！？てか、戦争の原因ってなんだよ！

《味噌汁にケチャップかマヨネーズ、どちらを混ぜるかが原因だ。ちなみに、主人公はケチャップ派だ。》

いやいやいやいやいや！駄目だろそれ！戦争の原因がケチャップとマヨネーズ！？こんなんで殺し合いまでいく！？てか、味噌汁にケチャップかマヨネーズを混ぜる！？絶対に両方合わねえぞ！

《そして最後のヒロインの叫び声…“死なないで〜！コペルニクス

「ステイブングルガツチャニコスニヴィルメイトロウニジャクソン四世さ〜ん！」…やべ！白い涙が…」

名前長！名前ながすぎない！？しかもどっかで聞いたことあるよその名前！つてか、白い涙つてあんた本当になに！？涙も普通じゃないのか！？てか、感動するか！？これ！

流「兄様！早く始めましょう！」

ちよつと待て！お前絶対どうかしてる！こんなキャラじゃなかったはずだ！

季「兄ちゃん！早く行こう！」

恋「……始める。」

雄「さあ、始めましょう。私にも、守るべきものを守るためにもつと力をつけたいのです。」

お前誰だよ！冷静になりすぎだろ！俺には何故かお前をみると男の方の諸葛亮が武器をかかげて戦場に一人で立つように見えてくる！なんかそんなくらい珍しいというか…何回も言うけどお前誰だよ！

霞「…華雄、変わりすぎや…ありえへんくらいの変わりようやな…とにかく、聖！うちにも稽古つけてくれや！はよ行くで！」

ジャキツ！

聖「ちよつと待て！今からなのか！？少しは考えるとかしないの！？てか、皆その武器何処から出した！」

恋「…聖、こまかい」

季「兄ちゃん！細かいことに気にしすぎだよ！早く行こうよ！」

聖「全然細かいぞ！すごく重要な事を聞いてるぞ！月！詠！ねね！助けて〜！」

月「へ、へう…ごめんなさい…」

詠「ぼ、ボクにふらないでよ！そもそも聖が言い出したことですよ！」

音「ねねにふるなのです！早く逝ってくるのです！」

聖「いやねね！？そのさ、字が危ないんだけど！せめて恋を止めるくらいしろよ！」

霞「諦めな、聖。」

聖「お前が言うなああああああ！」

流「行きましょう！兄様！」

聖「お前はいつから好戦的になった！」

流「ち、違いますよ！／＼断じて好戦的になったわけではありません！／＼（この訓練に参加したら、兄様と一緒にいれる時間が増える…／＼）」

聖「グツ！？いや、季衣と流琉はいいと思うが、華雄も含め仕事はどうすんだよ…」

詠「確かにね…」

よっしや！こっちのペースにきたぜ！

聖「俺も仕事が一応あるからな。（ほとんどが月の手伝い。）」

雄「確かにそうでした…く！私はまだあの猪が残っていたのか…すみません、聖様…私は…まだ…」

華雄が過去の自分の恥を知ったのか、なんか凄い後悔してそうな顔をしている…てか、キャラ崩壊しすぎだろ！なにこれ！？桂花が男！OVEになるくらい凄いぞ！？

聖「…あのな…君には守るべきものを守るための力を知ったんだろ？俺はただ君を失いたくないし、もっと言うと俺からして君は俺の守るべき存在だ。このまま死んでほしくないから気づいて欲しかった。そのためにあの質問をしたんだ。それに今までの過ちに気づいたのなら、それに反省してるんだろ？別にそこまで自分を否定しなくていいじゃないか。」

雄「聖様…／／／はい！私は…もっと強くなります！」

うん！やっぱり華雄はせめてこんくらいのテンションじゃなくちゃこっちの気がくるつ。

聖「んじゃ、仕事が終わったら鍛錬場に集合！」

そして鍛錬場…

何故か俺は…

皆に…

武器を向けられています…

聖「……なあ、鍛錬内容は俺が作ったんだが…必要だったのか？」

恋「……聖、強い。」

霞「個人個人教えるよりまとめて教えた方がええやん。」

流「……兄様、いきましよう。(…やっぱり二人だけというのは叶  
いませんか…)」

ん？妙にがっかりしてるな…流琉。

季「兄ちゃん！いくよ！」

雄「いきましようか、聖様。」



ジャキッ！

やめろ〜〜！

聖「ちよつとまてええい！俺の話聞きけ！」

ピタッ！

聖「俺が考えたのは個人個人のやり方を伸ばす方法だ！」

流・季・恋・雄・霞「「「「「？」「」「」」

聖「つまり、個人個人のやり方を伸ばすためにはやっぱり個人個人の訓練がいいと思う。」

霞「なんや？それ…ならいつものと変わらないやないか…！」

…いつちやっていいのかな…

《早く言えよ これなら絶対に皆強くなるからさ》

…わかった…

聖「勿論条件もつけるさ。最終的には試験がある。その試験は今の自分と戦ってもらおう。」

…そつだよねえ、皆わからないよねえ…本当に協力してくれるんだよな…

《任せる！つまり試験日にそいつらの修行前の影を作るんだよな。別に斬っても血は出ない。うん、いい修行方法だ。ただし、あれを言わなくちゃ効果はない。》

…わかったよ…

聖「試験のことは俺の妖術（嘘）でやるから心配はいらない。そして、その試験に合格できたら、俺が合格者のみ一回だけならなんでも言うこときいてあげる。」

流・霞・季・恋・雄「……」（ピクンッ！）「……」

ほらほらほら…あぶないよこれ…

《けどこれで皆レベルアップ確定だ！》

だといいがな…

雄「…聖様、その言葉に嘘偽りはありませんか？」

聖「う、うん…」

霞「ごうしちやいらへんな！早速修行や！」

季「流琉！いつしよに頑張って試験に合格しよう！」

流「うん！そうだね！（試験に合格すれば…兄様と一緒にいられる…／／／）」

恋「……修行、始める！」

ダダダダダッ！

ありゃりゃ…なんか後が怖い…

《まあ落ち着けよ 化け物》

誰が化け物だ！

《んも〜…モ〇の息子だね…噂はきいてるよ…》

っ！！オツ〇ト主様！

《プリキ〇ア欲しい…プリキュ〇欲しい…欲しがね。》

……いるか！『グラビデ』！

《あ！あ！あ！押し潰されて…やばい…気持ちいい…や、や、や、  
~~~~~》

このドMが！勘違いされる言い方は止める！

《はあ、はあ、気持ちよかったよ…》

だから！止めるっていつてるだろうが！

《次はもっと激しくね》

だあああああああああああ！だ〜か〜ら！止めるっていつてるだろうが！

《ready go!

私のおじいさんがくれた初めてのオベベ! さあそれは世界で最低レベルで私はとてもふつくし!》

……( - | - )。Z z z

《…って無視すんなごら! 私の血液を沸騰させることができる正義の味方最高神!》

…あつそ。

《( T ^ T )》

はい、そして試験日になりました。なんか凄い悪感が…

聖「…では今から自分と戦ってもらおう。まず、季衣から。」

そして、季衣が前にでる。

頼んだぞ。

《任せろ！》

そして、神は黒い季衣そっくりな影を出現させた。

ま、みんな驚くよね…

季「…兄ちゃん、これは？」

聖「これは季衣の影さ。つまり、修行前の自分のちからをもって  
いる影だ。こいつを倒せば合格だ。」

季「わかったよ！兄ちゃん！」

雄「すなわち、前の自分と戦うと言っことか…なんか気分が悪いが  
…勝ったらさぞ大きな達成感があるだろうな。」

あんた本当に誰だよ…

はい、結果は嬉しいことか、悲しいことか…

季「兄ちゃん！次はあれ食べに行こう！」

…全員合格しちゃったんだよね…んで、今季衣の願いをきいたら「兄ちゃんと一緒に食べにいきたい！」だとよ…おかげで財布が…

季「兄ちゃん！兄ちゃん！早く！」

…なんか俺、これから頑張るわ…

はい、変な話だったが、聖は武将全員の能力アップに成功(?)した。彼は死亡フラグの一つを回避させた。

おまけ

聖「…で、なんで皆俺の部屋にいるんだよ…」

恋「…なんでも言うこと聞かなくていった。恋と一緒に寝る。」

音「れ、恋殿が寝ると言うのであるからねねも一緒に寝るのですぞ

！断じて聖殿と一緒に寝たいからではありませんぞ！」

いや、あのメンバーならわかるけど、本当に全員来ちゃってるんだよ…月も、詠も…

雄「……／／／」

霞「ええやんか！それにこんな美女達に囲まれて寝れるんやで！」

聖「いやまず寝れんわ！」

霞「ええやんか別に。それとも、もしかして襲いたいんか？ええよ…別に襲って／／／」

いやいやいや！まずいつて！これはまずい！月も流琉もいるんだぞ！

月「へう／／／聖兄様と…へうくくく／／／」

流「に、兄様と私が…／／／」

君たち！危ないことももう知っちゃってるのか！？てか、流琉！君絶対に変だぞ！キャラが危ない！

恋「……早く寝る。」

ギョツ！

恋が抱きついてきた！！あぶない！今布団に押し倒されてる状態だけど…

恋「（ー|ー）。ZZZ」

つて寝た〜〜！スゲー！こんな短時間で寝れるのか！？

霞「恋！ずるいぞ！え〜いやけくそや！」

月「へ、へう…な、なら私も！」

流「わ、私も！」

季「皆が寝てるんならボクも！」

詠「な！？／＼／＼ならもういいわよ！やけくそよ！」

雄「な、なら私も／＼」

ちよつとまでえええい！だからいつもより布団がでかかったわけですか！？ちよつとみんなしてはいつてくるなよ！

《そして聖は、溜まったものを出すかのように彼女達を襲って…》

誰が襲うか！！

月「ん〜…聖兄様…／＼／」

流「ん〜…兄様…／＼／」

ちよつとまでまで！なにこのロリボイス！危ない！ロリがこれほどまで効果があったとは…てか、耳元でささやくな！



《…ヤれ！命令だ！》

誰がやるか！くそ~~~~~！！

そのあと、聖は眠れない夜を過ごしていた。

第十八話 武將強化計画（後書き）

いかが…でしょうか…日常編、恐るべし…これほどまでネタが浮かばないとは…

第十九話 部隊をもちましよう (前書き)

訂正しました

## 第十九話 部隊をもちましよう

聖「月！ついに……ついに……！ついに天下統一できたな！」

月「はい これも聖兄様のおかげです」

聖「いや／＼／＼そんなことはないぞ。それより、俺は政治に関しては全くと言っていいほど無知だ。」

月「クスッ」

聖「あー！今笑ったな！こんちきしょうめ」

月「なので、聖兄様も政治のことを知ってもらうために一人、先生をよんでます。それがこの人です。」

それで出てきたのは……

……ピンクの下着か？それだけしか身に付けていない……

……変態オヤジだ……

??「うつぶん よ・ろ・し・く・ねん」

聖「……月、本気が……ってうえ!?!」

月がいつのまにかいない!?ちょっとまってまって!

??「あらん いい男 久々に興奮しちゃわん」





い寝ちまった てか、なんで皆俺のまわりに集まってるんだ？

詠「あ、あんたね！会議中に寝るのはどうかと思っわよ！！」

月「へう／／／」

とにかく質問してみた。

聖「…なんで皆俺の周りに集まってるんだ？」

聖以外「…／／／」

ありゃ？皆黙っちゃったよ…

詠「いや！その…そう！起こすためよ！勝手に寝たんだから起こそうと思っただけよ！別に聖の寝顔が可愛いとか思って見てたりなんかしてないからね！！／／／」

聖「おい、本音がもれてるぞ…」

詠「~~~~~ツ！！／／／」

月「へう／／／」

季「兄ちゃんの寝顔可愛かったよ」

流「ちよつと！季衣／／／」

音「ね、ねねは違いますぞ！／／／」

恋「……………もう一回寝て。」

霞「いや〜意外やな〜 あんな聖は初めてや」

聖「…やめて…恥ずかしくなる…」

詠「ご、ゴホン！…それで本題に入るわよ。」

ナイスです！詠！

詠「それで聖、貴方は明日から部隊をもってもらつわよ。拒否権は無いわよ。」

……………え！！？

聖「…ちよいまちや！拒否権はなしてどう言うことや！何故拒否権をとるんや！部隊率いるのは霞の方が得意やないか！それにうちは隊長は向いとらんわ！」

霞「うちの口調まねすんなや！なんや！どつやっつてうちの口調をそつくりすることができんんや！てか声までまねすんなや！」

聖「それは一つの才能なのです！」

音「次はねねの声真似なのですか！？」

詠「そんなことより人の話を聞けー！！！」

聖「へう〜！！！」



詠「月の声真似をするなー！！！！」

聖・月「へう~~~~！！？」

はい、次の日は何故か俺専用の部隊が拳兵されていた。虚しく空しく己を消・し・た

すなわち…逃 走！

ガシッ！

恋「……………駄目。」

聖「イデデデッ！わかったわかった！ごめんなさい！やりますやります！」

はい、なんか今強制的に部隊の訓練をさせようと恋の見張りつきでやらされてる。んで戦略的撤退(?)を開始しようとしたら恋に捕まって肩を掴まれてる状態。そして恋がいるということは…

音「恋殿を困らせるなのです！ちんきゅーきいいいっくー！」

キーン！

聖「グベラ！」

ねねの攻撃

ねねの特殊能力発動「恋LOVE！」

ねねの攻撃は特殊能力により攻撃が奥義「ちんきゅーキック」とな  
った

聖は回避しようとした

しかし恋が動きを封じていて行動できない

ねねの奥義が聖の金の宝物に当たった

聖は倒れた…

恋姫無双転生物語ー完ー

聖「まだ終わるかあああああああ！」

音「しつこいのですぞ！もう一度、ちんきゅーきいいいっくー！」

キーン！

聖「グバツ！……………許すまじ……………ね…ね……………」。

《これにて恋姫無双転生物語を完結させていただきます。今まで楽

しんでいたいただいた皆様！次からはこの俺の作った映画シリーズになりますんでよろしく》

……誰が…終わるか…

聖「…逝きかけたぞ、ねね。」

音「それは自業自得なのです！」

聖「わかったわかった…やりやいいんでしょ。」

はい、今調練場です。どうやら募集というかたちでやったら意外に集まったらしい。数は…千か…充分だ。けど指揮できるかな…やるか。

俺は兵の前に立ち、兵に声をかける。

聖「まずは歓迎の言葉をかけよう！我が隊へよく来てくれた！この中で知っているものもいると思うが、自己紹介をしよう！我が名は董卓の兄、董雷起山！そして君たちは我が隊に入ったから真名を預ける！真名は聖だ！真名は気軽によんでよいぞ！」

ざわざわ…

男兵「おい、いきなり真名が許されたぞ…」

男兵「な、なんて器の大きな人だ…」

男兵「俺、この隊に入って早くも良かったなんて思ってきた…何故だろうか…」

女兵「…なんかかつこいい…／＼／」

??「…／＼／（聖さん…やっと会えましたね…／＼／）」

む？今この隊の何処かで俺の知人がいたような…いいか。

聖「では早速だが、この隊の試験を行う！負けても心配はいらない！ただこれからこの隊の副隊長を決めるだけだ！さあ、皆の実力を見せてくれ！」

兵士達「応！！」

んで決めたのがトーナメント戦だ。まあこの世界ではまだわからない

いだろつから説明し、そして試験を行った。む？なんか赤い髪の少女、どつかでみたような…おっと、今一応赤い髪の少女と兵士の決勝まできて戦っている。赤い髪の少女はなんと珍しい青い長剣を使っている。しかし良く短距離で戦ってるよな…

??「はああああ!」

男兵「うおおおお!」

ガキイイイーン!

二人の武器がぶつかり、そして片方の武器が落ちた。

聖「試合終了!勝った者は俺のもとにこい!今日は最初だからこれにて解散!」

少女の方が勝った。そして、少女が俺のもとに来る。

あれ?みたことあるな…やっぱり見たことあるな…

??「…聖さん、覚えていますか?」

…あああああ!?

聖「…赤花?」

赤「…!! 覚えていてくださいましたか!」

はい、今わかりました

彼女は高順です！てかさ、なんか鈴々に淒く似てないか？いや似てる！絶対にてる！鈴々が超おしとやかになった感じ！着てる服は…  
一般兵の服？いや、よろい？

なんかすげえ服装変わった。ほら、あの三國無双に出てくる董卓軍の一般兵の着ているあれに淒く似てるんだよ。

聖「…とりあえず、君を副隊長に任命するけどいいかな？」

赤「はい！」

こうして聖は一応部隊をてにいた。そろそろ戦も近づいている。そう、知る人ぞ知る、反董卓連合軍が…

《おい！今日のは面白さが欠けているだろ！》  
仕方ないだろ！日常編はニガテなんだから！

《そこをなんとかするのがお前の役目だろ！》

うっせ！お前だって変な映画作ってるくせに！

《黙れ！こいつ！言うだけ言いやがって！いい加減にしるよ！今日だって新しい映画作ったのに！題名は“駆ける魚屋”だ！》

魚屋とかふざけるな！俺だって真面目に書いているのに！

《どこが真面目だ！雰囲気を書いてるくせに！》

なにいい！

《んだと！？》

聖「おい、なに作者と喧嘩してんだよ……」

赤「あの、どうしたのですか？」

聖「いや、なんかこのままだとまずい気がする……」

赤「？？」

第十九話 部隊をもちましよう (後書き)

もつやだ…訂正回数ばねえ…



### 主人公設定3

姓：董

名：雷

字：起山

真名：聖ウキ

性格

旅にでてからますます同性愛が嫌いになった。華琳と会った時にはもうこいつからは離れた方がいい…そう思うほどだ。少しは冷静さがつき、自分の暴走は押さえられるが、やっぱり嫌いなものは嫌い。魔法をとにかく放ったり、武器を振り回したり…だが前みたいな言葉が変化する程までではなくなった。

好きなこと：歌、演奏

嫌いなもの：虫、同性愛

武器：破神、黒龍、獄神、リコーダー

ここで主人公のオリワザ設定。おせえよ！と思う人はいると思いますが、まあ見てください。

一応確認

『魔法剣』

名前の通りで、武器に魔力を注ぎ込み戦う技。例えば、炎系ならば武器が炎を灯した状態ってな感じ。

はい、ここからがオリワザ。

『豪風』

実のところ、これは愛紗に教えるさいにてきとうにおもいついた技。力任せに武器を振るい、強い風で相手を怯ます技。うまくいけば吹き飛ばすまでできる。愛紗はその出鱈目を教えたらできてしまい、今では完全にマスターしている。

『三大奥義・鬼神乱舞』

魔力を力に変えて戦う技。攻撃に残像を残すほどの速さで動き、強力な攻撃で敵をしとめる。攻撃に特化したものなので、魔法は放てない。籠城戦や人を守るための戦いは不向き。

『三大奥義・裁き』

闇の力を最大限にまで活用した技。闇の塊のような漆黒の玉を放つ。威力は絶大。だがアルテマよりかは弱い。が、その巨大な玉からレーザーを放つことも可能。範囲はかなり広いが、威力はアルテマの一手手前で止まる。

『三大最終奥義・無の世界』

無の力をフルに活用した強化技。この技を発動したさい、ペナルティは必ずつく。理性は保たれるが、相手を別の次元に吹っ飛ばして、発動した者が有利な次元で戦うため、一対一のみが可能。その奥義を発動し終わったあと、魔力は0になり、体力はあるかないか

くらいまで減る。本当にいざというときしか使ってはいけない技。

《てな感じだ　ま、次話を楽しみにしてくれ》

主人公設定3 (後書き)

チートなのさWWW

第二十話 反董卓連合軍勃発！（前書き）

やっちゃんいかん！ってな感じの人が特別ゲストとして来てます！

第二十話 反董卓連合軍勃発！

月「聖兄様、起きてください」

聖「（-|-）。ZZZ」

月「朝ですよ」

ユサユサ…

聖「（-|-）。ZZZ」

月「聖兄様…」

聖「（-|-）。ZZZ」

月「へう…」

聖「（-|-）。ZZZ」

《……………おい、近くに男同士がやりあつてるぞ》

ガバツ！

聖「うおおおおお！同性愛はどーだあああああああああああああああ！…」

月「へう!?!」

あれ?月…なんで俺の部屋に…おい!駄神!同性愛いねえぞ!

《( - - - ) y - 》

うがあああああ!!

バタンツ!

詠「月…?遅いわよ」

詠まで…

月「あ、はい。聖兄様も来てください。会議が始まりますので。」

月が出ていった。さて、この部屋にいるのは詠と俺…詠は難しい顔してる…もしかして、始まったか…

聖「…詠、戦か?」

詠「ええ…しかも大きなね…」

やっぱり…

聖「月にはまだいってないのか?」

詠「…ええ。」

だろつな…確かに戦のときは申し訳なさそうにしてるけど、反董卓

連合軍だとしたら…もつと心に傷をおっていたらろっ…

詠「…月が悪政をしてるから袁紹を中心とした諸公が反董卓連合軍をつくったわ…」

詠、その気持ちわかる…腹立たしいな…詠も拳を握りしめてるし…しかも本当に悔しそう…

聖「相手は名門袁家が中心か…反董卓連合軍ってことか…けど強いだろうなあ…あの袁紹か…相手にとって不足なしだな。」

あのゲームの袁紹は結構強いし頭もそれなりにいい…もし性別しか変わってないなら苦戦するだろうなあ…

《こいつの言ってるゲームは三國無双じゃないぞ。三國志戦記系なやつだぞ。》

誰に言ってるんだよ…

詠「(。(。(。」

え？なんか変な事言った？

詠「…貴方、袁紹をわかって言ってるの？」

聖「へ？」

いや、あっちの袁紹はまあまあだったし…もしかして、かなり優秀なの？



聖「（？―？）」

詠「…正直言つて馬鹿よ…」

聖「…え！？」

嘘だ…あり得ない…

聖「ちなみに今あつちは何してるの？」

詠「さあ？…多分総大将を誰にするか決めているんじゃないかしら…」

聖「（―――）」

あり得ねえ…畏だ…これは畏だ！

《何処が畏だよ…》

ツッコミがとられた！？畜生！俺が王だ！貴様のような下級戦士な  
んかに…！！

《（。、。）》

見下すな！ムカつく！

…とにかく！

聖「詠、俺は連合軍を偵察しに行ってくる。」

詠「は！？貴方身分を考えて言ってるの！？？月が心配するわよ！」

聖「…駄目？（潤目+上目遣い）」

詠「…… ブシューー！ いいいい……わ……だから……それは……やめ……」

バタツ！

あ、勢いよく鼻血出して倒れた。いや、やっぱりこれは恥ずかしいな……

《グバツ！……summer……最高……》

なに言ってるんだよ……

聖「とにかく、月にいっといてくれよ。」

詠「（；、、）」

…反応がない、ただの屍のようだ。

しかし、なんと幸せそうな顔だ…

詠「（；、、）」

…もう行くか。

（桃香side）

私は今、連合軍で軍議をして…

??「さあ、この中で総大将に相応しいのは誰ですか？」

いませんね…未だ総大将を決めていて、いつになつても全く軍義が始まらない…董卓さんの悪政で今も困つてる民がいるのに…私達は今何してるんだらう…

隣に朱里ちゃんに愛紗ちゃん…二人とも呆れてるね…

もう限界…私が袁紹さんに言い出そうとしたとき…

??「んじゃ袁紹さんでいいんじゃない？」

私の代わりに言ってくれた男の人…あれ？たしか男の人はこの中で天の御遣いさんしかいないはずじゃ…

あれ？なんか聞いたことある声…

袁「わかりましたわ。他に異論がある方は？」

曹「良いわよ。」

曹操さんが言う。

袁「では決定ですわね。仕方なしに皆さんの推薦でこのわたくしが総大将になりますわ、オーツホツホツホ」

??「その高笑い止めな、耳に響くぜ。」

やっぱり聞いた」とある声…机の上を見ると…

??「……………」

全員「……………」

… 聖さんがいた…

聖以外「……………」

聖「( ; / 、 ) 「

聖以外「……………」

聖「^ (\* | ) < 「

聖以外「……………」

聖「^ ( ° 、 ) / 「

聖以外「……………」

聖「( | + ) 「

袁「ツ!!! / / / 「

… なんて聖さんが「」に？

〜 桃香 ends 〜

なんだよ…テレポで移動して来てやったのに、なんで無言なんだよ…

桃「…聖さん？」

紹「あ、貴方は…」

あ、自己紹介してなかったな。んじゃ…

聖「俺が誰かって？そりゃ……………私だ！」

華「いや、あんた自己紹介になってないわよ…」

たく、我が儘なやつらだ…

聖「んじゃ、自己紹介 俺は起山だ。このなかで数名知ってるやつ  
（だいたい知ってるやつしかいないが…）もいると思うが、宜しく  
」

紹「わ、わたくしは袁紹と申しますわ…／／／（な、なんと凜々しい方なのでしょう…／／／む、胸が熱い…これが、恋というもの／／／）」

《ふ、陥落したな…》

だ・ま・れ！

てか、お前最近出番少ないよな…

《ちょっとした計画があるからな…（あいつをこの世界に少しだけ

送れば…読者からの人気が…」《

…ま、邪魔しなければいいか。

華「それで、何の用なの？まさか私のものになりに来たわけ？」

桃「ちょ！曹操さん！」

華「あら？もしかして貴方も聖が欲しいのかしら？」

策「私を仲間外れにしないでよね。私だってこんなに戦力になるひとはほしくないわけじゃない。」

??「妾もお主が欲しいのじゃ！」

金色の幼女まで…そしてあっちの方じゃないぞ！仲間として欲しがってるんだからな！勘違いするなよ！

ま、俺の答えは…

聖「ま 安心して 絶対あり得ないからね」

ガタツ！

あ、ここにいる皆が立ち上がった。

ガシツ！

聖「うおわ!？」



桃・華・策「（。＊）」

あ、みんな離れた…

—「…聖 ちょっと面貸せ」

聖「い・や・だ」

—「じゃあ…」

ジャキッ！

いやなに！？あのだでかいハンマー…よく見たらハンマーに10ト  
ンって書かれてる…やば！かなりやばい！

聖「では皆さま！俺は急用ができたので帰らせていただきます！さ  
よならー！」

—「あっははははは まで〜」

ブンッ！ブンッ！

振り回しながら追って来たあああ！怖い！

ガンッ！

—「グハッ…聖…いつかお前を…」

バタンッ！



あ、とにかく本拠地から逃げてきて誰かが北郷を気絶させた。

愛「……………」

聖「愛紗？」

愛「……………」

愛紗でした。

愛「……………何故ですか……」

???

愛「……………何故貴方が悪政をされていて民を苦しめている董卓をたすけるのですか……」

あ、成程。

聖「愛紗、悪政をしているかどうかは別として、どちらにしろ俺は君達とは戦わなくてはいけない。」

愛「何故……」

聖「俺は…董卓の兄であるからな。」

愛「！！…ですが…悪政をしているやからに……」

聖「何の証拠もなくそう決めるのかい？悪政をしているかは自分で

確かめな。…ま、俺に勝てたらの話だがな。」

愛「……………どうしても、我が軍に加わってくださらないと…」

聖「ああ、無理だ。だから、全力でこいよ…」

そして俺はテレポで月のいる本拠地に戻った。ま、怒られちゃったのは当然か…

《ふふ…聖よ…オマケで貴様に打ち勝ち、そして我が好感度が…ふふふ…読者の皆さん、待っててくださいね…素晴らしいゲストを送りますから…》

…神がなんかたくらんでるが、物語は順調に進んでいる。

《ふふふ》

オマケ

ふゝ  
…

自室に今こもってます。

てか、滅茶苦茶怒られた…しかも全員に…ほんと、俺の部隊までも怒られた…

月にいったらしいけど、何故か俺を怒る事の方が優先らしい…まあ、おちこんではいたが、慰めてやったら怒られた…

しかし神の計画ってなんだろう…

コンコンッ

ん？ノックが聞こえた…なんかまた怒られそうで怖い…

聖「すみません、もうしません、だから今回は御勘弁を…」

??「…なにをいつてるんだ…コイツ…」

ん？知らない男の声が…新人かな？

カチヤ

!!!!!!

入ってきた人物は、…あり得ねえ…金色の髪をしていてイッツココ  
OLな雰囲気を出している…髪はツンツン的な感じ…まさか…

聖「クラウド!!!!?」

ク「ん?何故俺の名前を知っている?」

はあ!?何故ここにいるの!?ちょっと駄神よ!それはない!まて  
まてまて!この小説のキーワードはFF9だぞ!なぜFF7の主人  
公を送り込んだ!

《ふ、馬鹿め!》

質問に答える!

聖「あ、あのさ…クラウドが何故ここに?」

ク「ああ、金の底が尽きたからだ。それで中年の男にこの世界に少  
しの間だけいけと言われてな…つまらん世界だ…」

そりゃそうさ…城しか見てない「クラウドよ…」…やっぱり来ちゃっ  
たか、なんかいつきたのか分からないが片翼の天使が…

ク「…セフィロス…」

ちよつとまってまって……おい神よ……ここで戦闘開始とか言わないよな……

《（　　）》

なあなあ……ちよつとお二人さん、勝手に話進めないでよ……あのさ、俺の部屋なんだけど……止めてよ……なんか互いの武器が目の前に出てきたんだけど……ちよつと……殺気バンバン出さないでよ……

ク「はあ！」

セ「ふん！」

いゃいゃいゃー！バトっちゃったよ！部屋が壊れていくー！う、うわあ

~~~~~  
.....

ガバツ！

あれ？なにもない……部屋も異常なし……さっきのは夢？いや、何処までが夢？ま、気にしないでおこっ……うん、その方がいい……

《ふふふ…まだまだ地獄をみせてあげるよ…》

お前…もうやめろ…この作品ぶっ壊してまで人気をあげなくても…

《皆の心に深く残ってほしいからしてることである。》

いや、充分過ぎるほどに覚えられてるよ…

《ほれ、給金だ。》

チャリンチャリン

ク「……………」

《さて、お前をもとの世界に戻すぞ。しかし良く演技できたな。俺の作り出したやつと演技するとは…どうだ？これからも俺についてきてくれる？》

ク「…興味ないね。…金はもらった、さっさと返せ。」

《へいへい。さて、次は誰を送り込むかな…》



第二十話 反董卓連合軍勃発！（後書き）

やっちやっ  
たぜ！



## 第二十一話 巳水関の戦い（前書き）

これは注意事項です！

シスイカンのシがちょっと変換しても出てこなかったのでも巳という字にしました。え？カタカナで書けばいいだろう？いや、なんつうたってカタカナはホウトウで既に使ってますからちょっと抵抗が…

もう一度注意しときます。

シスイカン 巳水関

すみませんが、我が儘に付き合ってください。

## 第二十一話 巳水関の戦い

聖「……………」。

霞「いやゝそろそろ連合軍が来るんとちゃうか？」

聖「……………」。

雄「油断はするなよ…例え馬鹿でも油断していると痛いめ見る…それから今回はあくまで籠城…挑発してくるといふ可能性もある…余計なことはするなよ…」

聖「……………」。

霞「あんたほんまに華雄か？聖は華雄になにをしたんや…」

聖「……………」。

雄「なにをいつている？私は聖様に守るべき…聖様？」

聖「……………」。

霞「おい、聖…聖？」

聖「……………」。

赤「聖隊長！部隊の準備が…聖隊長？」

聖「……………」。



込んだんだよ…

《人のせいにするな！自業自得だろ！》

いや、あんたねえ…ビビるに決まってるだろう…

さて、今の状況を説明するか。

はてさて、今俺らは巳水関の城壁の上にいる

んで詠に巳水関を俺、俺の親衛隊の季衣と流琉、霞、華雄で、虎牢関は恋とねね…ちよっと巳水関の人数が多くね？ま、籠城だから別にいいんだが…そして、俺は城壁の上で華雄と霞で見張りしてたんだが…ね？あの昨日のクラウド騒動で眠れないし、なんつったってクラウドだよ！？FF知ってるなら絶対的な人気のあるクラウドさなんだよ！？そいつが現れたんだぞ！？

そいでこうh…ゲフンゲフン！気になって眠れなかったんだ！そして…寝不足で寝ちまった…

ドドドドドツ！！

お、連合軍がきたな…

《お前達は生き物でも人間でもあるもの連れてきた！》

生き物でも人間でもあるもの？ってまるっきり人間じゃねえか！！

《来たー！この世の終わりだー！》

おい！森の間違いだろ！しかもこの世が終わるって、連合軍危険にもほどがあるだろ！弓矢や剣や槍でどうやってこの世を終わらすんだよ！

雄「…来ましたよ、聖様。」

聖「ああ…よし、赤花！」

赤「はい！」

聖「季衣と流琉は俺と一緒にいてくれ。」

季・流「うん！（はい！）」

赤花が俺の兵を城壁へ誘導し、弓矢を構えさせる。

赤「構え……放て！！！」

兵が一斉に矢を放つ。

だが…

愛「『豪風』！！！」

ブン！           ブォーン！！

マジか！？愛紗が俺の教えた素晴らしく完璧（駄作）な技で矢が吹き飛ばされたってか、此方に降ってきた！？いや、駄目だな…その程度！

聖「あまいな…『エアロガ』！」

今度は俺の強烈な風で矢を吹き飛ばした。

さて…

聖「貴様らの相手はこの俺だ！この戦いは、俺を倒さない限り終わらないぞ！『ファイガ』！」

俺は城壁から火の玉を連続で放った。

ポワーン！

火の海になっちまった…ま、此方に被害はないからいいけどね。

敵兵「ぐわあああ！萌えるううう！」

やっちゃいかん！あんたらどんな訓練させてんだよ！

聖「よつしゃ！ん？」

あれ？愛紗、まだそこにいるよ…

愛「…城壁にいる皆の兵よ！貴様ら、今までなにを教わってきた！【奏でる鬼神】にないを教わってきた！引きこもることしか教わっていないのか…！」

挑発ですか！？しかも俺を使ってきやがった！

これにのったら俺の放った火の海につっこんじまう！いや、けど流

石に…うわ…みんなすげえおこつてやがる…ちよつと待て！俺以外全員おこつてるってなに！？あ、愛紗も辛そうな顔してる…

愛「貴様ら、もしかして本当にそれしか教わっていないのか？だつたら貴様らは可哀想だな…む、無能な将を持ってしまつてな…」

やっっちゃつたー！

赤「全軍突撃です！聖隊長を馬鹿にした罪、万死に値します！！」

季「兄ちゃんを馬鹿にするなー！！」

流「兄様に…よくも…馬鹿にするやつは…許しません！！」

ギャー！キャラ変わったー！ち！あの炎を消す！

俺はとりあえずウオータで消した。

て突撃してるー！兵士の士気が怒りでMAXに！

聖「霞も華雄もなんとかしてくれよ！」

霞「いや、今回は我慢できへんで…」

雄「もはや猪將軍に戻ってしまったとしても…聖様を侮辱する事は許せない！！」

霞「そういうことや…全軍突撃や！」

…そこまで俺の事を…嬉しいよ…て、そんなことしてる場合じゃない！あゝ畜生！！俺も突撃するしかねえじゃねえかよ！止めるか！

（愛紗 side）

…言ってしまった…策とはいっても、言ってしまった…

なんだこの感情…

私は先程聖殿を侮辱した…

なんなんだ？この罪悪感、いや、罪悪感とでは言い表せない…

胸が苦しい…

巴水関にいる全員の将軍がこちらに突撃してくる…

私は、聖殿に嫌われるのか？

雄「…聖様を侮辱した罪…絶対に許さぬ！我が名は華雄！貴様らに死を送る者の名だ！」

華雄がこっちに来る…とてもではないが、戦えない…

胸が苦しい…

心が苦しい…

自分が侮辱しておいて…



私は静かに武器を構える。

愛「…我が名は関羽！いざ、尋常に勝負！」

苦しいが、戦わなくては…

雄「貴様…だけは…ゆるさん！」

すると…

遼「…あんた、絶対に許さへん…うちは張遼や…関羽…後悔するんやな…」

張遼とやらまでもがきた…

鈴「うりやりやりやー！愛紗！大丈夫なのか!？」

星「愛紗よ…無事か？」

趙雲こと星と鈴々が助けに来てくれた…だが…私の心は晴れない…

〈愛紗end〉

く！押されている…

華琳の軍も参戦してきてる…ちい！

なんとか囿になれれば…

囿に？

……そうか！！

聖「全軍退却！虎牢関に退却しろ！」

赤「何故です！？奴らは隊長を侮辱したのですよ！？」

聖「季衣、流琉も赤花に続いて退却。」

季・流「え！？」

俺は一人で敵軍に走り、叫ぶ。

聖「聞け！この戦は俺を倒さない限り終わらない！例え董卓を倒したとしてもこの戦は終わらない！！何故ならこの【奏でる鬼神】、あるときは起山…してその本名は…」

雄「ッ！！ 聖様！それだけは止めてください！」

霞「そうや！それだけはあかん！！」

聖「姓が董！名が雷！字が起山！正真正銘董卓の兄だ！！」

するとこの場の全員が静まりかえった。

聖「…『豪風』！」

俺のてにある二つの武器を振り、味方の軍だけを巳水関の向こうに吹き飛ばす。

《ババさま〜風が吹いたよ〜》。、。(。)(《

『フレアスター』!!

《うはあ〜〜〜ん》

なんでこんなに喜ぶんだよ…

けど流石にやばいかな…いや、こつちじゃなくて味方の方がね…なんつったって吹き飛ばしたんだからな…

さて、始めるか…

俺は巳水関の門の前に仁王立ちする。俺の手にはあの二つの武器ではない、漆黒の大剣、獄神を右手に握っていた。あ、あの武器は城壁に放り投げた。

聖「さあ、今ここに新たな物語を刻もう！もうひとつの名、【絶対勝者】という名の物語をな!!」

敵軍が迫り来る。

俺は静かに武器を構えた。

おまけ

〔赤花 side〕

いたたた…あれは酷いです…いくら私達を逃がすといってもこれはないです…て、真後ろを見ればそこには虎牢関じゃないですか…よく怪我しないですみましたね…我ながら凄いです…

というか、負傷者一人もでてませんね…なんですか隊長は…本当に化け物ですね…

霞「は、はなすんや〔華雄！〕」

雄「駄目だ！あの方の想いを無駄にするな！そもそも我らが出撃しなければこうならずにするんだ！」

霞「だから助けにいくんとちゃうか！？このままじゃ想いが死にかわっちゃうで！」

そして、あの二人に私は話しかけた。

赤「隊長は絶対に生きて帰ってきます。信じてましようよ。」

い、一応いってみました。

雄「そうだ、あの方がそんな簡単に死ぬわけない。」

霞「…ツ~~~~!! わかったわ!そんなかり帰ってきたらほんまにしかってやるからな!覚悟しとき!聖!」

い、一応おさまってくれました…あとは信じるのみですね…

〈赤花end〉

ブルルツ!!

うわ!?

なんか寒気が…いや、なんか帰っちゃいけないきが…

いや、風邪気味なのか?しかしなんだろうこの寒気…

もうすぐ戦闘だつてのにまいった…

《ふふふ…頑張れよ いろんな意味で》

## 第二十一話 巳水関の戦い（後書き）

どうでしたか？いやあくちょっと遅くなりましたね…てか、自分でも感じますが、最近ノリが…てか、ネタが…面白みが無くなってきてませんか？この作品…

鳴かぬなら

他をあたろう

ホトトギス

…友人の出したホトトギスの俳句です。

第二十二話 【絶対勝者】君臨（前書き）

つらかったああああ！！

マジで戦闘きつい！今回は自分では頑張ったつもりですがあまりおもしろくないと思います！

頑張ったんでとりあえずよんでみて下さい！

第二十二話 【絶対勝者】君臨

聖「さあ、こいよ！まとめて相手してやる！」

俺は獄神を振るう。

全てを切り伏せる如く

ブオン！

ザシユ！

兵「ぎゃああああ！」

兵「ば、化け物……」

兵「な、何故こんなに変態なんだ……」

兵「駄目だ……束になってもやられちまう……」

兵「ひ、退け！や、やられるぞ……！」

兵「う、うわあああああ……！」

ちよつと待てやあああああああ……！

だから何故戦闘になるといつもこれなんだよ……なに！？やられる  
！？ふざけんな！俺にこんな趣味はない！



つとー！！今は戦闘をするんだっとな…

聖「さあさあさあ！！腕に自信がある奴はかかってこい！！」

ザシユ！ザシユ！グサツ！

次々と敵を殺していく…

なんだか、初めてこの世界での戦闘を思い出す…

（孫策 side）

な、なによあれ…

巳水関で仁王立ちしているあの男、漆黒の大剣を軽々振り回している…彼は確か、起山…

最初の彼の印象は物凄く元気で活発、そして優しい人だと思っ  
たけれど…

祭「…あれはまさに反則という言葉がふさわしいの…」

黄蓋こと祭が隣で話してくる。

策「…ええ、まさかあれほどの人材がいるなんて…」

恐い…まさかこの私が恐怖を感じるなんて…

けれども…

冥「…欲しいとか言うなよ…奴が我が陣営に加わる確率は非常に低い…いや、無いと言ってもいい…」

周瑜こと冥淋が話しかけてくる…

策「なんで無理なの？」

私は不思議と思い、聞いてみた。

冥「雪蓮…貴女、あんなに重要な言葉、よくききのがしたわね…いか？彼はさつき、本当の名前を言っていた。姓を董、名を雷、字は私達の知っている起山。つまり、奴は董卓の兄にあたる存在…その存在を倒せばいつきに相手の士気は落ちる。」

雪蓮は私の真名にあたる。

雪「え？けどそれじゃあ彼は董卓の兄じゃ登用は無理じゃないの？」

冥「いや、そうでもない。」

さすが冥淋

冥「彼が戦っているものは反董卓連合軍…けれども彼はわかってると思う…この戦に勝っても、もう助からない事を…けれども、彼は董卓だけは殺すまいと戦っている。」

雪「つまり、彼に董卓を助ける事を条件として彼をひきいれればいいのね。」

冥「しかし、今の状況だともう説得という選択は無理だろう…なん  
といたって彼はとにかく倒す、退けることにしか頭がないもの。」

雪「つまり、戦って勝てといってるのね。」

冥「そうだ。だが彼を狙う奴は他にもいるだろう…私の思う限り、  
曹操は確実。そして、劉備の陣営もそのような行動を見せている。  
だから彼らと協力して戦い、」

雪「最終的には私達が手に入れる。そういうことね…こづいづのは  
あまり好まないけれど…祭！思春！」

祭「聞いておりましたぞ、策殿。」

思「……。」

甘寧こと思春はあいかかわらず無言ね。

雪「じゃあ話は早いわ、行くわよ！」

二人をつれて、董雷のところへ向かった。

〈雪蓮end〉

〈華琳side〉

ふふふ…ついにきた…

彼を手に入れるこの日が…

けれども、そう上手くはいかないでしょうね。

なにせ孫策、そしてあの劉備でさえも彼を狙っている。兵力で降参させようとしても聖に兵を無駄死ににさせられるだけ…となると一騎討ちになる…けれども、彼は恐らくあの呂布も越える力をもっている…それに厄介なのが…

妖術…

彼の妖術は厄介にもほどがあるわよ。まったく、攻撃だけではなく自分の身体能力の強化…あるとき、いきなり馬の速さが変わったから多分そうね。

まったく…しかも武器を振り回しながら妖術って、初めてよ…妖術そのものを見るのも初めてだったわね。

となると、少しでも可能性を上げるためには…

華「春蘭！秋蘭！」

春「はい！華琳様！」

秋「…彼をとらえるのですね…しかし、そう上手くはいかないと思います。私の情報によりますと、もうすでに孫策から二人、劉備から三人、それから驚くことに、あの袁紹からも二人武将が向かっています。」

…厄介ね。多分袁紹軍も彼を欲しがっているのね…ま、たまたま出

陣して捕まえて来なさいみたいな事をいったのでしょね。

…とらえられるかとはかく、勝利する率は高まったわね…

華「…二人に命ずるわ。董卓の兄、董雷を各武将と協力し、捕らえなさい。」

春・秋「はい！」

…上手くいくかしら…

〈華琳end〉

兵「オラッ！」

兵「皆で囲め！」

おっと、兵達が四方八方に…全員槍ね…だがあまい！！

聖「…『エアロ』！！」

槍がつくと同時に飛び上がり、槍を回避する。そして…

聖「消滅しろ！『ホーリースター』！！」

真下に巨大な光の玉を放つ。当たったものは消滅し、そして俺は着地する。

聖「さあ！次は誰が俺の相手をしてくれるんだ？」

??「私達がお相手しましょう！」

おっと!?聞き覚えのある声が…あ、趙雲じゃん!

聖「久しぶり!趙雲！」

趙「ふふ、そうですね。あの時は賊と間違えられて攻撃されましたな。」

やめて!もう忘れて!!

あ、次々にきた。

曹操軍には春蘭と秋蘭…それと多分無断かつ抜け出して来たであろう一刃。そして孫策からは黄蓋とあとなんかつり目でいかにも自分素早さツス!みたいな雰囲気を出している女…それと袁紹軍と思われる緑の髪で大剣をかかげてる女と、穏やかな顔しながらもハンマーをかついでるおかつぱの黒髪女。そして桃香からはさっきの趙雲と鈴々、それから…

愛「……………」

愛紗がいた。

趙「董雷殿。すまぬが貴方とは武将だけで戦わせていただく。そして、条件があります。」

おいおいおい!いきなり話の展開早すぎだろ!

趙「うるさい!ちゃんと聞く!!」

聖「まだなんにもいつてないよ!？」

趙「この勝負に勝ったらその敗北させた武将の捕虜となります。」「

ちよつと待つて!俺不利じゃね!？」

ま、もし勝つたらまさに【絶対勝者】になれるだろうがな。

聖「んじゃ俺からも。この勝負に勝つたらここをひきあげてくれ。」「

春「聖!今ここで決着つけてやる!」「

聖「もう決着ついてるが、来いよ!」「

秋「…すまん、聖。流石のお前でもこの人数では無理があるだろう。」「

聖「さあな。俺はこの戦いで勝ち、【絶対勝者】となるものに無理があるかな?」「

すみません、あります。

蓋「董雷よ!お主の力、見せてもらうぞ。」「

聖「ああ。ビビりすぎて小便たらずなよ!..!」「

やべ!下品なこと言っちゃまった!..!

??。「…我が名は甘寧、悪いが貴様はここで我等に敗れるのだな。」

聖「へ？捕まる気？無いに決まってるじゃん。」

—「聖！おまえ」「お前は帰れ。」（T^T）「」

あ、泣いちゃった…

今度は緑、おかつぱの順かな…

??。「あたいは文醜だ！！大人しく姫のところに捕まれ！」

聖「い・や・だ」「

??。「…私は顔良です。すみませんが、ここで捕まっていただけま  
す。」

顔良「礼儀正しいいいい！！」

聖「相手にそこまで礼儀を使うとは…素晴らしい！」

顔「いや…／＼／」

ちよつと照れてるね

鈴「お兄ちゃんに勝って仲間にするのだ！」

聖「仲間に…か…。てか、ここにくる目的って巳水関を通るためじ  
やなくて俺を捕まえること？」



だからこんなに集まってるのか…

愛「……………」。

聖「愛紗、もしかして挑発したこと気にしてるのか？」

愛「……………」。

聖「んなもんで愛紗を嫌うと思うか？」

愛「え？」

俺って、そんなに短気に見える！？

《いやだって、あんた化けもんだろ？》

神の台詞きたああ！てか神様寂しいな！

《だ、黙れ化け物！》

哀れなり（^o^）／

《畜生！今回は負けだ！だが覚えてろ！！絶対復讐するからな！》

…お前有言実行だから恐い…

聖「気にしないから…んじゃ、この勝負を本気で戦ってくれるのなら許してあげる。」

愛「…！！はい！かなわぬまでも全力でお相手します…！！」

真面目キャラに戻ったああああ！！

さて…

「一刀以外」……………。」

「一刀、何しにきたんだ…いきなり逃げた…

「一刀！逃走により敗北！

両者？の沈黙のなか、先に動いたのは…

ダッ！！

文「大人しく捕まれー！」

鈴「覚悟するのだ！」

春「これで決着がつかない！」

はい！猪達が突進！文醜はもう見た瞬間分かった。

文「はっ!!」

文醜が大剣を振り回す。

てか、何故全て横振り？力は強いと思うけど、これじゃあ単調すぎ  
て普通にかわせる。

ブン！ブン！

文「うわっ!？」

ふりかぶりすぎだな…

俺は踏み込んで蹴りをくらわす。

ドコッ!

文「ぐはっ!」

顔「きゃっ!!」

ありやりや…顔良可哀想…まさかの出来事に…文醜がぶつかってん  
で文醜の大剣が重りになっちまって動けそうにもない…出番なし…  
可哀想…

春「うおおおお!!」

お？今度は魏の猪か？

ブンブンブン！

うっほ！？はやいな！

春「うがああああ！避けるなあああ！」

聖「分かった。」

そして俺は春蘭の武器を持っている方の腕をつかむ。

春「む！？離せ！！」

聖「了解。」

ブルンツ！ ドサツ！

持っている手を勢いよく振り、そして転倒させる。

聖「悪い。また俺の勝ち。」

ドコッ！

春「ぐはっ！」

はい、腹にパンチをくらわせました。てか、腹殴って気絶…俺って  
すげえ…

《慢心するなよ。》

慢心せずしてなにか王か！

《化け物だろ?》

しばらく黙れ。『ツイスター』

《うほっ 竜巻に ばばさまあ〜〜》

よし、しばらく黙るだろっ。

鈴「りやりやりや〜!〜!」

ブンッ!

うほっ!春蘭より早い!

突き、振り、突き…

スカッ!

あ!ちよつとかすった!

聖「へえ〜?傷ついちゃったよ まったくやるね ならちよつとお礼をしなくちゃね」

鈴「にやにや!?!にやあああああああ…」

只今体罰中

プスッ…

鈴「……………ちよつとは手加減してほしかったのだ……………」

ありゃ？ちよつと殺りすぎた？なんか黒焦げになっちまってるよ…

ビュッ！ビュッ！

秋「姉者のためにも勝つ！」

黄「ほれほれ 儂に力を見せてくれ。」

二人が矢を放ってくる。

んでもって、二人が…趙雲と甘寧か…

趙「ここからは協力してやりますかな。」

甘「ふ、行くぞ…」

二人が勢いよく…て速っ！！速いだろ！

しかし！

ガガガガガガガッ！

二人の攻撃を弾く！

趙「…これでは本当に【絶対勝者】ではないか。」

甘「…我々が不利だ…私達の速さについてこれるうえ、重い攻撃…しかも片手…」

あ、いやいや違っつす。小競り合いは流石に両手使うけど俺の戦闘スタイルは片手が基本ですから。

ビュッ！ ガシッ！

放たれた矢を片手で持ち…

バキッ！

趙「ぐわっ！？」

バタッ

矢で頭を叩きました。

甘「な！？」

聖「よそ見するなよ？」

隙をつき、甘寧を黄蓋に投げ飛ばし…ぶつかって倒れたところに…

聖「終われ！」

ドコッ！

はい！腹部にパンチ！

勿論黄蓋は気絶。甘寧は…なんか無理っぽい。

そして最後は…

聖「来いよ、愛紗！」

愛「行きます！」

ダッ！

え！？ちよつと速くない！？避けるの無理！

ガキイイイイン！！

やべ！重！！

多分『豪風』を応用してるな？こりゃ…やっちゃいかんな…

ガン！！ガン！！ガン！！



愛紗は青龍偃月刀をなんか風らしきものがまといながら振り回してくる…てかさ、強くな!? 『豪風』 どんだけマスターしたの!? 恋より重いんじゃない? ?

…どうしよう…三國志最強が恋から愛紗に変わりました…畜生!

愛「『豪風』! ! !」

ブンッ! ブワーン!

ちよつと吹き飛ばされた!? 強くな!? そして追撃してきた! ! ! しかーし!

聖「あまい! 『ブリザガ』! ! !」

自分の後ろに氷の巨大な結晶をつくり、そして氷で勢いをとめて愛紗をうちかえす!

ガキイイイン!

愛「…やりますな。ですが、ここで貴方を越えます!」

そしてまた俺のところに来る。

俺は氷の巨大な結晶を武器で粉々にして愛紗に飛ばす。かといって本当に粉々になってないぞ! せいぜい石の大きさのをだからな。

愛「はああああ! ! !」

ガガガガガッ!

いやいやいや！愛紗強すぎでしょ！確かに俺の弾けるくらいの魔法は耐えたけど今はなんか余裕みたいな感じじゃねえか！チートじゃ！だが俺の方がチートだぜ！

愛紗が氷を防ぎ終わった瞬間…

ピタリッ

聖「俺の勝ち。」

愛紗のもとへ駆け出し、そして獄神を愛紗の首筋で止める。

愛「……………」

ありやま？そんなに負けるのが悔しかったのか？

聖「愛紗、君は強くなった。多分君は相当上の強さに達してるぞ。」

愛「はい、有り難うございます。ですが、やっぱり悔しいですね…」

聖「ま、とにかく俺の勝ちでいいかな？」

愛紗がうなづく。

聖「反董卓連合軍の皆よ！よく聞け！この勝負は俺の勝ちで決まった！今ここに【絶対勝者】が誕生した！！この一騎討ち（？）によりお前たちは一時撤退することだ！」

それで敵兵が皆撤退する。

負傷、また気絶（俺との戦いで敗れた武将達）は兵にかつがれながら撤退した。

さて、もう退却できてるだろう。

俺はテレポで巳水関から移動した。

そして城にて…

月「私がどれだけ心配したのかわかりますか!？」

詠「たく!無謀にも程があるじゃない!」

霞「まったく…こちらは助かったけどあんたが死んじまつたらなんもかわらへんやないか!」

聖「はい…スンマセン…」

はい、なんだか俺は説教うけてます。畜生、酷いな…

聖「助けて…」

雄「今回は無理です。」

赤「反省しやがってください。」

流「その通りです。」

季「こど兄ちゃん凄いね！味方全員を本陣付近まで吹き飛ばすなんて！」

え！？今…本陣付近までつて…ちょっとまって！！そんじゃあ俺の戦った意味ってなに！？ちよつと凄く俺損してるぞ！！

月「聞いてるんですか！！聖兄様！！」

聖「…はい。」

三國志の絶対勝者の道、今開いた。彼の物語はまだまだ続く。

黒い空間

??「左慈、俺は奴とはいずれ戦わなくてはならない。」

左「今決着つけなければいい話だろ。」

??「いや、奴にはもつと力をつけてもらおう…あのウキツとやらもたい……忘れた。とにかくそれが燃やされてけっころがっかりしてたな。」

左「あいつはイレギュラーだから早く取り除いてくれよ。認めたくないが、俺では倒せない…この外史を壊すためにも頼むぞ。」

??「ま、奴の体をてにいれたら手伝ってやるよ。別にこの世界には奴以外興味ないからな。奴は、俺だからな。」

左「その言葉止める。」

??」「へいへい…力をつけるよ聖…その時、お前の体を…」

第二十二話 【絶対勝者】君臨（後書き）

いや、これは雑字の山ですか？そのように見えますか？頑張ったんですよ！自分頑張りましたよ！？多分力不足ですね…はい、次回からもっと頑張りますんで、宜しくおねがいます…

畜生、全然上手く書けん…

第二十三話 反董卓連合軍終結（前書き）

くるし紛れに書いてしまった……都合主義です。





……

袁「キイイイイ！！駄目だったのです！！そこまで強い方だったんですね!?」

文・顔「「ごめんなさ〜!」!」

あの方は我が陣営にこそ素晴らしい!

あの方の戦い方は華麗で美しい!

あの方は何故私の陣営に来てくださらないの!?

あの董卓さん…キイイイイ!！腹立ちますわ!!

于「貴方は起山さんを仲間に加えたいのですね?」

袁「だ、誰ですの!?!」

すると黒いものが集まり人の形をつくる。

于「私は于吉と申します。起山討伐任務、どうかこの私にお任せ願います。」

袁「いいでしょう。ですが、殺しては駄目です。必ず捕らえてきなさい。」

于「承知しました。」

于吉という人は消えた。美しくはありませんが、あの方を捕らえ、私の陣営に加え…

（袁紹 end）

はい！さてさてやってきました！今俺は何故か色々な…しかも俺の部屋で何故か宴会開いちゃってます！！

《ひつくー！おい、きいてんのかよ！聖！！たく！やってられつか！んだよ！少し皿を割って飼っていた動物をにがして仕事を破壊させたぐらいでクビにしゃがって…ちきしょ！なんだよ！俺のプリ〇ユアのキーホルダー捨てやがって！》

馱神が愚痴をこぼし…

月「へう……………」

音「うん……………」

流「……………」

季「（…………）。ZZZ」

何故か俺に寄っ掛かりながらねていて…ロリハーレムができて…

恋「…………（ハムハム）」

なんか恋が滅茶苦茶食い散らかして…

詠「なによ！この馬鹿女！」

霞「うっさいわ！頭に響くやろが！」

なんか酒の事で喧嘩を始められ…

雄「私はなんて馬鹿だったんだ…猪將軍に戻りたいのか？私は…く  
！！」

なんか色々後悔している奴が一名…

聖「……………って、なんで俺の部屋で宴会やってんだよ！てか宴会の  
宴の字もねえじゃねえかよ！！ほら起きて！」

月「へう？」

流「ふあ…」

季「…兄ちゃん、おはよう。」

音「…てなんで聖殿がここにいるのですか！？ちんきゅーキイイ  
イイイック！！」

聖「しょうタツクル！！」

ドカンッ！！

音「恋殿~~~~~！！」

聖「そしてお前ら！なに勝手に人の部屋で喧嘩してんだ！」

霞・詠「うるさい！邪魔するんじゃないわよ！（すんなやー！）」

聖「ほお？###」

詠「ひい！わかったわよ！や、止めるからその顔やめなさい！」

霞「わ、わかったから殺気はしまってください。」

は、話し方が普通になった…そして敬語を使ってきた…

聖「恋？頼むから飯は食堂で喰ってくれ。」

恋「…… ザシュ！ ……（モキュモキュ）……」

駄目だ…なんか箸の使い方が残酷だぞ…

聖「止めてくれたら今度俺の手料理を食わせてやるから。」

恋「………わかった。」

聖「華雄？あの～反省するのはいいが、少し落ち込み過ぎじゃない？」

雄「（T^T）」

泣いてるよ…

バタンッ！

扉が急に開いた。

兵「伝令！謎の眼鏡をかけた男が虎牢関にて待ち構えております！  
！」

聖「……いいんだが、今動けるのは俺と恋しかいないぜ？ま、充分  
だがな。恋！行くか！」

恋「…（コクンッ）」

…あのカオスの部屋を抜けて俺と恋は虎牢関へ向かった。

虎牢関にて

一人の眼鏡の男がいた。

俺と恋はそれぞれ武器を持ちながら眼鏡に話しかける。

聖「…誰だ？」

予「まずは貴方から名乗るべきではないでしょうか？」

…なんかムカツク。

聖「俺の名前は知ってるんじゃないのか？俺は董雷だ。」

恋「…呂布。」

于「これは、随分嫌そうに名乗るのであるね。私は于吉ですよ、イレギュラーさん。」

聖「!!!?」

恋「?」

正直驚いた。俺は獄神（言ってなかったけどあのあと俺は二つの武器を無くしちまって武器は獄神しか無理。）を構え、殺気を放つ。恋は話をしても分からないから問題ない…はず。

于「ふふふ…驚くのは無理ないでしょう、私はこの世界を管理している…いや、違いますね。世界を壊している人物ですよ。」

聖「なに!?!?」

世界を壊す?どういう事だ?

于「この世界は外史というのが存在し、つまり似ているようで似ていない別の世界が存在する…その世界を壊しているのですよ。しかし、この世界を壊すためにはイレギュラー、つまり北郷と貴方を排除しなくてはならないのですよ。」

恋「聖は恋を守る。」





めに…力を…

聖「…三大最終奥義…」

聖「『無の世界』」

回りはいきなり灰色の空間に包まれ、なにもなく、まさに虚無の世界に送り込んだ。

于「な、なにが!?!」

聖「…于吉よ、覚悟はいいか?」

于「…消される覚悟できたのですから、ですが、勝つのは…私“達”ですよ。」

今なんかつつかかる言葉がきたが、気にしないでおくか。

于「…消えなさい！」

于吉は俺に向けて黒い弾を放つ。

まるで弾幕だな…

俺は獄神で切り裂き、見えない速さで于吉に近づき切り裂く。

于「無理ですよ？」

于吉は斬られたと同時に消えた。だいたい俺の後ろにいるな。

聖「それはどうかな？」

更に俺は于吉の後ろに瞬間的に移動する。

于「な!？」

于吉は妖術で飛び、俺の攻撃を回避する。

聖「次は、俺の番だな。」

さて、やるか。

今度は俺が魔法を放つ。

聖「受けてみる、連続魔法！ 『メテオ』 『フレア』 『ホーリー』  
クエイク』」

于「な！？」

まだまだ続くぜ？

聖「『ファイガ』 『ブリザガ』 『マダンテ』」

……あれ？一つなんか違う技が出てきたんだけど……

于「ぐ、くわあああああああああああああああああ！」

すべての魔法が于吉に激突。意外とあっけないな。

于吉は消滅ひた。

それと同時に空間がゆるみ、元の世界に戻る。そして、俺は倒れた。

必然『キングダムゾン』

結果だけが残る！

悲しいことに、無の世界を開いたら一日経過していたらしい。なんか虎牢関でぶつかりあっているところを恋が拾ったらしい。

そいでもって只今正座中

何故か…

月「きいてますか！兄様！」

そこまではいい。が、

華「あの于吉とは誰だか知らないけど、ほんと、無理はやめてほしいわ。」

華琳と

桃「わかりましたか？」

桃香と

策「貴方にはほんと…」

孫策がいた。

袁紹は何故か泣いて帰ったらしい。どうやら董卓を知って自分の失敗が悲しかったのだらう。（本当は于吉を送り込み、殺しにかかったことを知り、会わせる顔が無いと後悔して帰ったらしい。）

そして、何故か反董卓連合軍は終結し、それどころかその連合軍と同盟まで組んだらしい。（原因は于吉という存在を恋から聞いたら

しい。恋はこう述べていた。全員殺されると。あながち間違っ  
ないが、恋が倒される程の力を持っているのなら同盟して倒すか  
なったらしい。(都合主義め)

聖「あああああ！もう耐えられん！「まちい…」あ！？###

一「テメエの相手は俺がしてやんよお。##

華「ちよ、一刀！なにやってるのよ！」

聖「ああ？##テメエ誰に喧嘩売ってんのかわかってんのかああん  
！？###

一「教えて下さいよ…先輩？##

両者武器を出現させる。

俺が刀で北郷が又ンチャクだ。

桃「どこから出したの！？」

聖「上等だ！ぶっ倒してやんよ！##

俺は刀をふりおろす。

一「泣いて謝んなよオラア！##

又ンチャクを振るわれる。

この勝負方法は勿論！

聖「ダダダダダダ」

一「オラオラオラオラ」

指相撲だ！

「刀と聖以外「向こうでやれええええ！！！！##」

「・聖「ひゃいひゃいん！！」

こうして反董卓連合軍は終結した。



第二十四話 漆黒の董旗（訂正）（前書き）

超訂正した！さあこれをよんでた人はわかりますよね？私の暴走でちよつと作品が粉 砕しちゃったら不味いので、ね。

第二十四話 漆黒の董旗（訂正）

…もつかれこれなんだかんだよくわからないがなんか反董卓連合軍が終結した。

そこで！そろそろ董卓軍はなんだかんだで勢力が一番上だし、色々な勢力に協力依頼やらなんだかんだで忙しい。

そこで見返りみたいな感じでくるんだが…それが大半武将がしばらく滞在してお手伝いしますよみたいな感じの、いわゆる人材派遣をしてくる。その目的が…大半俺はどんな奴だかみたいなのが目的でくるやつが多い。

ま、見てくれや。俺の部隊の人材を！

今、兵の訓練してるんだが、俺のすることはほとんどない。

季「兄ちゃん！今日も特訓してよ！」

まずは俺の親衛隊の季衣。

流「私は料理をします。そろそろお昼なので…。」流琉も当然親衛隊だからな。

そして…

赤「隊長、兵の訓練はすこしここをこうしてみては…」

副隊長を勤めている赤花も当然。しかし、鍛練場を見ると…

??「こらそこ！そのようなことでねをあげるな！」

魏からの人材派遣によって送られてきた楽進、真名までも教えてくれて、凧と言っらしい。

??「聖隊長がいるから凧ちゃんのはりきってるの〜!！」

“なの〜”が口癖の奴は于禁、真名は沙和という。

凧「お！／＼お前たちはなにをやっているんだ！／＼そんなことより早く訓練しろ！聖隊長が見ておられるだろう!！」

??「ほらやつぱさうなんやな。こんな武将いてもしょうがないしな…そや！カラクリでもつくってくるか！」

関西弁喋る奴は李典、真名を真桜という。この三人は兵の訓練を中心として活動している。さてさて、まだまだ紹介は終わってないよ！

??「聖さん、この書類の事です…」

はい、問題です！この人物は誰でしょうか？ヒントは水色の髪をしていて身長が小さな小さな…

??「……今失礼なことを考えてませんでしたか？」

聖「い、いやそんなことはないよ！しかし頼もしいな。君がきてく

れるなんて…」

??「あわわ…／／／」

もうわかったでしょう？

正解は…

聖「いや本当に有り難いよ！雛里！」

は〜い！正解は雛里でした〜！

桃香からは雛里がきています！このじてんでおおくね？って思うけど俺の部隊が強くなっているから良しとしよう！

??「聖さん、警備の方は終わりました。」

聖「あ、お疲れさん。」

孫策軍からは呂蒙がきている。真名は亞莎という。

彼女はまだ知略系には手をつけていない状況だった。すなわち、武術一筋？の状況だ。弱くはない。かといって強くもない。微妙なところだった。

凧「聖隊長！調練の方が終わりました！」

お！？丁度三人組…って、あの二人はどっか行ったな。ま、別にいいけどね。

聖「んじゃ、丁度いいところに皆集まったし、例のあの戦い方でやるか。あ、雛里、後で俺の書類の手伝いお願いね。」

雛「…!!はい!!」

なんかわかんねえけど手伝ってくれて頼むと凄くいい笑顔するんだよな、皆。

もしかして、仕事がそんなに好きなのかな？少しは渋るとかしないの？

さて、鍛練しますか。

《あっはっはっはあ…》

今、俺は鍛練を終えて、そしてやるべきことはやったからとりあえず休憩中。

あ、そして駄神がなんで落ち込んでいるかというところ、どうやらあの映画を神全てに公開した結果、ハンマーで全て壊されたらしい。

今、月と詠と俺のみが会議室にいる。他の皆はなにやら予定がある

とか言つて来ない。あ、客将は会議に参加しない予定だったから別にいいがな。

月「聖兄様、いよいよ明日ですね。」

聖「ああ、そつだな。この同名つて結構単純にできちゃったよな。」

詠「聖？明日何処に行くかわかつてるわよね？」

明日の予定とは、雛里が桃香の元に戻ると同時に俺もそれについていって客将をするというね…何故俺なんだ？月の兄だぞ？なのに俺が？

聖「なあ、なんで俺が客将しなくちゃいけないんだ？」

詠「あつちから大物の客将がきたんだからこつちだつて強い客将を送らなくちゃ駄目でしょ？それに、聖は確かに月の兄だけれど一応“武将”だからね？」

なんと…

畜生…

— 蜀軍 —

( ^ o ^ )

おっと、想像図が少し違うな。蜀軍じゃないな。

ヒラヒラ

ん？紙が落ちてきた。なにになに？

“そのところは勘弁だぜ b y 作者”

だそうです、はい。気にしない方がいいようです。

はあ〜…

バダンツ！！

いきなり扉があいた。

入ってきたのは…

赤「体調！じゃなくて隊長！！お見せしたいものがあるので来てください！」

へ！？

いきなりなに？なんなの？馬鹿な…馬鹿じゃないな。うん、ぜったいそうだ。

ガシツ！グイツ！

赤「早く来てください！」

聖「いででででで！！ちよっ！どこつかんでんだ！か、髪の毛つかむな！うおおお！髪の毛が！髪が抜ける！」

《アンパン栄光あれー！》

出だしが神（という名の変態）の台詞ですんません！

とということ今何処にいるかと《ハア、ハア、ハア、ハア、プリア最  
高》

…きを取り直して、今d《全ては、我が覇道おたくのために！！》

……くそ、もう一度。なかなか説明できないな。いm《タクシーで  
う〇こもらして

大目玉》

いやあんた！何故俺の台詞を邪魔するんだ！しかもいきなり俳句展  
開！？ってか、結構ありそうで恐ろしいな！？お前實際やっちゃまっ  
たとか言わないよな！？



《ふ、なにを勘違いしている…威風堂々とやっただんだ！ただ漏らしたわけではない！》

マジかよ！？ってか神の世界にタクシーあんの！？そろそろ俺の台詞言わせる！でないと題名が…

恋姫無双転生物語

（神様が行く）

になっちまうだろ！！

《いいじゃん！その方がお前も幸せだ！な？読者の皆もわかるだろ？》

わかんねーよ！

ヒラヒラ

ん？本日二回目の紙ヒライベント。なにになに？

《おい、俺のところにもきたぞ。》

“ 神と聖へ

てめえらメタ発言しすぎじゃ！ずっと黙ってたんだがもう限界じゃ！てめーら言つとくがこの世界では俺が一番偉いんだぞ！てめえらの存在消すぞ！物語削除するぞ！

作者より”



たことにするぞ…さあ、我が主（作者）に謝れ！」

いやああああ！！作者さんの遣いがあのバイオハワードであるライフル構えてる！てか両手！？ライフル片手ずつ持つてるよ！？

バキューン！！！！

……。

謎の男「俺は本気だ…さあ、謝るか？それとも… カチャ…」

聖「すいませんでしたー！以後このような事態にならないよう気を付けます！」

作者「…次はない。」

シユン

ありゃ？作者の遣いらしき人が消えた？もしかして幻覚？いや、違う…かな？しかし作者、すんげえもん送り込みやがって、おい、馱神？

《……………。》

神が…死んでる…あり得ねえ…。

とりあえず、今の現状を説明しよう。

髪の毛引つ張られて赤花に案内されてやってきたのが…庭であった。なにやら布で包んである。その周りには…客将のメンバーやらうちの軍の…てか、全員集まってる。何故か後ろに月と詠の気配がする。

赤「体長！じゃなくて隊長！隊長に贈りたいものがあるんです！」

へ？プレゼント？

真「うちらでつくったんや！」

霞「気に入ってくれたらええな。」

なんか関西弁二人組がそろった。

沙「隊長の贈り物は…これなの〜！」

布がとられ、中に入ったのは…旗だった。

しかもかつこいいい。

色は漆黑、その真ん中に董とかかかっていた。紫で。

凧「た、隊長のためつくったのですが…。」

沙「なんだかんだで頑張ったのは凧ちゃんなの〜！」

凧「ば、馬鹿！／＼／」

雖「わ、私も…その…あう。」

恋「…聖のため、頑張った。」

雄「お、お気にめしましたか？」

音「恋殿がつくったのですから感謝するのです!」

……。

詠「みんな、貴方のためにつくったのよ。」

月「うけとってください、聖兄様。」

……。

やべ、俺は今、猛烈に感動してる。

赤「私たちの隊にはまだちゃんとした旗が作られてなかったのだから、私たちが作りました。」

まさか、これ程嬉しいとは…

聖「みんな………」

俺はゆっくりと旗へ歩み、そして旗を片手にもち、振り上げる。

聖「皆、ありがとう！まずは心から礼を言っ！君たちの気持ち（な  
のかな？とりあえず言ってみた。）、受け取った！」

わあああああ！！

うへ！？俺の隊の兵達も集まってきた！

霞「うおっしゃ！今日は宴や！みんなのむでー！」

聖以外「おおおお！」

うほ！？まさかのフィーバー！？なんと月も微笑んで、詠と雛里も  
恥ずかしながらも腕を上げてノリにのってる！？マジで！？

ま、いいや。今日は今日で楽しんどこ。

こうして漆黒の旗を手にした童雷、ここにまた漆黒の童雷という名  
前がついた。

おまけ

聖「へ？」

詠「あんたどうしてこんなに喜んでんの？」

聖「え？だって皆からもらったんだぜ？それにかっこいいし、戦場に出したらけっこういいぜ？」

詠「はあ、あんたね…この旗あまり使えないわよ。」

聖「へ？何故？」

詠「当然よ。貴方が勝手に同盟なんて組むからよ。その方が争いなしでいいんだけどね。」

聖「……………ノオオオオオオオオオ！」

第二十四話 漆黒の董旗（訂正）（後書き）

…うん、あんまり変わってないね。まあ気にしない！そして…テス  
トがオワタ！

＼（＾○＾）／



第二十四話 表と裏（前書き）

ふははははは！戻ってきたぞ！我は帰ってきた！

さてさて、超ながく間があいてしまった。いや、めっさ困ってんですよ。マジで。

超がつく程大変。とにかく、御覧くださいな



雛「あの、落ち着いてください。」

雛里のツッコミ…だと？か、勝てない…雛里を…越す手段は…無い…。

《諦めるなよ！もっと、しじみ喰えよ！！》

左様か…。

おっと、現状の説明を忘れてた。今はさっきも話した通り、桃香の軍に向かって今馬（白紀）を進めている。それで、今雛里は何故か俺の馬に乗っている。え？何故そんなに興奮してるかって？え？だって雛里だよ？雛里がたまにへうボイス出してくるんだよ？もう狂うしかないっしょ？だって雛里だよ？……………

同じ様な説明を繰り返しているため割愛。

聖「それで、どうした雛里？」

本題に入るぜえ、雛里がなんか知らんが慌ててるんだよ…

雛「はい、前方を見てください。あの黒い服を来た人が見えます。」

うん、見える。あるえ？何故俺気づかなかった？前にいるのに、何故気づかなかった？あるえ？可笑しすぎるな？

ピタリッ

白紀を止める。一応ね。なんか殺気が少し…。

聖「雛里、ちよつと行ってくるから白紀からおりるなよ。」

白紀からおり、黒い奴のところへいく。おつと、いい忘れてたが、ちゃんと部隊みたいなので移動してるから平気だぞ。俺がとまったらちゃんと部隊も止まったし、どんな訓練してんだ？

そして、黒男の元へつく。しかし、相手はなにも話さない。

だが、妙な気分だな。まるで自分を見ているようだ。身長も俺と同じ、その男は黒いコートを来ている。そして、フードを深々とかぶっている。あるえ？ちよつとこの服装、どっかで見たな。もしかして…機関！？んなわけないか。

聖「お前は誰だ？俺らになんの用だ？」

一応きく。

??「俺はあいつらに用は無い。お前に用がある。」

俺に？ま、まさか！お前の狙いは俺の身体か！？同性愛なのか！？

??「同性愛…だと？その言葉を口に出すな！不愉快だ！」

俺は何も話してません！君も同性愛が嫌いか…気が合いそうだ。おつと、それより話からずれたな。

聖「もう一度きく、お前は誰だ？」

さて、どう答えるのかな？望むのならば少しふざけてほしいんだが…

??「仕方ない…そんなに俺の正体が知りたいのか…わかったよ、教えてやるぜ。」

そして、フードをはずす。

な！？俺と顔がそっくりだと！？俺の髪が白になった奴…だと！？

??「私だ…！」

でたああああ！こやつ、性格もさりげなく俺に似ている！なら、俺ものらなくてはい！

聖「私か！？」

??「私だ…！」

聖「そうなのか？」

??「そうなのだ!」

聖「そーなのかー。」

??「そーなのだー。」

兵1「なにをしているのですか…」

一人の我が部隊の兵が話しかけてきた。な、何故のらない!

聖「お前、そこはのろつぜ?」

兵1「え!?!」

??「そうだろ、俺だって空気よんだんだ、お前はつかじゃねえの?」

兵1「……………」

兵2「大丈夫だ、お前は悪くない。」

なんか馬鹿どもが慰めてやがる。ま、いいか。さて、本題に入るか。

聖「なあ、お前って何者?」

??「何者…か…。答える必要ないな。何故なら俺は…………お前だから。」

…全然わからん。つまりなに?俺の偽者?

??「いや、そうであってそうでない。」

心をよむな。読心術とか使われると結構困る。

??「まあ、今は俺の正体はどうでもいい。」

いや、結構重要だぞ。

??「ふふふ、まずはお前を試す。」

聖「試す? いったいなにをする気だ!」

しかし、それは間違いだった。今からおこることは…正に絶望。

??「さあ、これがなんなのかわかるか!」

聖「こ、これは!」

俺のそっくりさんは虫籠をとりだした。中には大量の…

カサカサカサ

…ゴキブリであつた…めっちゃ無理…

聖「ちょ、それを…どうする気だ…まさかと思うが、それを…」

??「その通りだ! さあ、貴様の力を見せてみる!」

すると俺のそっくりさんも俺とよく似ている大剣、獄神を出していた。今はそれどころじゃない。

聖「馬鹿野郎！そんなことをしたら…人類が滅び、小惑星が衝突して、粉碎！玉砕！大喝采！になっちまうじゃねえか！」

??「ひはは！もう遅い！」

《お疲れだ、君が死んだら、主人公は俺がやるから安心しろ。》

それが一番心配だあああああ！！

??「さあ、狂え！」

ブーン！！

聖「ぎゃああああ！！黒い…いや茶色いバイオ○ザードが近づいてくりゆうううう！！！」

??「はははは！さあ、もがくがいい！はは　ピッ　は……………  
ぎゃああああ！！！！！」

聖「く、くるなあああ！！！」

??「て、敵はあつちだ！お、俺に…やはり虫は滅びよおおお！！！」

この時、雛里達は思った。こいつら、何がしたいんだと。



聖「はあ、はあ、お前、もつこんなことするな…」

??「はあ、はい。反省しております。」

聖「やはり…」

??「虫は…」

聖・??「滅びればいい…」

本当にこいつ、なんだ？俺と同じ武器を使うだけじゃなく、苦手なものまでも…

聖「結局、お前はなんなんだ？」

流石にききたいな。

??「ああ、わかった。ただ、ちょっとまってくれ…ゲホッ！ゴホッ！」

聖「おいおい、大丈夫かよ…」

??「す、すまん…」

《なあなあ、こいつって確か悪役のはずだよな？なあ、作者さん、どうなってる？ん？こんなはずじゃなかった？いや、しかし現に主

人公とラスボスが超友好的になっちまったぞ。え？一応戦わせるから大丈夫？まあ、信じてみるか。》

おい、作者！なに駄神と会話しちゃってんの！？しかもネタバレ！ネタバレが生じたぞ！おい！どないせいっちゅうねん！俺、この後こいつが大物つつつても驚けないぜ！？いや、マジで！え！？驚け！？無茶苦茶だ！！！

??「俺は…お前のもう一つの存在…つまり、裏の存在。」

くそ！これはどう反応すればいい！

聖「へ？あ、うわーーーーーマジでーーーーー。(超棒読み)」

聖裏(以降裏)「え？少しは驚けよ！何故！？何故なの！？さてはネタバレ！？大変！！」

え？もつとまともな反応しろ？わかった、やってみる。

聖「へ？うえ！？マジで！？ヤベ！大発見！どうしよう！この世界破滅！」

裏「うえ！？俺の存在世界破滅まで危険！？」

聖「うえ！？違うの！？あたし知らなかったー！じゃあなんのことー？」

裏「そそそ、そんなことはどうでもいい。」

聖「それより、何故に？俺の裏なら裏で平和に暮らせばいいの

に。」

裏「あ、え？ごめんごめん。つい目的言うの忘れてたわ。んじゃ、言うぞ。お前の身体、支配させてもらう。つまり、お前の身体、俺がのっとなってやるって話だ。」

…あのさ、この話し方でいまいち恐怖感がわかないのって俺だけ？いや、だって、のっとられるのはやだけど、こいつ性格がまるっきり俺だし…別に悪用しなさそう。

は！？しかし、重要な事を忘れていた！我が妹、月のアルティメットへうボイスが聞けなくなるではないか！これは大変！！

聖「しかし、何故に俺の身体支配するの？」

裏「え？だって……」

さて、ここで問題！こいつ、ラスボスかもしれない大物なのに信じられない事を理由に俺の身体を支配しようとしています。さて、それはなんでしよう？

ヒントは、俺の性格さ

さあ、答えですぞ！

裏「楽しそうじゃん」

…悲しい。そんだけの理由で俺の身体を…

裏「さて、ちょっとお力を拝見させていただきますよ〜。」

裏の俺は獄神らしきものをかまえる。よし、俺も構えるぜ。

裏「んじゃ、行くよ〜」

裏の俺がつっこんでき…速っ！！！！

ガキイイイイイン！！

ふりおろされた大剣を受け止めた。

あぶねえ、こえええ…

俺はいつたん距離をおく。魔法でもやるか。

聖「『ホーリー』!!」

光の柱が何本も裏の俺に行く。

が、

裏「あるえ？遅すぎだよ」

俺の後ろに何故かいた。

ガキイイイイイン!

俺は攻撃は防いだが、威力が絶大で吹っ飛ばされた。強っ!!めっ  
さ強っ!!

そしてまた…

裏「タイガーアッパーカット!!」

吹っ飛んでる最中に下からアッパーが飛んできた。神じゃ…強っ!!

ドコッ!!

ドサッ!

やべ、身体が動かねえ…初敗北…二つ名、どうなるんだろう…

裏「不正義こそが勝利の源なり…」

いきなり意味不明の台詞を言う裏の俺。こんど、俺も試してみよう。

裏「まだ弱いねえ」 お前が強くなるまでまってあげから、ま、頑張れ。」

裏の俺は消えた。

それと同時に俺の意識もブラックアウトした。

一言さっさとさっさと?

あいつ、マジでなんなの？

おまけ

月「え？聖兄様がやられた!？」

詠「ちょっと!月!落ち着きなさいよ!」

ジャキツ…

雄「そ、その鎌はどこから出したんですか!?!?落ち着いてください!」

月「聖兄様を…よくも…」

霞「おちつきいや！？ホンマ危ないやろ！？」

詠「誰かああああ！！月を戻してええええ！！！！」



第二十四話 表と裏（後書き）

ラスボスオワタ＼（＾o＾）／

ラスボスオワタ＼（＾o＾）／

どないしよう、というか、そうとう放置になってしまってたんだが、自分の思っていた以上の人気…周りとは比べないでね。絶対比にならないから

とにかく、自分の予想したよりも結構あった！びっくらこいちゃったぜ！

とにかく、これからも頑張ります。あ、いい忘れてましたが、私は駄文の頂点に君臨した！はははははははははは！もうやだ！だが、めげないぜえ、何故なら私は馬鹿だから！

ごめんなさい、暑さで狂ってしまいました。

お知らせ(前書き)

申し訳ございません。

前書き…それしか書くこと無し。

## お知らせ

これを読んでくれていた皆様、もうお分かりですよ？

何度も読み直しました。うん、意味不明。長く理由言うのは嫌いなんで、結論から申し上げます。停止させます。

あれはふざけすぎました。うん、調子にのった。ですから、今度はちゃんと書き直し、前よりかは断然良い作品を作ろうと思います。つてか、あの時本当になめてた。

こんな駄文の塊でも楽しんで読んでくれていた皆様、申し訳ございません。

次は絶対前よりかはマシにしていずれか、また書き直します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9859s/>

---

恋姫無双転生物語

2011年9月15日03時18分発行